共同住宅建設に伴う

鬼塚遺跡第29次発掘調査概報

2007.3

東大阪市教育委員会

共同住宅建設に伴う

鬼塚遺跡第29次発掘調査概報

2007.3

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懐に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。今回報告します鬼塚遺跡もその一つで、本遺跡の周辺では、鬼虎川遺跡や西ノ辻遺跡など、中学校や高等学校の歴史教科書に散見されるような全国的に著名な弥生時代の遺跡が分布し、原始古代に大集落が営まれた様子を今に伝えています。

鬼塚遺跡一帯は、伸線工場の街枚岡の中心地で、昭和40年代から50年代にかけて繁栄した地域です。その後産業構造の大きな変革を経て、伸線工場の跡地には高層のマンションや戸建て住宅が立ち並び、市街地が大きく進んでいます。

今回の第29次調査は、旧郵政省宿舎や伸線工場の跡地に高層の共同住宅が計画され、遺跡が破壊されるために事前の発掘調査として実施されたものです。

鬼塚遺跡は、従前より弥生時代の開始を考える上で重要な遺跡とされてきました。ただその様相などは、いまだ不明な点が多くあります。今回の調査では、縄文時代晩期中葉に属する滋賀里ⅢＢ式の土器が多く見つかり、その時期に伴うと考えられる土偶も2点発見されました。弥生時代では、穿孔された完形に近い土器が出土し、人骨が埋納された土坑墓も見つかっています。このため調査地周辺に墓域が広がっているものと推定されます。これらの調査成果から当時の人々の生活ぶりをうかがうことができます。

本書が地域の文化財学習資料として、広く市民の方々にお読みいただくことを願っております。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成19年３月

東大阪市教育委員会

例　　言

1．本書は、株式会社ユニチカエステートが計画した共同住宅建設に伴う鬼塚遺跡第29次発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、株式会社ユニチカエステートの依頼を受けて東大阪市教育委員会文化財課が実施した。

3．発掘調査、遺物整理及び報告書刊行にかかわる費用は全額株式会社ユニチカエステートが用意・負担した。

4．発掘調査は、平成18年9月11日から同年11月22日まで行った。遺物整理及び報告書作成作業は平成19年3月31日まで実施した。

5．現地調査は菅原章太が、遺物整理は才原金弘が担当して行なった。

6．現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』(2000年版)に準拠し、記号表示も同書に従った。

7．本書の執筆はⅥ2) ～6)を才原金弘、その他の章節及び編集を菅原章太が担当した。

8．考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』(2002年)の表記に従った。

9．調査では、遺構名称に略号を使用した。略号は以下のとおりである。

ＳＰ	ピット・柱穴	ＳＤ	溝・濠・溝状遺構
ＳＫ	土坑	ＳＥ	井戸
ＳＸ	その他の遺構	ＮＲ	自然河川・自然流路

10. 現場作業には米田　一平・内藤　隆、遺物整理には上田　礼、八田　美代子、岩崎　宏、水田敏が従事した。

11. 現地調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々や関係諸機関からご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。
株式会社島田組
設楽　博己・大野　薫・矢野　健一

本　文　目　次

Ⅰ　調査にいたる経過……1
Ⅱ　既往の調査、位置と環境……2
Ⅲ　調査方法と地区割、調査経過……4
Ⅳ　Ａ地区の調査……5
　1）　層位……5
　2）　遺構……7
Ⅴ　Ｂ地区・Ｃ地区・Ｄ地区の調査……17
Ⅵ　出土遺物……20
　1）　縄文土器……20
　2）　弥生土器……31
　3）　古墳時代以降の土器……37
　4）　土製品……37
　5）　石器……43
　6）　木製品……43
Ⅶ　まとめ……44

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図……1
第２図　鬼塚遺跡と周辺の遺跡……3
第３図　調査トレンチ位置図……4
第４図　Ａ地区土層断面図……6
第５図　Ａ地区西区・中区遺構面Ⅰ検出遺構平面図……8
第６図　ＳＤ10Ｂ平面図……9
第７図　ＮＲ1平面図……9
第８図　ＳＸ201実測図……10
第９図　Ａ地区中区遺構面Ⅱ検出遺構平面図……11
第10図　Ａ地区西区遺構面Ⅲ検出遺構平面図……13
第11図　各遺構断面図……13
第12図　Ａ地区中区・東区遺構面Ⅳ検出遺構平面図……15～16
第13図　Ｂ・Ｃ・Ｄ地区トレンチ平面、土層断面図……17
第14図　深鉢の器形分類……20
第15図　浅鉢の器形分類……21
第16図　縄文土器実測図(1)……22
第17図　縄文土器実測図(2)……23
第18図　縄文土器実測図(3)……24
第19図　縄文土器実測図(4)……25
第20図　縄文土器実測図(5)……26

第21図　縄文土器実測図(6) ……27
第22図　縄文土器実測図(7) ……28
第23図　縄文土器実測図(8) ……29
第24図　弥生土器実測図(1) ……32
第25図　弥生土器実測図(2) ……33
第26図　弥生土器・土師器・須恵器実測図……35
第27図　弥生土器実測図(3) ……36
第28図　土製品・石器実測図……38
第29図　石製品実測図……39
第30図　木製品実測図(1) ……40
第31図　木製品実測図(2) ……41
第32図　木製品実測図(3) ……42
第33図　方形周溝墓想定図……46

図　版　目　次

図版１　遺構　１　Ａ地区調査前の状況(北東より)
　　２　Ａ地区西区遺構面Ⅰ遺構検出状況(南より)
　　３　Ａ地区西区遺構面Ⅰ遺構掘削後状況(南より)
図版２　遺構　１　Ａ地区中区遺構面Ⅰ遺構検出状況(南より)
　　２　Ａ地区中区遺構面ＩＳＤ10-Ａ掘削後状況(南より)
　　３　Ａ地区中区遺構面Ⅰ遺構掘削後状況(南より)
図版３　遺構　１　Ａ地区中区遺構面Ⅱ遺構検出状況(南より)
　　２　Ａ地区中区遺構面ⅡＳＤ103掘削後状況(東より)
　　３　Ａ地区中区遺構面ⅡＳＫ104掘削後状況(西より)
図版４　遺構　１　Ａ地区西区ＮＲ1掘削後状況(南より)
　　２　Ａ地区西区遺構面ⅢＮＲ2掘削後状況(西より)
　　３　同上近景(南西より)
図版５　遺構　１　Ａ地区西区ＳＸ201検出状況(南より)
　　２　同上　土器・木器・礫・桃核出土状況
　　３　同上　下部　杭ほか出土状況(西より)
図版６　遺構　１　Ａ地区中区遺構面Ⅳ遺構検出状況(南より)
　　２　Ａ地区中区遺構面Ⅳ遺構掘削後状況(南より)
　　３　Ａ地区中区遺構面ⅣＳＤ300掘削後状況(南より)
図版７　遺構　１　Ａ地区東区遺構面Ⅳ遺構検出状況(南より)
　　２　Ａ地区東区遺構面Ⅳ遺構掘削後状況(南より)
　　３　Ａ地区東区遺構面Ⅳピット群検出状況(南より)
図版８　遺構　１　Ａ地区東区遺構面ⅣＳＫ106人骨出土状況(南より)
　　２　Ａ地区中区遺構面ⅣＳＫ301・ＳＫ328検出状況(西より)
　　３　Ａ地区中区遺構面ⅣＳＫ301人骨出土状況(北より)

図版９　遺構　１　Ａ地区中区遺構面Ⅳ ＳＫ302人骨出土状況(西より)
　　２　Ａ地区中区遺構面Ⅳ ＳＫ328人骨出土状況(西より)
　　３　同上　近景(頭骨周辺)
図版10　遺構　１　Ａ地区中区遺構面Ⅲ ＳＤ103直上土偶出土状況(北より)
　　２　Ａ地区東区遺構面Ⅳ ＳＰ114土偶出土状況(西より)
　　３　Ａ地区中区遺構面Ⅱ ＳＸ100内石器出土状況(南より)
図版11　遺構　１　Ａ地区中区(Ａ15区)第６層内縄文土器出土状況(南より)
　　２　Ａ地区東区(Ａ23区)第６層内縄文土器出土状況(南より)
　　３　Ａ地区東区(Ａ18区)第６層内縄文土器出土状況(南より)
図版12　遺構　１　Ａ地区中区遺構面Ⅱ ＳＤ103弥生土器出土状況(北より)
　　２　Ａ地区中区(Ａ10～11区)遺構面Ⅳ直上弥生土器群出土状況(北より)
　　３　Ａ地区中区(Ａ12区)遺構面Ⅳ直上弥生土器出土状況(北より)
図版13　遺構　１　Ａ地区南壁断面(東側)
　　２　Ａ地区南壁断面(西側)
　　３　現地説明会風景
図版14　遺構　１　Ｂ地区調査前の状況(東より)
　　２　Ｂ地区北壁断面
　　３　Ｄ地区(Ｄ4区)南壁断面
図版15　遺構　１　Ｃ地区調査前の状況(東より)
　　２　Ｃ地区掘削完了後の状況(東より)
　　３　Ｃ地区南壁断面
図版16　遺物　　ＳＸ100・遺物包含層出土　縄文土器深鉢、
　　方形周溝墓出土　弥生土器壷
図版17　遺物　　方形周溝墓出土　弥生土器壷
図版18　遺物　　方形周溝墓出土　弥生土器壷・鉢
図版19　遺物　　方形周溝墓出土　弥生土器水差形土器・甕
図版20　遺物　　方形周溝墓・ＳＸ201出土　弥生土器甕、
　　ＮＲ1・ＳＸ201・遺物包含層出土　土師器甕・高杯・小型丸底壷
　　ＮＲ1出土　韓式系土器鉢
図版21　遺物　１　ＳＸ100出土　縄文土器浅鉢
　　２　ＳＸ100出土　縄文土器深鉢・底部
図版22　遺物　１　ＳＸ100出土　縄文土器深鉢
　　２　ＳＸ100出土　縄文土器深鉢
図版23　遺物　１　ＳＸ100出土　縄文土器深鉢・浅鉢(表)
　　２　同上(裏)
図版24　遺物　１　ＳＸ100出土　縄文土器深鉢
　　２　ＳＸ99、ＳＫ104・121、ＳＤ102出土　縄文土器浅鉢・深鉢・底部
図版25　遺物　１　ＳＸ99出土　縄文土器深鉢・浅鉢
　　２　ＳＫ104・121、ＳＤ103・300出土　縄文土器深鉢
図版26　遺物　１　ＳＰ123・310・315、ＳＤ102、遺物包含層出土　縄文土器深鉢

		2	遺物包含層出土　縄文土器深鉢
図版27	遺物	1	遺物包含層出土　縄文土器深鉢・浅鉢・器種不明・底部
		2	ＳＤ300、遺物包含層出土　縄文土器深鉢
図版28	遺物	1	遺物包含層出土　縄文土器浅鉢
		2	遺物包含層出土　縄文土器底部
図版29	遺物	1	遺物包含層出土　縄文土器底部
		2	遺物包含層出土　縄文土器深鉢
図版30	遺物	1	遺物包含層出土　縄文土器深鉢
		2	遺物包含層出土　縄文土器深鉢
図版31	遺物	1	遺物包含層出土　縄文土器深鉢
		2	遺物包含層出土　縄文土器深鉢
図版32	遺物	1	遺物包含層出土　縄文土器深鉢
		2	遺物包含層出土　縄文土器深鉢
図版33	遺物	1	遺物包含層出土　縄文土器深鉢
		2	ＳＰ108、ＳＫ104・121、ＳＤ102・300、ＳＸ99出土　縄文土器浅鉢
図版34	遺物	1	遺物包含層出土　縄文土器浅鉢(表)
		2	同上(裏)
図版35	遺物	1	遺物包含層出土　縄文土器浅鉢(表)
		2	同上(裏)
図版36	遺物	1	遺物包含層出土　縄文土器浅鉢(表)
		2	同上(裏)
図版37	遺物	1	ＳＸ99・100出土　弥生土器壷・高杯・壷蓋・甕
		2	ＳＸ201、ＳＤ300、ＮＲ1、ＳＫ121出土　弥生土器甕・鉢・底部
図版38	遺物	1	ＳＫ121・ＮＲ1出土　弥生土器底部、 ＳＤ6出土　土師器皿、 遺物包含層出土　須恵器蓋杯
		2	遺物包含層出土　弥生土器壷・細頸壷・甕
図版39	遺物	1	遺物包含層出土　弥生土器高杯・鉢
		2	遺物包含層出土　弥生土器底部
図版40	遺物	1	土製品
		2	土製品
図版41	遺物		石器
図版42	遺物		石器
図版43	遺物		石器
図版44	遺物		木製品
図版45	遺物		木製品
図版46	遺物		木製品

表　目　次

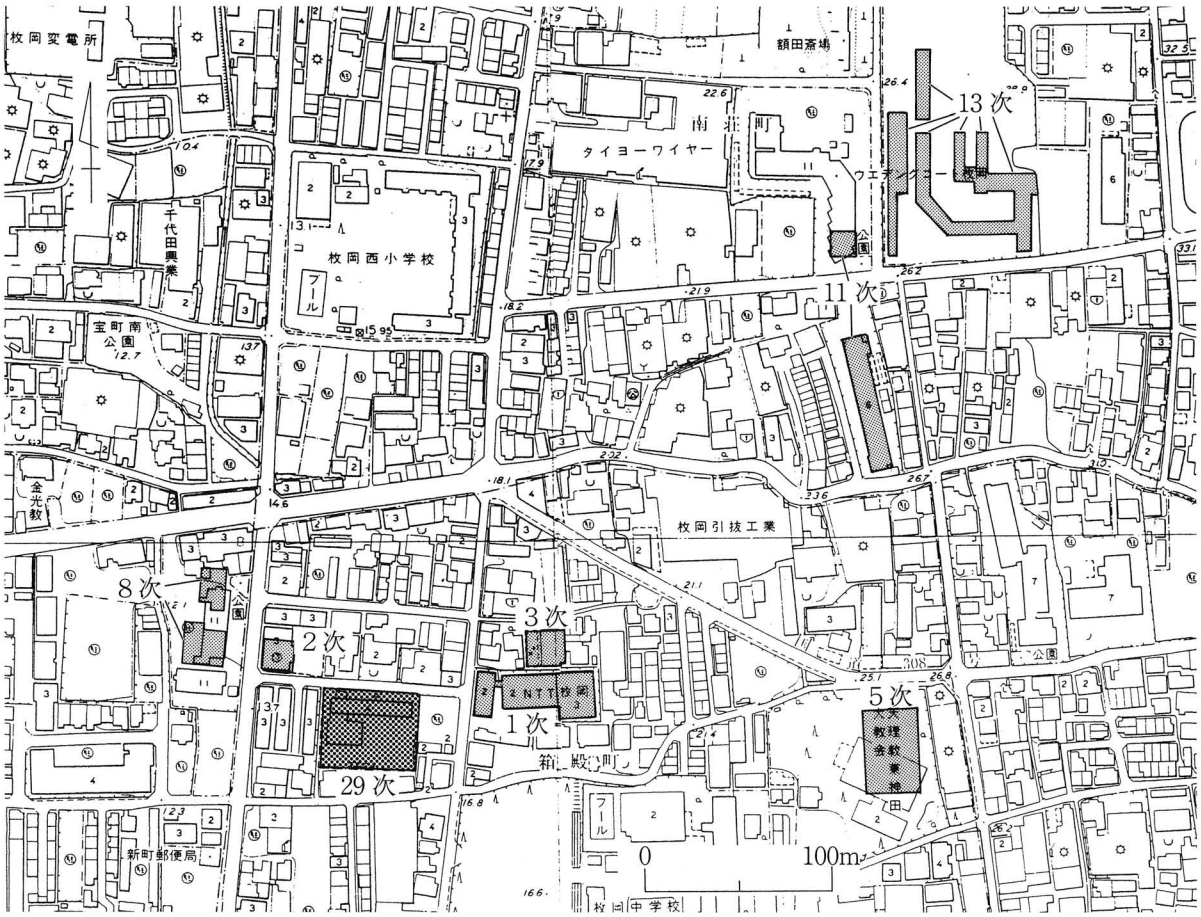
第１表　Ａ地区ピット一覧表…… 18～19

Ⅰ　調査にいたる経過

鬼塚遺跡は、東大阪市箱殿町・新町・宝町・南荘町・豊浦町にわたる縄文時代中期末から室町時代の集落跡である。遺跡は東西約800m南北約500mの範囲と推定されている。遺跡は豊浦川と北側の谷筋が形成する扇状地の扇央部上、標高10～35mに立地している。

昭和35年に旧枚岡電報電話局の建設工事が行なわれた際、排土の中から多量の晩期縄文土器と前期弥生土器が発見されたことから遺跡の存在が知られるようになった。この地点は現在第1次調査（Ａ地点）とされている。その後現在まで28次に及ぶ発掘調査が実施され、縄文時代の住居址・土坑墓、弥生時代の方形周溝墓・住居址、古墳時代の掘立柱建物・水田址・石組遺構、奈良～平安時代前期の掘立柱建物等の遺構のほか、該期の遺物が多数発見されている。

平成18年６月、東大阪市箱殿町466番地で共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。建設工事は杭基礎工事を伴うもので埋蔵文化財への影響が考えられたため、事前の確認調査が必要である旨、届出者に通知した。確認調査は平成18年７月13日に実施した。調査の結果、現地表下1.3～2.0mで縄文時代晩期の遺物包含層が検出された。調査結果を受けてその取扱いについて直ちに協議に入った。協議を重ねた結果、事前の発掘調査を実施することで双方合意した。調査は平成18年９月11日から11月22日まで行った。調査対象は埋蔵文化財が損壊を受ける箇所から旧郵政省宿舎建設で既破壊を受けた部分を差し引いた箇所とし、調査面積は706.2㎡となった。調査期間中、後述の調査成果が得られたため11月18日に現地説明会を開催した。市民約100名の参加があった。



第１図　調査地位置図

Ⅱ．既往の調査、位置と環境

1）　鬼塚遺跡の調査成果

昭和40年、第1次調査の西約120mの地点で現ＪＡ中河内枚岡支店の建設工事が行なわれ、多数の晩期縄文土器と土偶1点が発見された(第２次調査、Ｂ地点)。昭和43年には第１次調査地の北で初めて発掘調査が実施された(第３次調査、Ｃ地点)。この調査では晩期縄文土器と前期弥生土器が同一の遺物包含層から出土した。近畿地方にあって縄文時代から弥生時代に移行する文化様相をはかる上で、本遺跡が考古学上重要な位置を占めることがこの調査で明らかとなった。第２次調査地から旧国道170号線を挟んですぐ西の第８次調査(H地点)では、縄文～古墳時代の遺構が顕著に見られたが、とくに下層の晩期縄文土器は篠原式直後に接続する滋賀里Ⅳ式古相を示す一括資料として、論者によっては「鬼塚H下層式」と命名されるまでに至っている。

第３次調査で弥生時代後期の壷棺が、第８次調査では中期前半～中葉の方形周溝墓が３基検出されている。第１次調査地の東約180mの第５次調査では、後期の竪穴住居址が発見された。この竪穴住居は火災で焼失したもので、住居内には被災した建築部材や土器類のほか、弥生土器を製作するために備えつけられた粘土塊が遺存しており、弥生人の生活ぶりが窺える貴重な資料を得た。

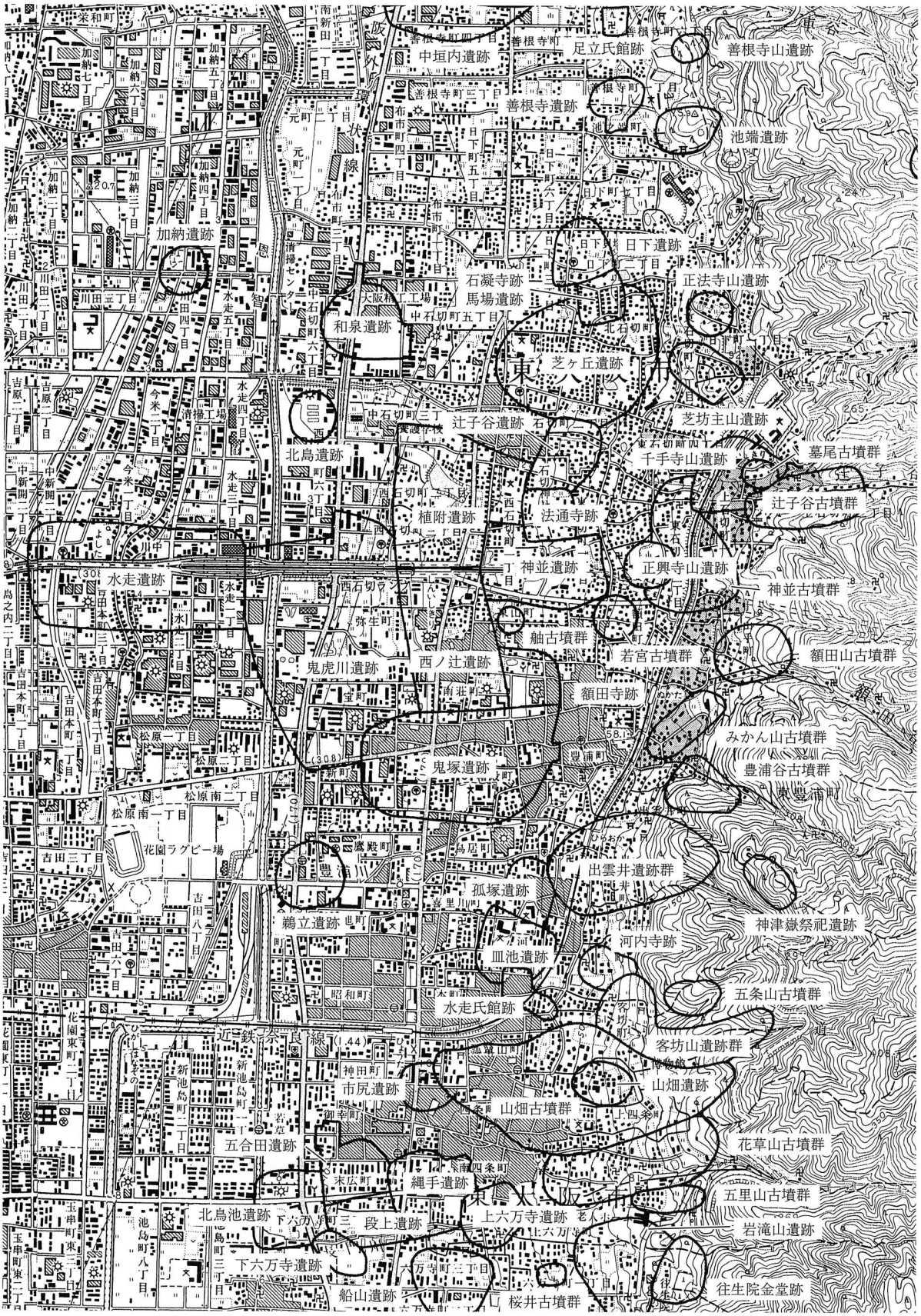
第1次調査の北東約200mにある第11次調査地では、長方形で東西約６m南北約４mの規模を持つ石組遺構が検出された。遺構内から古墳時代中期後半の須恵器・土師器とともに、ウマの歯・脚骨、多量の桃核が出土した。これら出土遺物の様相から石組遺構は特殊な祭祀遺構と考えられている。第11次調査地のすぐ東、遺跡東端にあたる第13次調査では奈良～平安時代前期の掘立柱建物が16棟以上、井戸３基ほかが検出された。このうち井戸２から63点もの墨書土器が出土した。墨書土器では「氏」と記されたものが30点を数えるのが特徴である。

以上をまとめると、概ね縄文～弥生時代の集落は枚岡中学校の周辺、古墳～平安時代の集落はその北東の山側に広がると推定されよう。また本遺跡は時期により居住域を移動するが、縄文時代晩期から平安時代まで断続的に遺跡の範囲内で集落が営まれてきたことが判明している。

2）　位置と環境

生駒山地の西麓部には、谷あいを流下する小河川によって発達した扇状地を随所に見ることができる。鬼塚遺跡もそうした扇状地上に立地する遺跡の一つである。いっぽう、縄文時代前期以降海水の侵入により、河内湾が形成され、鬼塚遺跡の前面には河内湾やその後身の河内潟などが迫っていた。鬼塚遺跡は前面に海ないし潟、背面に山地というロケーションを基盤として集落の発展が促されたものと考えられる。前記した弥生文化を彩る諸要素の受容にあたって、鬼塚遺跡が重要な位置を占めているのも、このような遺跡立地の影響が大きい。また集落の時期ごとの移動も扇状地の拡大と軌を一にしたものと考えられる。すなわち、縄文時代から弥生時代まで集落形成は扇状地の扇央部にとどまっていたものが、古墳時代以降に谷の埋積が進行するのに従い、集落が拡大したと推定されている。

鬼塚遺跡の周辺は、扇状地の形成とともに、遺跡が密集する地帯となっている。北東の神並遺跡は、縄文時代早期前半の押型文土器が多量に出土し、該期の土偶や屋外炉も発見されている。前期から中期の海蝕崖が鬼虎川遺跡で確認され、そこから土器とともに豊富な動植物遺存体が発見されている。後期末から晩期にかけては、北方の日下遺跡で貝塚が形成されている。貝塚は鬼虎川遺跡水走地区でも凸帯文期のものが見られる。弥生時代では、すぐ北に接する西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡と近畿を代表する拠点集落が河内潟東縁部に現出する。中期前半から中葉にかけて独自の墓域を保ちながら、互いに接触していたと考えられる。以上のように鬼塚遺跡の周辺では活発な生業活動を窺うことができる。

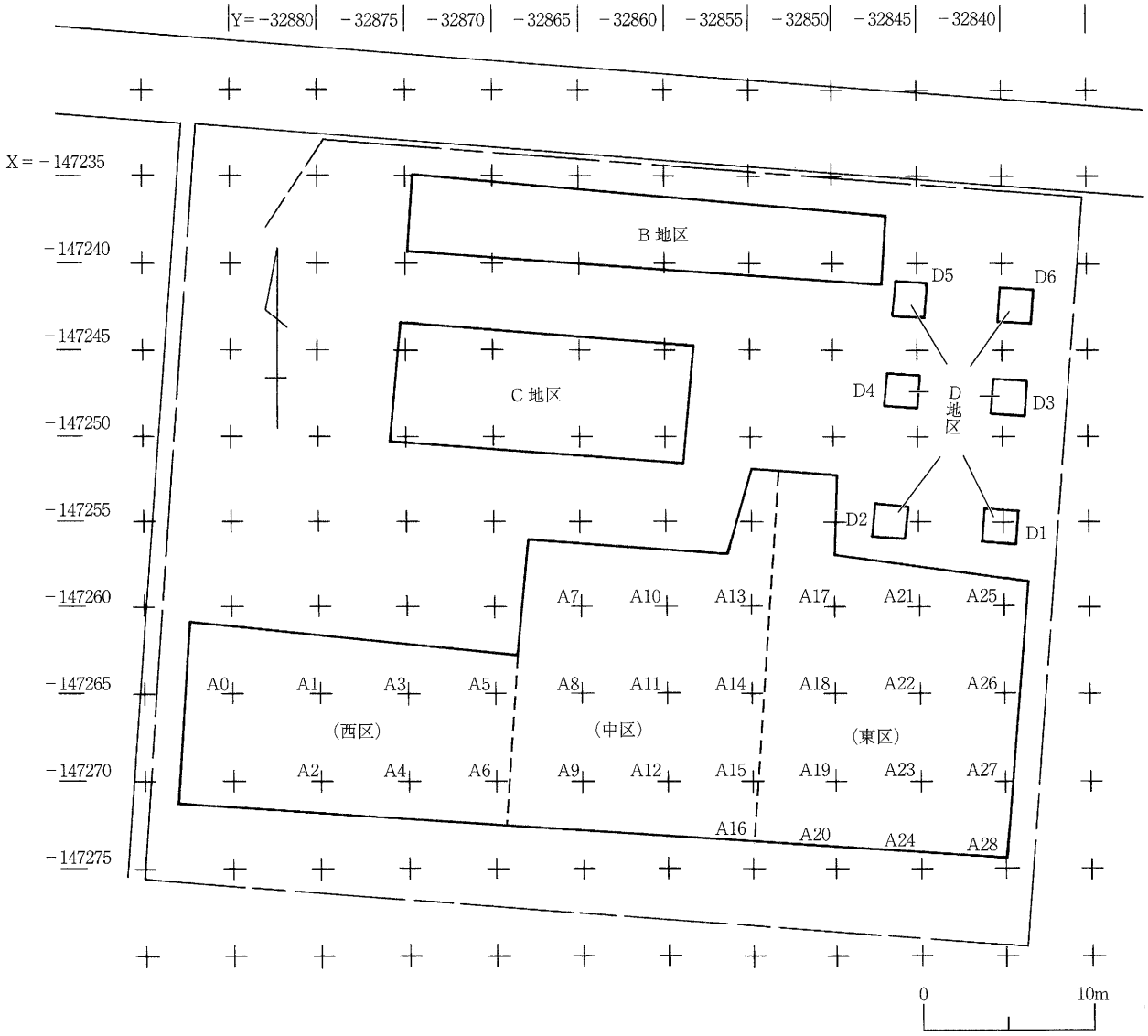


第２図　鬼塚遺跡と周辺の遺跡

Ⅲ　調査方法と地区割、調査経過

確認調査の結果を踏まえ、共同住宅の本体南側部分とピット式駐車場２箇所、および本体東側部分の杭工事箇所が調査対象となった。調査面積は706.1㎡である。調査トレンチは共同住宅の本体南側部分をＡ地区、ピット式駐車場のうち、北側をＢ地区、南側をＣ地区、本体東側部分の杭工事箇所をＤ地区と仮称した。Ｄ地区については６箇所に分かれるため、調査順にＤ１・Ｄ２・Ｄ３・Ｄ４・Ｄ５・Ｄ６と細分した。検出した遺構・遺物を精確に記録するため、国家座標系の基準杭が必要となった。基準杭と調査トレンチ内の調査杭打設作業は調査依頼者側が用意した測量事務所が実施した。

Ａ地区は５ｍメッシュごとに西からＡ１・Ａ２・Ａ３の順に小地区を設定した。遺物取り上げの地区表記は、５ｍメッシュの小地区のうち、南東コーナーの杭をもとに行った。Ａ地区の東側では後述するように縄文土器が多量に出土したため、５ｍメッシュをさらに2.5mで4等分した。北西・北東・南西・南東の順にア・イ・ウ・エとした。例えば、Ａ15区で出土した縄文土器はＡ15ア・Ａ15イ・Ａ15ウ・Ａ15エと注記した。さらに、調査の進行上、Ａ地区の西側括れ箇所を西区、Ａ13杭からＡ15杭



第３図　調査トレンチ位置図

の南北ラインから西区までを中区、同南北ラインより東を東区と区分して調査を行なった(第３図参照)。以下、検出遺構に説明を加える際にも、西区・中区・東区の区分を行っている箇所がある。

Ａ～Ｃ地区の調査では、確認調査で判明した盛土の厚さ1.2mに対して45°の法面をつけ調査の安全を図った。Ａ地区では確認調査で検出した遺物包含層の掘削を行なったが、調査地が扇状地の傾斜面上に立地し、東端で現地表から1.2mの遺構面が西端では現地表から2.5mの深さになり、安全性が懸念され遺構面Ⅳで調査を終了した。

Ⅳ　Ａ地区の調査

1)　層位

Ａ地区の調査で確認した層位は次のとおりである。

第１層　5Y4/3暗オリーブ色シルト質細粒砂。旧耕土層。この層の下部に第１Ａ～１Ｄ層が介在する。

第1Ａ層　10G5/1緑灰色粗粒砂混じりシルト。この層も旧耕土層である。中区の一部のみ遺存。

第1Ｂ層　10BG2/1青黒色粘土。中礫を含む。客土である。東区で遺存。

第1Ｃ層　7.5Y4/3暗オリーブ色粘土。ごく少量現代の廃棄物を含む。

第1Ｄ層　7.5Y3/2オリーブ黒色粘土。第１Ｃ層・第１Ｄ層とも東区の東端でのみ遺存。

第２層　2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト質粘土。上面は西区・中区の遺構面をなす。西区の西端ではこの層の上部に第２Ａ層が遺存。

第２Ａ層　10YR3/4暗褐色シルト質細粒砂。床土層である。

第３層　7.5GY3/1暗緑灰色中礫混じり粘土。次の第４層とともにＡ９区付近から西側全域、Ａ地区の西半分に広がっている。無遺物層。西区西端のみこの層の上部に第３Ａ層が遺存。

第３Ａ層　10GY3/1暗緑灰色中粒砂混じり粘土。細粒砂のラミナを含む。

第４層　5GY3/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。縄文土器・弥生土器・土師器、サヌカイト片を含む。

第５層　N3/暗灰色中粒砂混じり粘土。上面は西区の遺構面をなす。縄文土器・弥生土器を含む。西区全域に広がる。

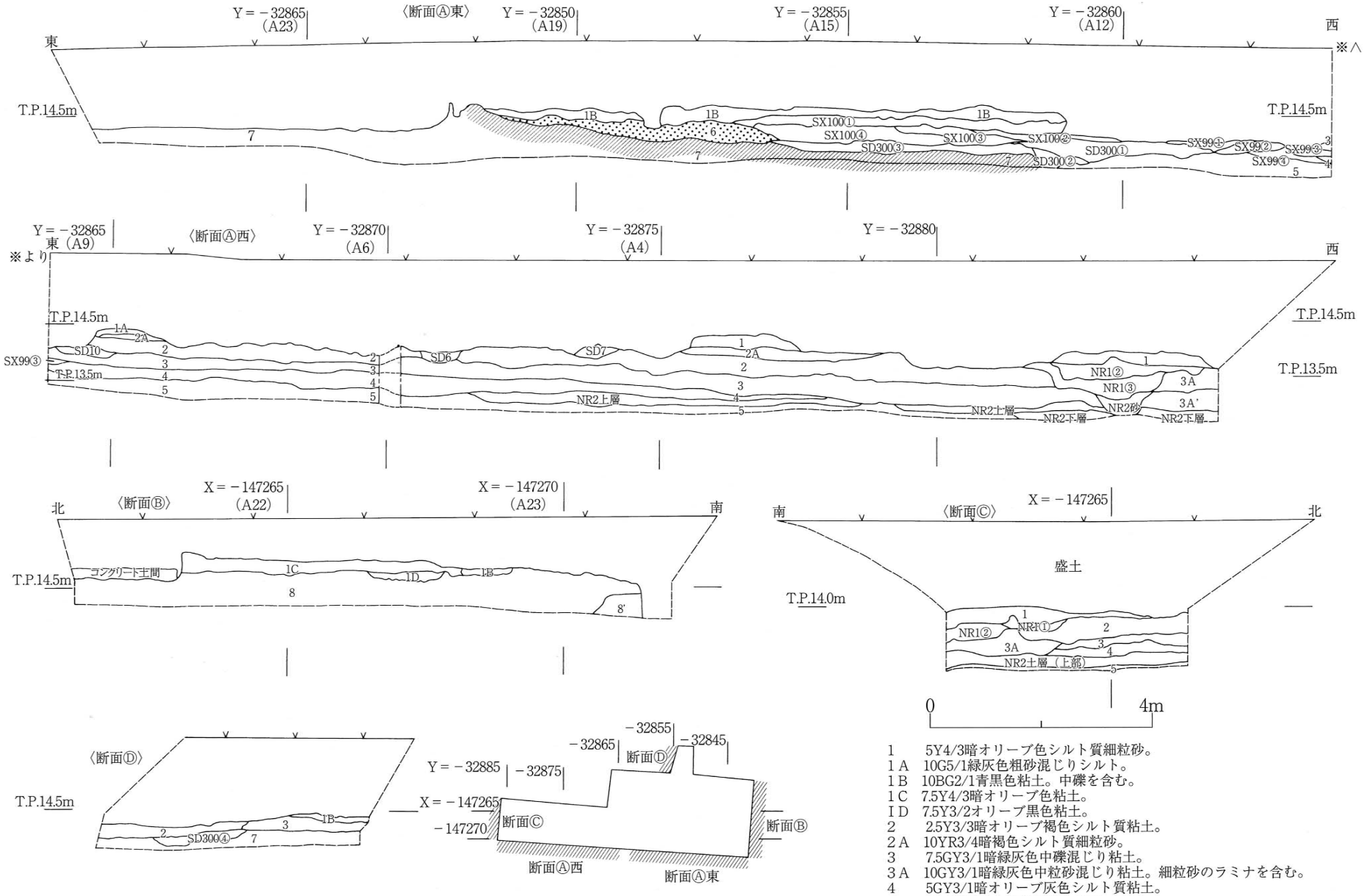
第６層　2.5Y3/1黒褐色シルト。縄文時代晩期の遺物包含層。

第７層　N2/黒色粘土。粗粒砂を少量含む。

第８層　N4/灰色粘土。地山層である。

まず重機で盛土層は除去した。調査地には最近まで旧郵政省宿舎が既存していたことは知られていたが、近隣の方のご教示により、昭和43年ごろまで大規模な伸線工場があったことがわかった。この伸線工場は調査地敷地の北側にあったらしく、後述のＢ地区やＣ地区では現地表-２m前後まで攪乱されていた。またＡ地区はＢ地区などに比べると攪乱は少ないが、主に北側で伸線工場の基礎が見られる状態であった。

当初、縄文時代の遺物包含層である第６層と同様の黒褐色シルトは、東区から中区まで広く分布するものと捉えていた。このため、前記したように縄文土器の取り上げを2.5mメッシュで行なった。ところが、中区全域を通じて、第６層と同質のシルト層でやや砂質を帯びる層が見られた。これを第６Ａ層とすると、そこには縄文土器に混在して弥生土器が含まれていた。さらに、Ａ地区の南側断面を精査したところ、第６層は中区で弥生時代に攪拌されていることが判明した。現況では、第６層は東区のみに遺存していたことが明らかとなった。



1　5Y4/3暗オリーブ色シルト質細粒砂。
1A　10G5/1緑灰色粗砂混じりシルト。
1B　10BG2/1青黒色粘土。中礫を含む。
1C　7.5Y4/3暗オリーブ色粘土。
1D　7.5Y3/2オリーブ黒色粘土。
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト質粘土。
2A　10YR3/4暗褐色シルト質細粒砂。
3　7.5GY3/1暗緑灰色中礫混じり粘土。
3A　10GY3/1暗緑灰色中粒砂混じり粘土。細粒砂のラミナを含む。
4　5GY3/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。
5　N3/暗灰色中粒砂混じり粘土。
6　2.5Y3/1黒褐色シルト。
7　N2/黒色粘土。粗粒砂を少量含む。
8　N4/灰色粘土。

第４図　Ａ地区土層断面図

２）　遺構

今回の調査で、上面から、鎌倉時代以後・古墳時代・弥生時代・縄文時代の遺構を検出した。ここでは、遺構面別にその概要を記しておきたい。なお、ピットは一括して形状・規模・埋土を別表に掲げたので参照いただき、重要なもののみ取り上げることとする。

（１）遺構面Ｉ（第５図）

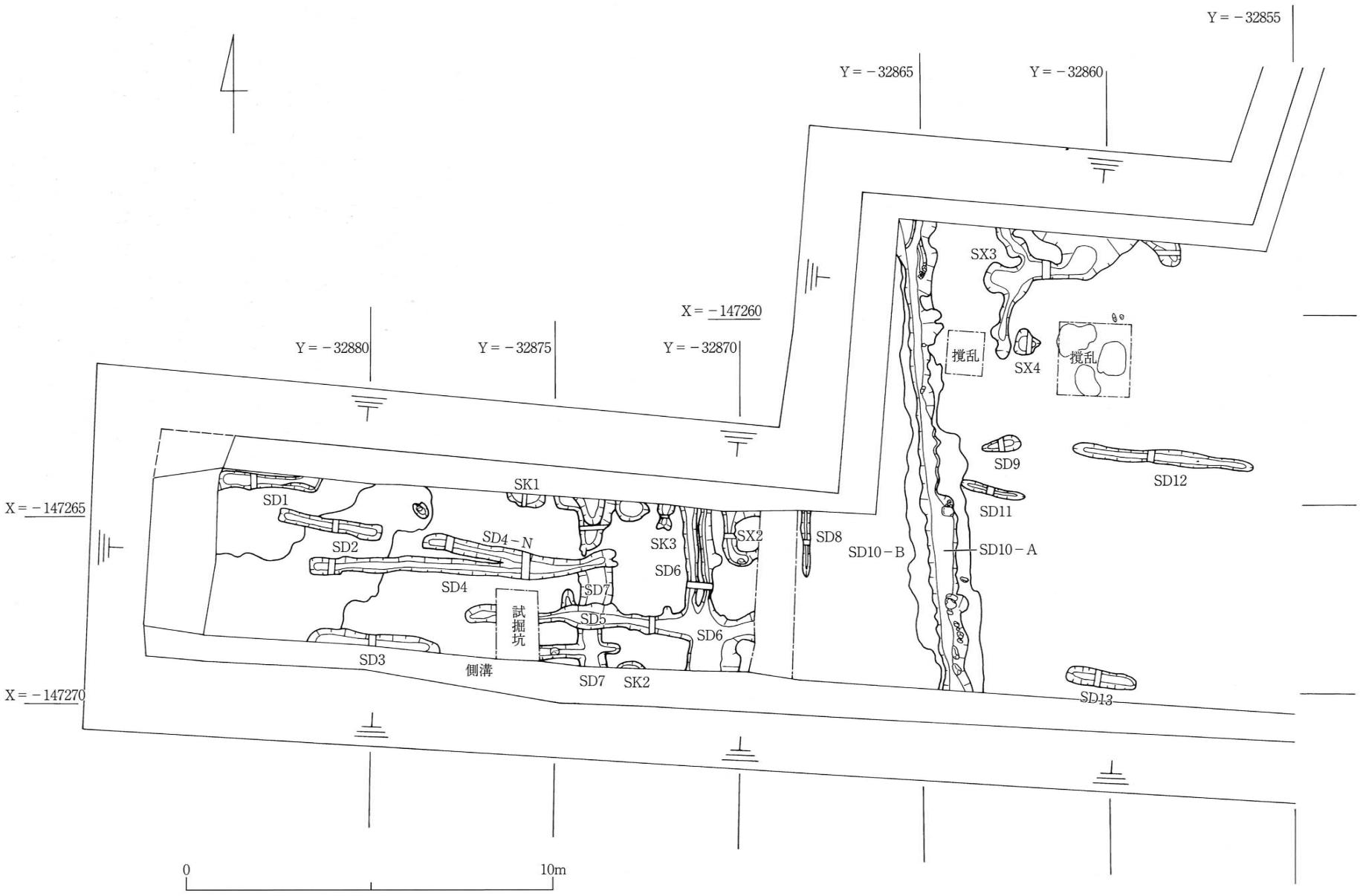
西区と中区で溝10条・土坑４基・ピット２個・落ち込み状遺構２箇所を検出した。遺物の出土状況は顕著ではなく、とくに下層を巻き込むため縄文土器の出土が目に付くが、ＳＤ６から鎌倉時代の土師器皿が出土していることから、検出面のレベルを斟酌すると、これらの遺構は該期以降、おそらく近世期頃の所産と考えている。なお、東区では旧伸線工場と旧郵政省宿舎の建築工事により、当該の遺構面は滅失していた。

溝　西区検出の溝からみていく。ＳＤ１～ＳＤ５は東西方向の溝で、傾斜面に従い、東から西へ流下する。南北方向のＳＤ６・ＳＤ７では溝底面レベルにごくわずか差があり、北より南が低いが常時は滞水状態であったと考えられる。ＳＤ１は幅0.3～0.4m深さ0.31mを測る。溝内から縄文土器・土師器が出土した。ＳＤ２は幅0.3～0.4m深さ0.06mを測る。埋土は10Y4/1灰色粗粒砂混じりシルトに7.5YR4/6褐色シルトと後述のＮＲ１①層（5Y4/3灰オリーブ色中粒砂混じり極細粒砂）が混入する層である。溝内から縄文土器・土師器が出土した。ＳＤ3は北側のみの検出で幅0.3m以上深さ0.13mを測る。無遺物。ＳＤ4は西区の中央を流下する溝で現存長8.3mを測る。叉状に北溝と南溝に分岐する。北溝は幅0.3m深さ0.22m、南溝は幅0.3m深さ0.31mを測る。ＳＤ４南溝内から土師器・須恵器が出土した。ＳＤ５は後記のＳＤ６とほぼ直交する溝で幅は0.2～0.9m深さ0.45mを測る。溝の中央部で膨らみを持つ。埋土は5Ｂ3/1暗青灰色中粒砂混じりシルト〔旧耕土状〕に7.5YR4/6褐色シルトが混入する層である。無遺物。ＳＤ６は幅0.7～1.0m深さ0.33mを測る。埋土は5Ｂ3/1暗青灰色中粒砂混じりシルト〔旧耕土状〕に7.5YR4/6褐色シルトが混入する層でＳＤ５と同一である。溝内から縄文土器・土師器皿（第26図256）が出土した。ＳＤ７はＳＤ５と切り合い、先行する溝である。後記のＳＸ１はＳＤ７の一部とみられる。幅0.6～0.9m深さ0.12mで南側に同質層を埋土にもつ東西方向の小溝がある。いずれも無遺物。ＳＤ８は西区の東端にある小溝である。幅0.2m深さ0.09mを測る。無遺物。ＳＤ１・ＳＤ３・ＳＤ４・ＳＤ７の埋土は共通して10Y4/1灰色粗粒砂混じりシルトに7.5YR4/6褐色シルトが混入する層である。

ＳＤ９～ＳＤ13は中区で検出した。ＳＤ９は土坑状を呈するが、後記のＳＤ12の西側延長線上に位置することから溝の一部と考えている。幅0.2～0.4m深さ0.15mを測る。埋土は10BG5/1青灰色シルト質粘土。縄文土器が出土した。ＳＤ10は後述する。ＳＤ11はＳＤ10と接している小溝である。幅0.2m深さ0.16mを測る。埋土は10BG5/1青灰色中粒砂混じりシルト。無遺物。ＳＤ12は中区東より中央に所在する。幅0.3～0.4m深さ0.1mを測る。埋土は10BG5/1青灰色中粒砂混じりシルト。無遺物。ＳＤ13は中区東より南側で検出。幅0.3～0.5m深さ0.12mを測る。埋土は10BG5/1青灰色中粒砂混じりシルト。無遺物。これらの溝は耕作に伴う畝溝と推定される。特にＳＤ６とＳＤ７で囲繞された内部で顕著である。

土坑　円形を呈するものと考えられるが、いずれも全形が検出されておらず、詳細は不明である。深さはＳＫ２が0.36mを測るほかは、0.1m前後にとどまる。埋土はＳＫ１～ＳＫ３が10Y4/1灰色粗粒砂混じりシルトに7.5YR4/6褐色シルトが混入する層、ＳＫ４が10G4/1暗緑灰色中粒砂に同色粘土がブロック状に混入する層である。検出した４基とも無遺物である。

落ち込み　不定形である。平面形は溝とピットとを重ねたものに見える。深さはＳＸ１が0.29m、ＳＸ２が0.23m、ＳＸ３が0.16mを測る。埋土は10Y4/1灰色粗粒砂混じりシルトに7.5YR4/6褐色シル



第５図　Ａ地区西区・中区遺構面Ｉ検出平面図

トに7.5YR4/6褐色シルトが混入する層である。ＳＸ１から土師器・須恵器が出土。ＳＸ２とＳＸ３は無遺物。

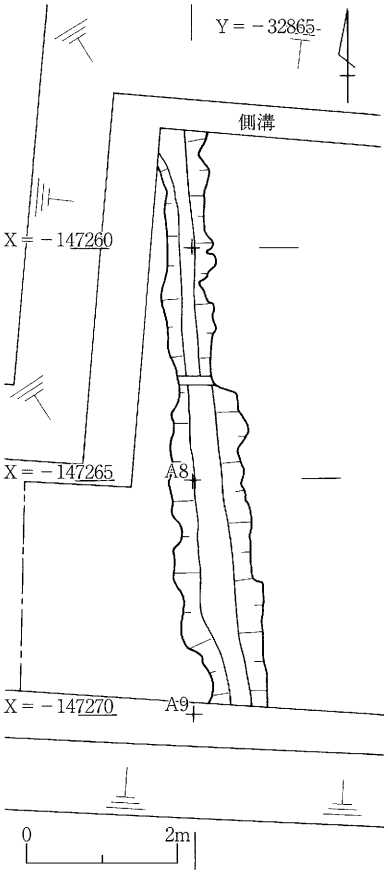
（２）遺構面Ｉ'

正確には遺構面Ｉに属するが、遺構面Ｉの遺構と切り合い、その下部で見つかった遺構を扱う。

ＳＤ10（第５・６図）

西区と中区の境界付近に所在する南北溝である。溝のラインは一様ではなくＺ字形に折れ曲がっている。現存長で12.4m確認した。２条の溝が複合しており上部をＳＤ10Ａ、下部をＳＤ10Ｂとした。いずれも溝底面のレベルは北方向ないし南方向に下っていない。ＳＤ10Ａは幅0.2～0.6m最大深度0.19mを測る。溝の東肩部には石列が遺存している箇所が認められた。ＳＤ10Ａの埋土は5GY4/1暗オリーブ灰色粗粒砂混じりシルトで旧耕土状を呈する。縄文土器・土師器・サヌカイト片が出土。ＳＤ10Ｂは幅0.4～1.5mで広狭の差が著しい。最大深度は0.38mである。埋土は３層に区分され、次のとおりである。①5Ｂ4/1暗青灰色中粒砂混じり粘土。②10Y3/2オリーブ黒色粘土に10GY5/1緑灰色細粒砂がブロック状に混入。

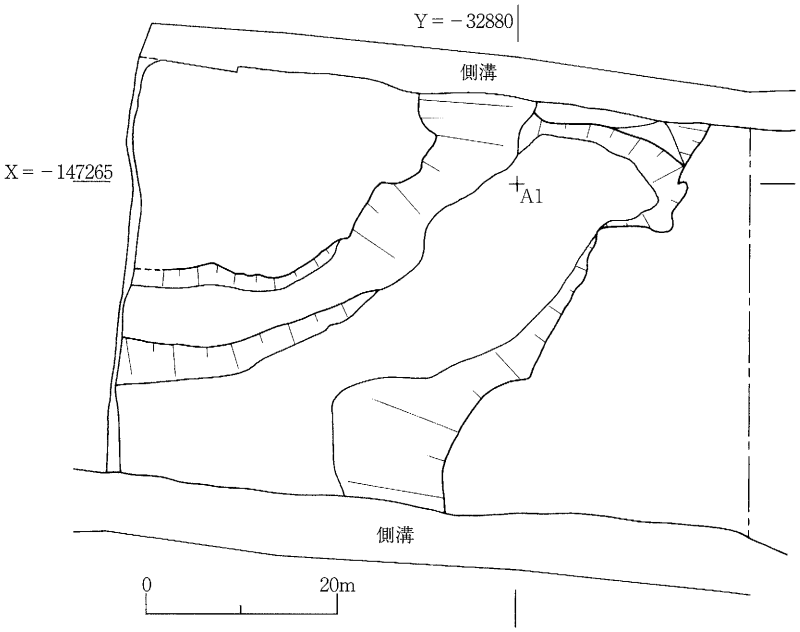
③10Y3/2オリーブ黒色粘土。縄文土器・弥生土器が出土。前記した溝底面にレベル差がないことと、埋土の観察で砂のみの堆積層がないことを考え合わせると、ＳＤ10は常時の排水機能よりも溝の東側と西側を区画する機能が重視されたものと推定できる。今後小字図の検討を必要とするが、坪境に造られた区画溝の可能性が指摘できる。



第６図　ＳＤ10Ｂ平面図

ＮＲ1（第４・７・11図）

西区西端で検出。北東から南西へ流下する自然流路である。流路の南西側の北肩は２段に落ち、テラス状の平坦面がある。幅2.0～3.6m最大深度0.3mを測る。大きく上層と下層に区分できる。上層は5Y4/2灰オリーブ色中粒砂混じり極細粒砂、下層は5Y6/4オリーブ黄色粗粒砂～中粒砂で10Y4/1灰色粘土質シルトのラミナが認められた。また下層には木片が多く含まれていた。弥生土器（第26図248・249）、土師器・韓式系土器（第26図252～254）、須恵器が出土した。出土遺物から５世紀代以降に埋没したものと考えられる。

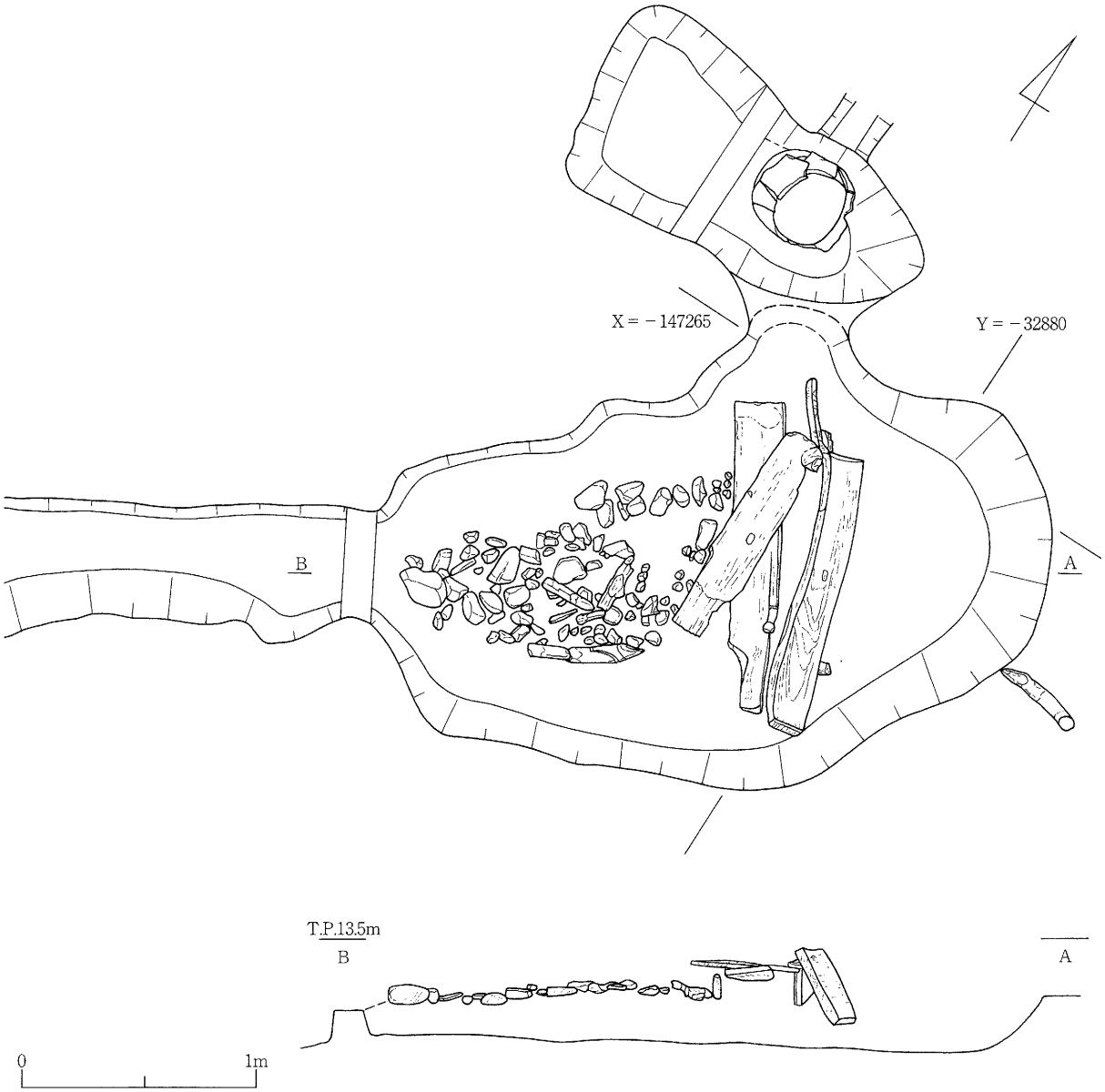


第７図　ＮＲ１平面図

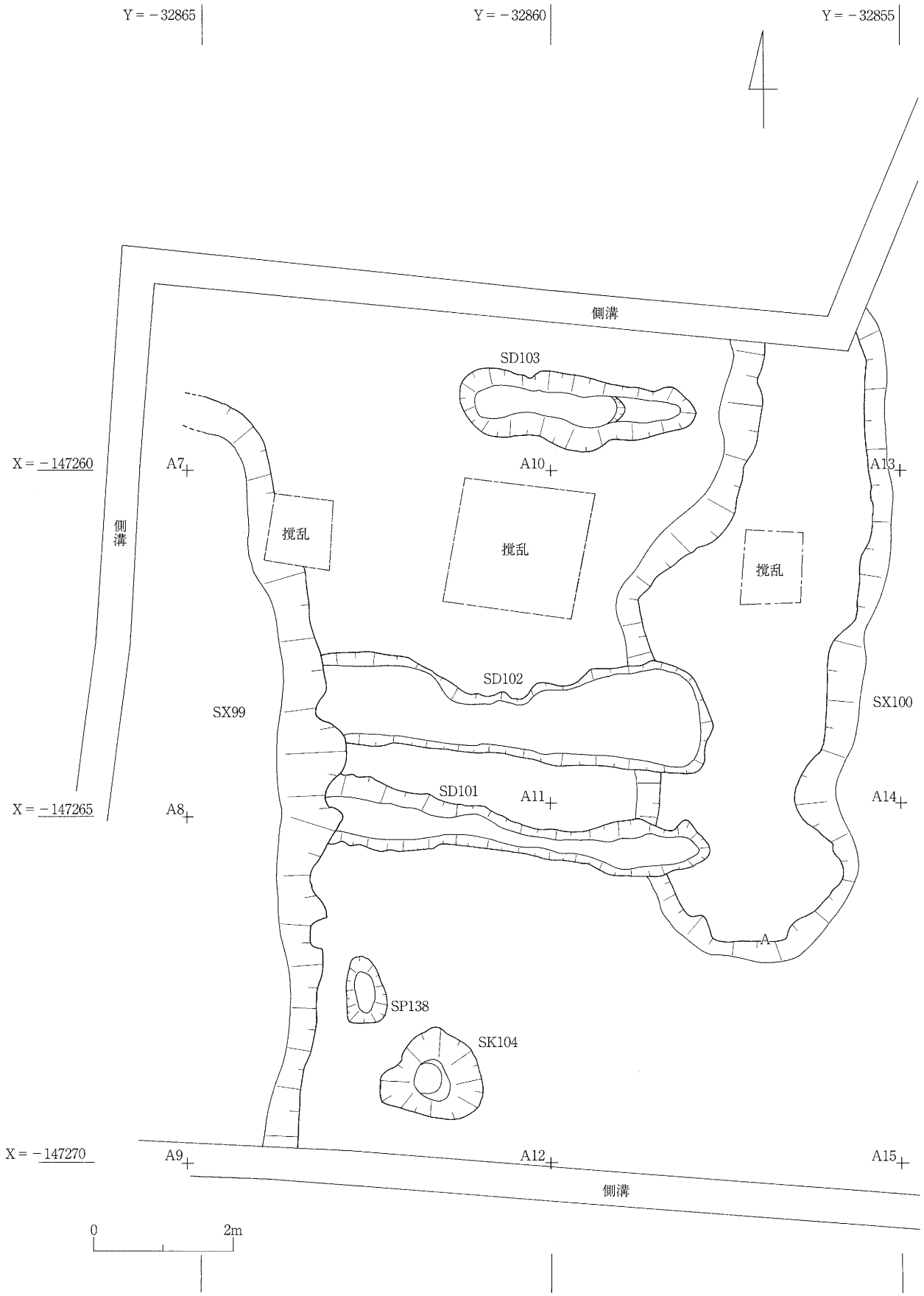
(3) ＳＸ201(第８図)

堰状遺構である。西区で後述の遺構面Ⅲで検出したＮＲ２の掘削途中で確認したものである。前記したように西区の第３層は無遺物層であり、第４層内の遺物も微量であったため、遺構面Ⅲの精査を行なっていた際に検出した。したがってＳＸ201の本来の遺構面は第４層中ということになる。

平面形は南北２基の土坑に溝が接続した形態をとっている。溝状部が西区トレンチの北と西の２方向に延長することから北の土坑部と南の土坑部とは取水と排水の関係にあるものと想定していたが、北土坑に埋置された弥生土器と南土坑から出土した土師器とは年代が隔絶することから北土坑は南土坑と切り合い、水場機能とは無関係と考えられた。南土坑は楕円形を呈し長径2.96m短径1.65m最大深度0.38mを測る。土坑内には拳大の礫多数と扉材(第30図291)を転用した部材を含めた板材が4枚、杭多数が散在していた。まず拳大の礫を敷き詰め、その東側に板材をL字形に置き、杭で固定した状況が観察できた。固定の杭は原位置をとどめず礫の状面に横置されていたため、これら堰状遺構の部材の出土状況は遺構の廃棄あるいは放置の状態と考えることができた。板材の取り上げ後、下部にも



第８図　ＳＸ201実測図



第９図　Ａ地区中区遺構面Ⅱ検出遺構平面図

長大な杭が遺存していた。拳大の礫の間隙には桃核が数点出土した。部材の出土状況を勘案して、この堰状遺構は祭祀性を併せ持つものであったことが窺われる。弥生土器(第26図244)のほか土師器高杯(第26図255)が出土した。土師器高杯の年代観からＳＸ201は古墳時代前期の所産と考えられる。

(4)遺構面Ⅱ(第９・11図)

Ａ地区中区において第６層中で検出した遺構面である。溝３条・土坑1基・ピット１個・落ち込み２箇所を検出した。調査時は中区の第６層も縄文時代の遺物包含層と認識していたが、壁面観察などで中区では単純な第6層は遺存しておらず、弥生時代に再堆積した第６Ａ層であることがわかった。遺構内からⅢ～Ⅳ様式の土器が出土していることから、縄文土器の含有にかかわらず、これらの遺構は中期中葉から後葉に属すると考えられる。

溝　ＳＤ101～103は東西方向に並列する溝状遺構である。いずれも溝のラインは一様ではなく平面形は不定である。長方形土坑とすべきかもしれない。ＳＤ101は現存長5.3m幅0.43～1.00m深さ0.13mを測る。埋土は2.5Y3/2黒褐色中粒砂混じり粘質シルトで炭化物を微量に含む。やや青味を帯びる。縄文土器が出土した。ＳＤ102は現存長5.7m幅0.83～1.61m深さ0.15mを測る。埋土は7.5Y3/2オリーブ黒色中粒砂混じり粘質シルトで炭化物を微量に含む。やや青味を帯びる。縄文土器とサヌカイト片が出土した。ＳＤ103は現存長3.4m幅0.75～1.09m深さ0.22mを測る。埋土は2.5Y3/2黒褐色中粒砂混じり粘質シルトである。縄文土器・弥生土器(第25図230)・サヌカイトが出土した。弥生土器は完形に復元できた。また溝の北肩直上面から土偶の脚部(第28図278)が出土した。遺構は弥生時代の所産であるが、土偶については、ＳＤ103が縄文土器を含むように古相の遺物が再堆積した結果、出土したものと考えられ明らかに後述の晩期中葉～後半の時期に帰属する。

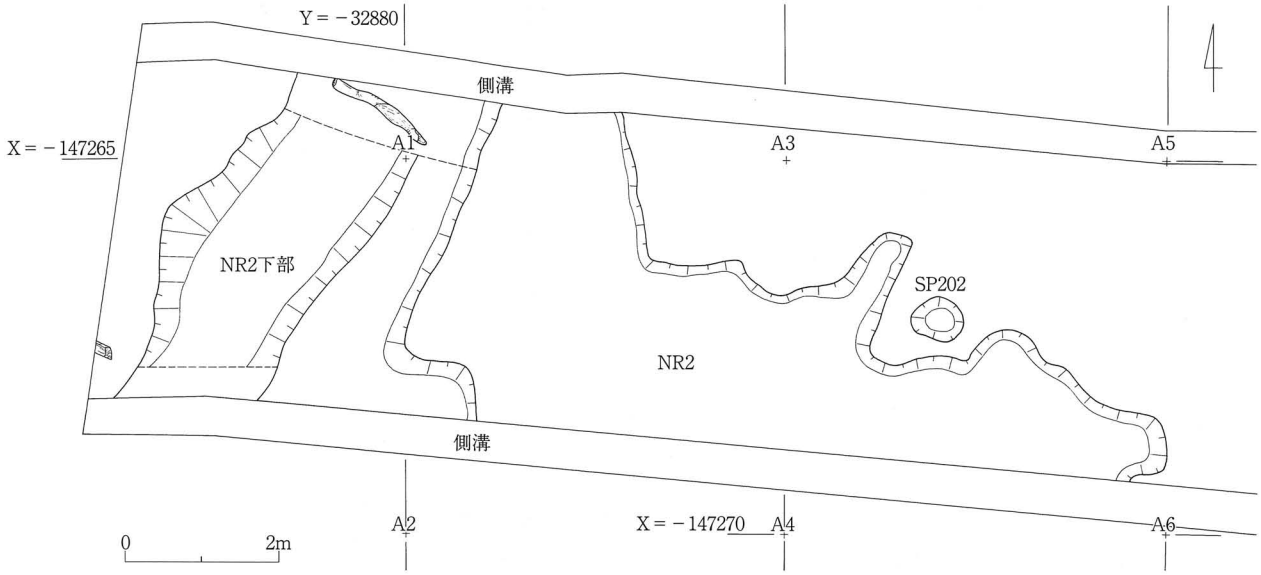
土坑・ピット　ＳＫ104はやや西に張り出す円形を呈する。長径1.48m短径1.27m深さ0.43mを測る。埋土は３層に区分され、次のとおりである。①2.5Y3/2黒褐色中粒砂混じり粘質シルトで炭化物を多量に含む。②10Y2/1黒色粘土質シルト。中粒砂を微量に含む。③10Y2/1黒色粘土。埋土の①層はＳＤ101・103と共通する。完形に復元できる弥生土器(第25図235)が出土した。ピットはＳＫ104の北に位置するＳＰ138のみである。埋土はＳＫ104の①層と同じである。

落ち込み　ＳＸ99は中区の西端で検出。南北に延びる落ち込みである。最大幅3.3m深さ0.49mを測る。埋土は4層に区分され、次のとおりである。①10Y2/1黒色細礫混じり粘土。②10Y3/2オリーブ黒色粘土混じり細礫。③10Y3/2オリーブ黒色シルト。細礫少量含む。④10Y2/1黒色シルト。細礫少量含む。中区西端から西区へ落ちる段と考えられる。縄文土器・弥生土器(第24図227、第26図237～239)・サヌカイト片・骨片が出土した。ＳＸ100は中区から東区にかけて位置する凹地状遺構である。深さ0.42mを測る。南壁断面を精査すると、埋土は4層に区分されたが、以下の②～④層は壁面際に堆積したもので①層を基本とする。①N3/暗灰色シルト。②N3/暗灰色細礫混じりシルト。③N3/暗灰色細礫混じり粘土。④N3/暗灰色中粒砂混じり粘土質シルト。東側の上部から西への傾斜面に沿って②～④層が堆積し、浅い凹地が残ったところに①層が堆積し埋没したものとみられる。多量の縄文土器に混在して弥生土器・石器・土製品・骨片が出土した。縄文土器は東側の上部から再堆積したものと考えられる。

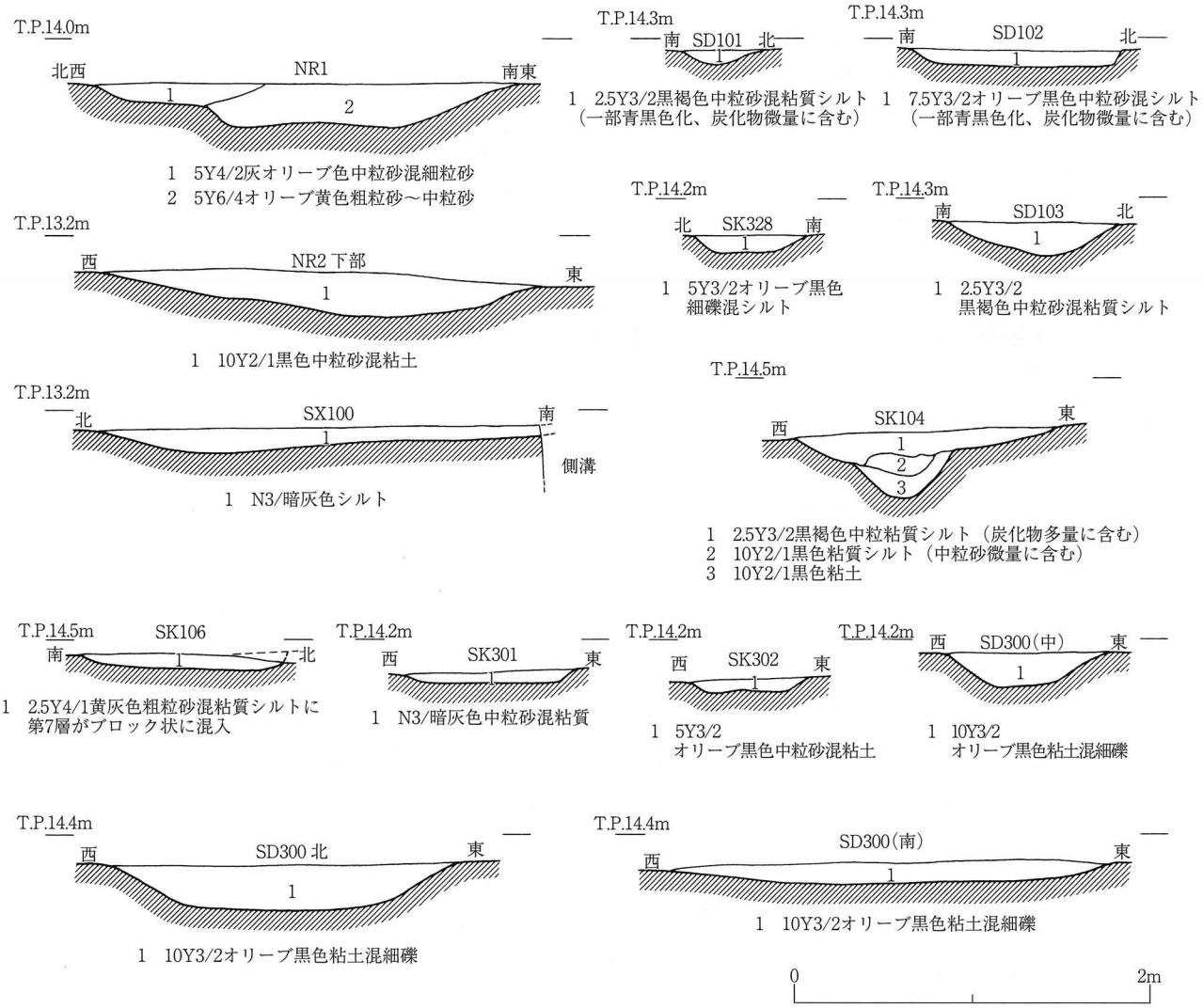
(5)遺構面Ⅲ(第10・11図)

Ａ地区西区で検出した。自然流路とピット1個である。

ＮＲ２(第10・11図)Ａ６区から始まり南東から北西へ流下する。西端部にはこの下部に別の流路が位置する。トレンチ外に出るため審らかではないが、これをＮＲ２下部とした。ＮＲ２上部の埋土は



第10図　A地区西区遺構面Ⅲ検出遺構平面図



第11図　各遺構断面図

10G2/1緑黒色粘土混じり中粒砂である。ＮＲ２下部は幅3.1m深さ0.4mを測る。溝状を呈し、北東から南西へ流下する。東肩にテラス状の平坦面がある。埋土は10Y2/1黒色中粒砂混じり粘土である。ＮＲ２上部で縄文土器、下部で弥生土器が出土した。弥生時代の所産と考えられる。

ピット　ＮＲ２上部の北肩に接する位置から炭化物を多量に含むＳＰ202が検出された。

(6)遺構面Ⅳ(第11・12図)

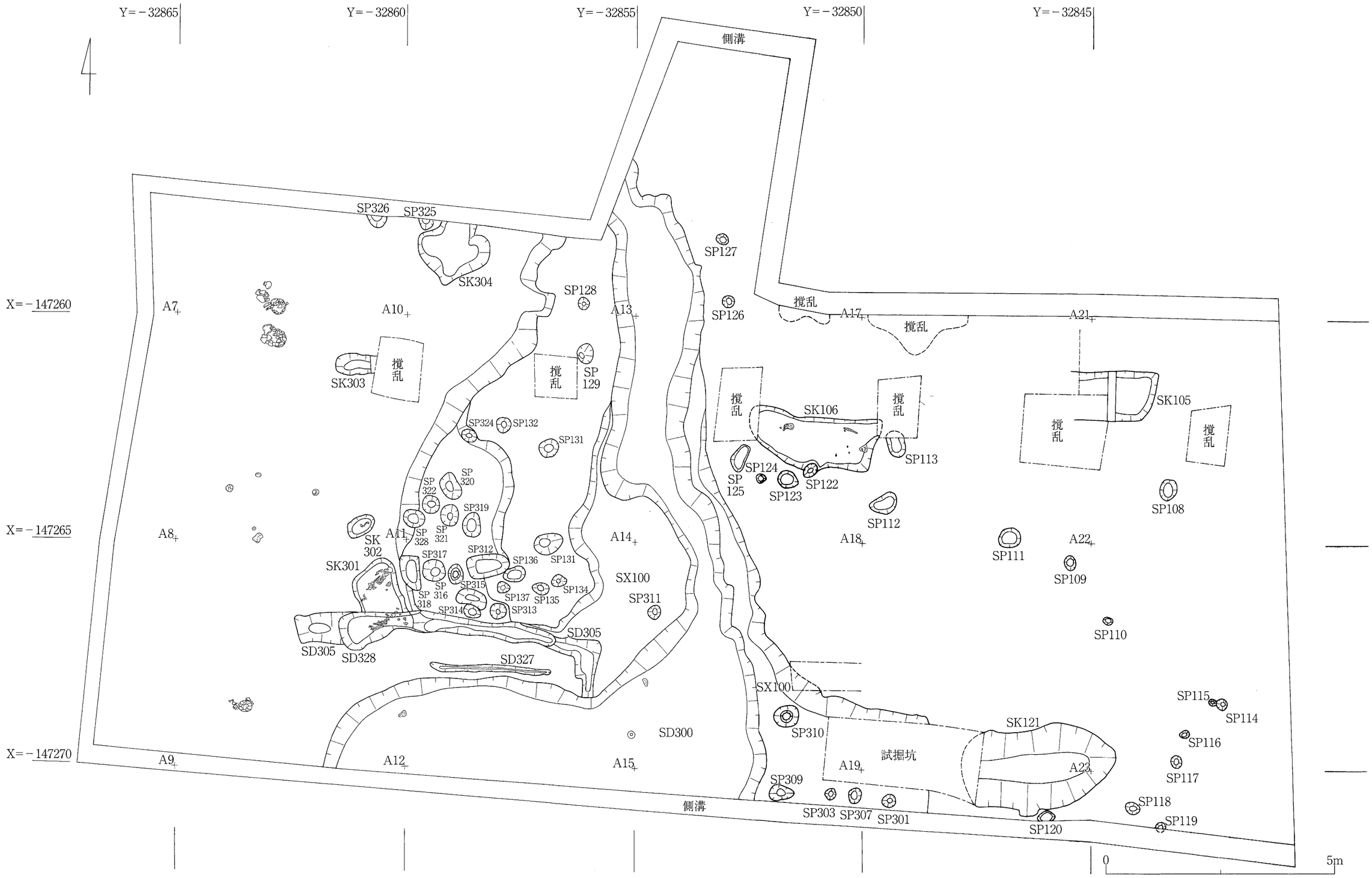
Ａ地区東区・中区で確認。中区のＡ10-Ａ12ラインより東側では第８層(地山層)上面で検出した。中区西端では第５層上面となる。ピット49個・土坑墓４基・土坑４基・溝３条がある。遺構の所属時期は、縄文時代晩期と弥生時代中期に分けられる。

ピット　埋土は大きくｉN4/灰色粗粒砂混じり粘土に炭化物を微量に含むものとⅱ5Y4/1灰色中粒砂混じり粘土質シルトの２種に区分できる。このうち、ⅱの埋土には1例のみではあるが弥生土器を含んでいる。一方、ｉの埋土ではＳＰ114から土偶を確認したのをはじめ、縄文土器のみの出土となっている。これらのことからｉの埋土をもつピットは縄文土器の所産と措定できるが、ＳＤ300の形状や土坑墓の存在から、ＳＤ300の南北溝より西側は弥生時代の遺構が広がると考えられる。遺物包含層である第６層の分布範囲を併せて考えると、土偶が出土したＳＰ114の南側に位置するピット群(ＳＰ115～119)のみ縄文時代の所産に限定できるものと思われる。

土坑墓　ＳＫ106は東区北側で検出。方形を呈する。長径2.6m以上、短径1.18m深さ0.15mを測る。土坑墓の北半分は現代の攪乱により大きく削られていた。このため人骨の遺存状態は悪い。土坑の東と西に頭骨が、北東に上腕骨とみられる骨片が検出。埋土は2.5Y4/1黄灰色粗粒砂混じり粘土質シルトで第8層がブロック状に混入している。ＳＫ301は方形を呈する。長径1.27m以上、短径1.04m深さ0.22mを測る。土坑内には遺存状態の良い人骨が埋葬されていた。頭位は北東を向く。尺骨と橈骨を内側に折り曲げる。下肢骨の大部分を欠くが足骨の位置から屈位をとったものと思われる。人骨の西側に人頭大の礫が埋置される。埋土はN3/暗灰色中粒砂混じり粘土質シルトである。人骨以外無遺物である。ＳＫ302は楕円形を呈する小土坑で、内部に顎骨が埋置されていた。長径0.68m短径0.40m深さ0.09mを測る。再葬墓と考えられる。埋土は5Y3/2オリーブ黒色中粒砂混じり粘土。人骨以外無遺物である。ＳＫ328は繭形を呈する土坑墓である。長径1.66m短径0.82m深さ0.27mを測る。1体の人骨が埋置される。頭位はＳＫ301と同じく北東を向く。ＳＫ301出土人骨と逆で、上肢骨の遺存は悪いが下肢骨が良く残っている。骨盤位から大腿骨と脛骨を極端に折り曲げた屈位をとる。埋土は5Y3/2オリーブ黒色中粒砂混じり粘土。人骨以外無遺物である。

土坑　4基検出したが土坑の性格は不明。このうちＳＫ121は長径1.95m深さ0.78mを測るが、土坑の中央に新しい杭が穿たれている。出土遺物には縄文土器・弥生土器を含むが、近代以降に属するものと思われる。ＳＫ105は方形を呈する。長径1.73m短径1.12m深さ0.43mを測る。埋土は5Y2/2オリーブ黒色シルト混じり細礫。無遺物。ＳＫ303は楕円形を呈し、長径0.9m以上、短径0.49m深さ19cmを測る。埋土は5Y4/1灰色中粒砂混じり粘土質シルトである。縄文土器が出土した。ＳＫ304は不定円形を呈する。長径1.57m短径1.4m深さ0.12mを測る。埋土は7.5GY4/1暗緑灰色中粒砂混じりシルトである。無遺物。

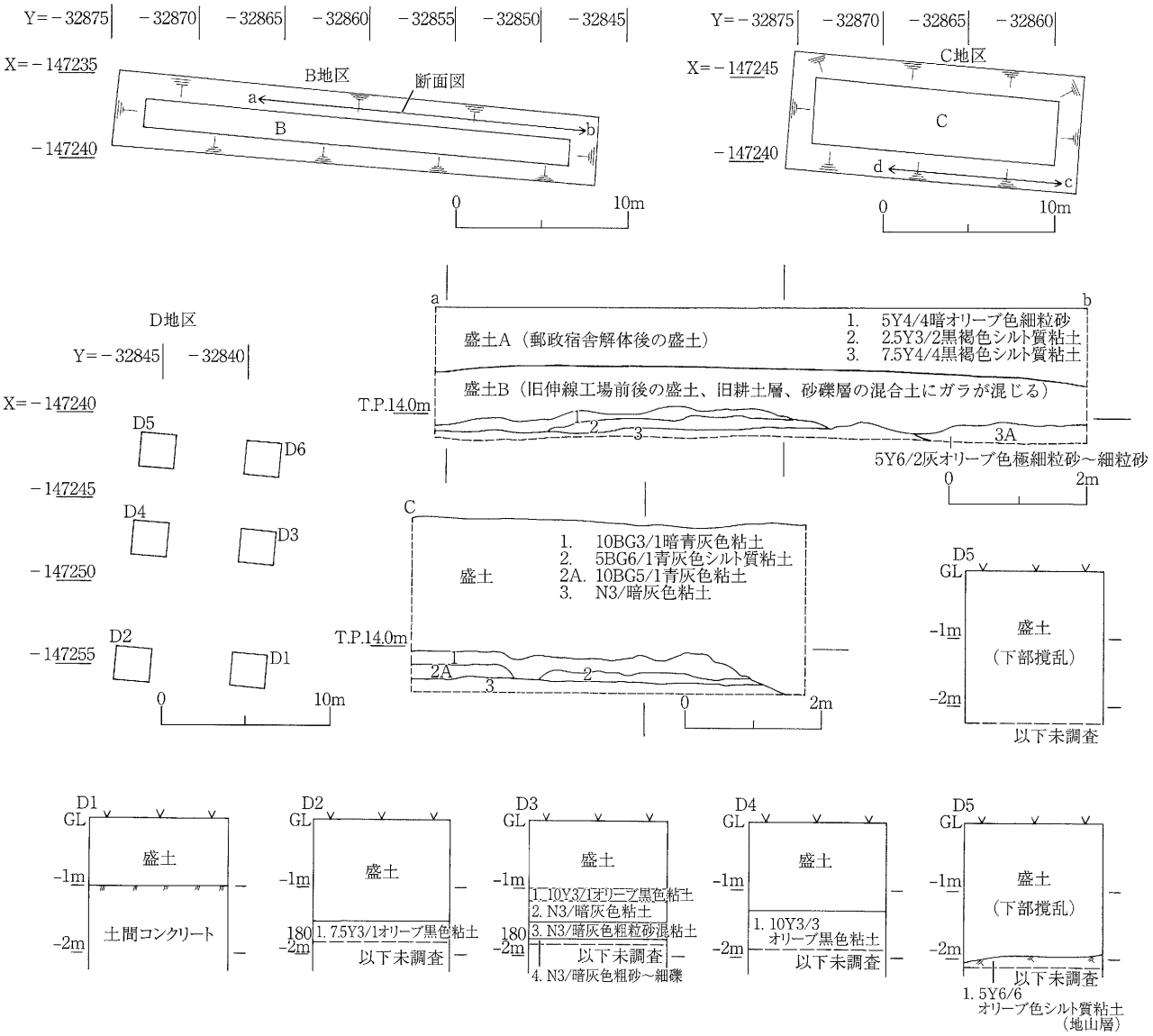
溝　ＳＤ300は南北方向から屈曲して西へ向く溝である。現存長14m間で底面のレベルに差がない。幅0.74～4.10mと広狭に富み、Ａ18区付近で括れる。埋土は４層に区分される。①10Y3/2オリーブ黒色細礫～粗粒砂。②10Y3/2オリーブ黒色粘土混じり細礫。③10Y3/2オリーブ黒色中粒砂混じりシルト。④7.5Y3/2オリーブ黒色中粒砂混じり粘土質シルト。弥生土器が多く出土し(第25図229、第26図246・249)、チャート製の石鏃(第28図281)も見られた。この溝の性格については後述する。



第12図　A地区中区・東区遺構面Ⅳ検出遺構平面図

Ⅴ　Ｂ地区・Ｃ地区・Ｄ地区の調査

Ａ地区の調査と併行してＢ地区・Ｃ地区・Ｄ地区の調査を行った。Ｂ地区は平成18年11月６日～９日までの４日間調査した。Ｂ地区では現地表-1.5～1.9mまで盛土ないし埋戻土であった。伸線工場の旧建物と旧郵政省宿舎の造成工事に伴うものである。盛土下では３～４層の堆積層を確認したが無遺物であった。また盛土からの湧水が激しく壁面が幾度も崩落したため、第１～３層が無遺物であったことも併せ、第３層以下の調査を中止した。Ｃ地区は同年11月13日～15日の２日間実施した。盛土下４層の堆積層を確認した。第２層の青灰色シルト質粘土の上面で縄文土器片が出土した。最下部の第３層暗灰色粘土は上面レベルと土質の対応関係からＡ地区の第５層に相当する。概ねＣ地区の東側では本来の土層堆積が見られたが、西側三分の一は攪乱されていた。Ｂ地区、Ｃ地区とも遺構は確認されなかった。Ｄ地区は杭基礎部分のみピット状に調査した。同年11月14日～16日の３日間６箇所実施した。この中でＤ６区では盛土下で地山層(オリーブ色シルト質粘土)が露出した。地山層のレベルはTP13.6～13.7mでＡ地区と比べて約0.8m低かった。



第13図　Ｂ・Ｃ・Ｄ地区トレンチ平面、土層断面図

第1表　A地区ピット一覧表

遺構名	遺構面	平面形態	規模(cm) 長径	短径	深さ	埋土	出土遺物 縄文土器	弥生土器	その他
SP 1	Ⅰ	円形	39	30	15	10Y4/1灰色粗砂混シルトに7.5YR4/6褐色シルトが混入	×	×	×
SP 2	Ⅰ	楕円形	44+	34	3	10Y4/1灰色粗砂混シルトに7.5YR4/6褐色シルトが混入	×	×	×
SP108	Ⅳ	楕円形	47	35	28	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	○	×	×
SP109	Ⅳ	楕円形	32	25	8	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	○	×	×
SP110	Ⅳ	円形	23	19	8	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP111	Ⅳ	円形	47	35+	10	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP112	Ⅳ	楕円形	64	41	14	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP113	Ⅳ	楕円形	41+	40	9	5G3/1暗緑灰色粗砂混シルト	○	×	×
SP114	Ⅳ	円形	24	23	12	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	土偶
SP115	Ⅳ	円形	18	15	4	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP116	Ⅳ	楕円形	21	16	6	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP117	Ⅳ	楕円形	27	23	9	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP118	Ⅳ	楕円形	29	24	8	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP119	Ⅳ	円形	15+	21	7	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	○	×	×
SP120	Ⅳ	方形	40	26+	6	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP122	Ⅳ	楕円形	36	26	10	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP123	Ⅳ	円形	44	37	38	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	○	×	×
SP124	Ⅳ	円形	21	20	18	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP125	Ⅳ	楕円形	61	31	37	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP126	Ⅳ	円形	27	26	9	5G3/1暗緑灰色粗砂混シルト	×	×	×
SP127	Ⅳ	円形	28	25	4	5G3/1暗緑灰色粗砂混シルト	×	×	×
SP128	Ⅳ	円形	20	20	9	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP129	Ⅳ	楕円形	63	44	29	2.5Y3/3暗オリーブ褐色中砂混粘土	○	×	×
SP131	Ⅳ	円形	42	40	14	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	○	×	×
SP132	Ⅳ	円形	34	30	37	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP133	Ⅳ	楕円形	63	44	29	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP134	Ⅳ	不定方形	32	26	36	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×

第1表　A地区ピット一覧表

遺構名	遺構面	平面形態	規模(cm) 長径	短径	深さ	埋土	出土遺物 縄文土器	弥生土器	その他
SP135	Ⅳ	楕円形	36	28	33	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP136	Ⅳ	楕円形	50	32	32	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP137	Ⅳ	不定方形	26	25	36	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP138	Ⅱ	楕円形	98	58	16	2.5Y3/2中砂混粘質シルトに炭を多量に含む	×	×	×
SP202	Ⅲ	円形	68	60	14	7.5Y3/2オリーブ黒色細粒砂混じり粘質シルト(炭化物・焼土粒多量に含む)	○	×	×
SP306	Ⅳ	円形	30	30	21	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP307	Ⅳ	方形	34	30	25	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	○	×	×
SP308	Ⅳ	円形	27	25	19	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	○	×	×
SP309	Ⅳ	楕円形	54	35	29	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	○	×	×
SP310	Ⅳ	方形	55	53	27	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	○	×	×
SP311	Ⅳ	不定方形	31	28	41	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	○	○	×
SP312	Ⅳ	楕円形	90	50	21	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP313	Ⅳ	方形	35	33	15	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP314	Ⅳ	円形	38	30+	14	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP315	Ⅳ	楕円形	69	35	21	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	○	×	サヌカイト
SP316	Ⅳ	楕円形	42	32	38	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP317	Ⅳ	円形	48	48	21	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP318	Ⅳ	楕円形	78	42	12	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP319	Ⅳ	楕円形	51	37	40	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	○	×	×
SP320	Ⅳ	方形	56	40	42	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP321	Ⅳ	楕円形	44	37	35	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP322	Ⅳ	円形	35	35	48	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	○	×	サヌカイト
SP323	Ⅳ	楕円形	44	37	39	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	○	×	×
SP324	Ⅳ	楕円形	32	28	38	5Y4/1灰色中砂混粘質シルト	×	×	×
SP325	Ⅳ	方形	23+	29	7	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×
SP326	Ⅳ	楕円形	26+	43	9	N4/灰色粗砂混粘土に炭を微量に含む	×	×	×

Ⅵ　出土遺物

縄文時代～中世期の遺物が出土した。出土量はコンテナ31箱分に及ぶ。Ｃ地区の第２層上面で微量の縄文土器を確認したほかは全てＡ地区からの出土である。ここではＡ地区の出土遺物を扱う。出土遺物には土器・土製品・石器・木製品がある。

土器

縄文時代～中世期の土器がある。特に縄文土器と弥生土器は出土量が多い。

１）　縄文土器（第14～23図）

各遺構や遺物包含層から晩期中葉～後半に属する縄文土器が出土した。今回、深鉢と浅鉢について、器形分類を行った。分類に当たっては、以下の文献を参考にした。

- 家根祥多「篠原式の提唱」（林謙作編『縄紋晩期前半－中葉の広域編年』〔文部省科学研究費（総合Ａ）研究成果報告書〕）1994年。
- 嶋村友子「土器」（八尾市教育委員会『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智遺跡の調査－』）1987年。
- 福永信雄「縄文Ⅳ～Ⅰの土器について」（財団法人東大阪市文化財協会『鬼塚遺跡第８次発掘調査報告書』）1997年。

深鉢（第14図）

大きく器形により、

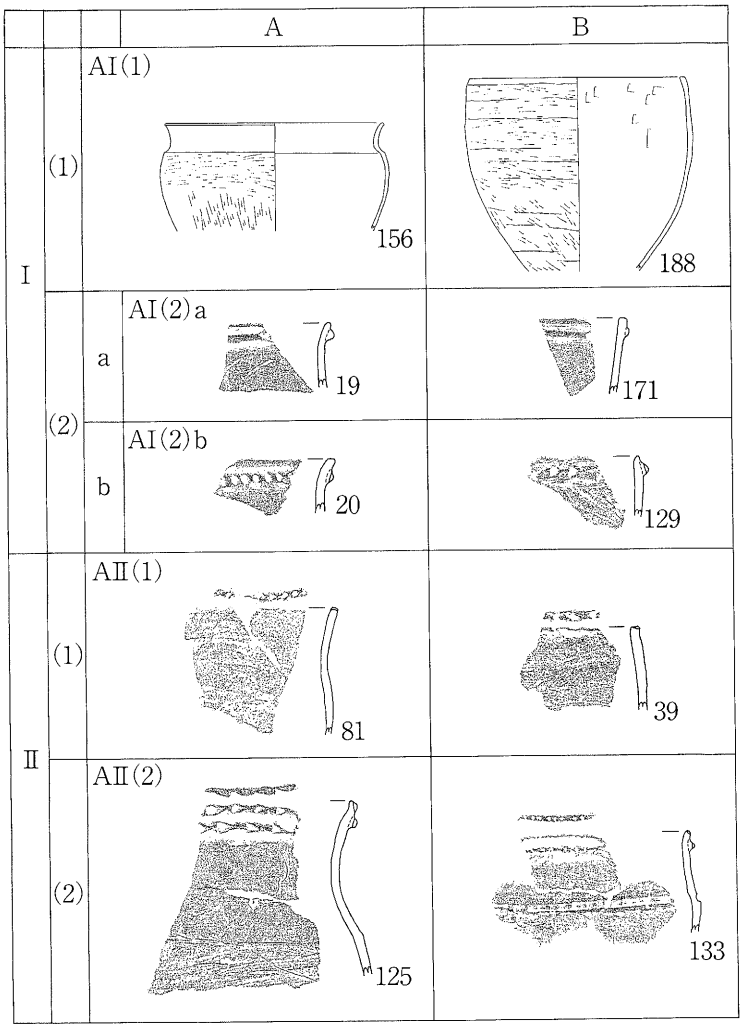
Ａ　口頸部と胴部との境が明瞭で、口頸部が外反するもの。

Ｂ　口頸部と胴部との境が明瞭でなく、砲弾形を呈するもの。口縁部は内彎ないし内彎気味となる。

の２種に区分できる。

Ａ・Ｂはそれぞれ、Ⅰ　口唇部にキザミのないもの、とⅡ　口唇部にキザミをもつものに区分できる。つぎに口縁部外面の1条凸帯の有無により、(1) 1条凸帯なし、(2) 1条凸帯ありに細分できる。さらにⅠ口唇部にキザミのないもののみ、１条凸帯上面のキザミの有無で細分できる。これをＡ　１条凸帯上面のキザミなし、Ｂ　１条凸帯上面のキザミありと表記する。ただし、Ⅱの口唇部にキザミをもつものは１条凸帯上面にはすべてキザミをもつため、Ａ・Ｂの区分は行わないこととする。

これらの組合せにより、縄文土器深鉢はＡⅠ(1)、ＡⅠ(2)ａ、ＡⅠ(2)



第14図　深鉢の器形分類

B、AⅡ(1)、AⅡ(2)、BⅠ(1)、BⅠ(2)a、BⅠ(2)B、BⅡ(1)、BⅡ(2)、の10タイプに分類できる。出土量としてはAⅠ(1)が最も多く、ついでAⅡ(1)、BⅠ(1)が多い。その他はごく少数である。なお、キザミの形状は、家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」(帝塚山考古学研究所『縄文から弥生へ』) 1984年。の分類に従い、記号も同書に準拠した。

浅鉢(第15図)

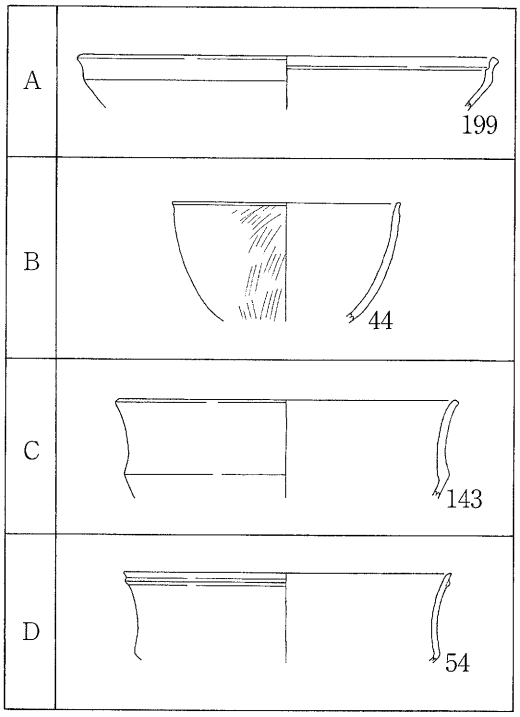
浅鉢は、形状により次の4タイプに分類した。

A　鍵手状口縁をもつ浅鉢。口頸部は短く屈曲して外反する。口唇部外面に1条の沈線をもつものや突起を伴うものが多い。

B　口縁部が内彎して開き、椀形を呈する浅鉢。

C　長く延びる口頸部に、屈曲する肩部が付く浅鉢。

D　口唇部下に凸帯を施す浅鉢。



第15図　浅鉢の器形分類

記述は縄文土器が中量出土したSX100・第6層を中心に主要なもののみ行うこととし、ついで他の遺構・他の層出土例をみていく。縄文土器の一括性については、後述する。なお今回出土した縄文土器の胎土は所謂生駒西麓産のものが多数を占める。そこで生駒西麓産の胎土を持つ縄文土器については記載を省略し、非河内産のもののみ、摘記することとしたい。

SX100出土縄文土器(第16・17図)

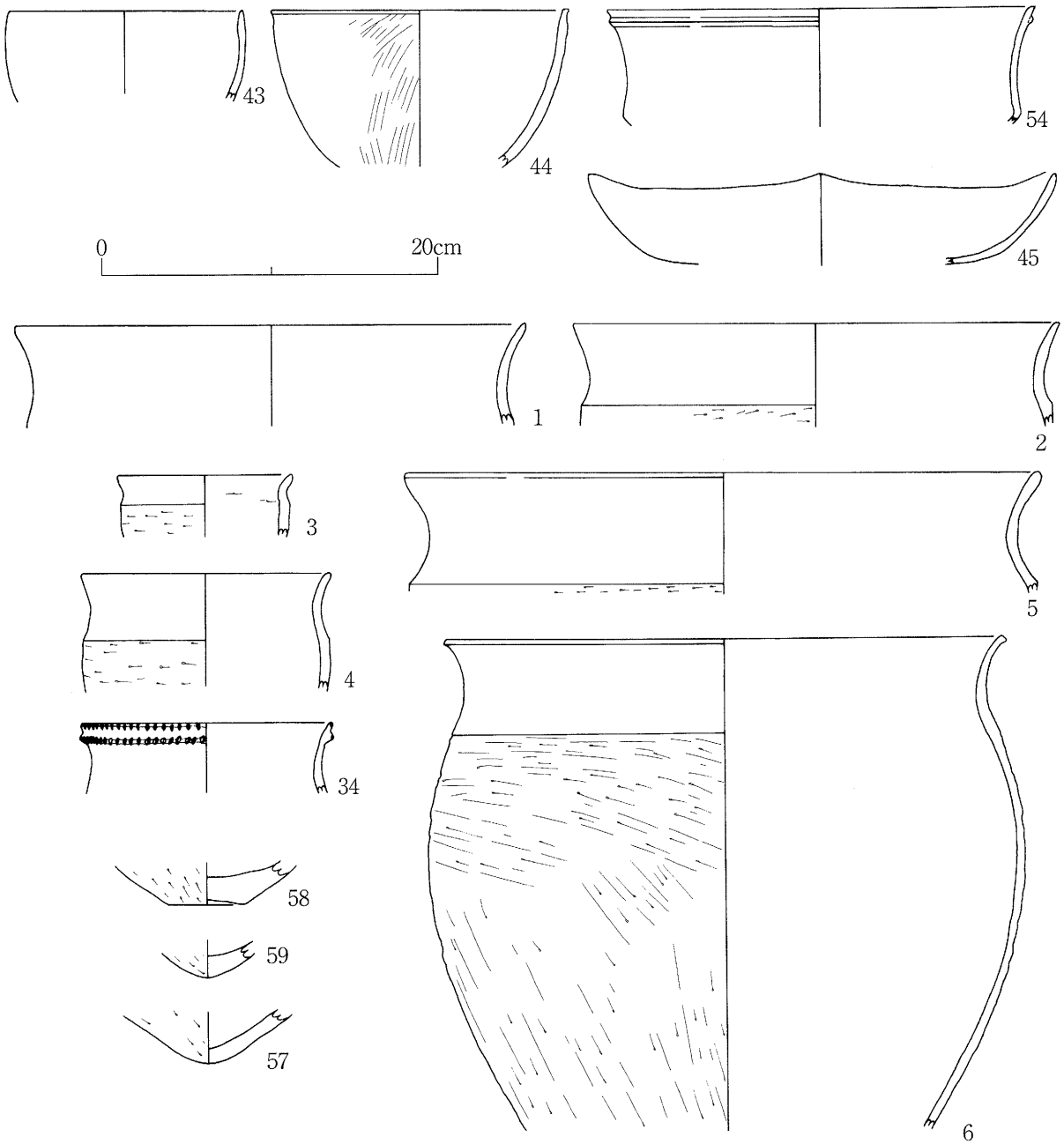
深鉢　A類はAⅠ(1)〔1～18〕、AⅠ(2)a〔19〕、AⅠ(2)b〔20〕、AⅡ(1)〔21～25〕、AⅡ(2)〔26～34〕の各器形が見られる。B類はBⅠ(1)〔35～38〕、BⅡ(1)〔39〕がある。

AⅠ(1)〔1～18〕では5のように「く」字状を呈して頸部で明瞭に屈曲するものと、8のように屈曲が不明瞭で緩やかに外反するものが見られる。今回は例数が少ないため、口頸部の外反度による分類は行わなかった。AⅠ(1)に属する土器はいずれも口頸部内外面はナデ調整で頸部下半にはケズリ調整を行う。3は小型の深鉢。1は復元口径30.2cm、残存高6.1cm。2は復元口径28.2cm、残存高28.2cm。3は小型の深鉢で復元口径10.3cm、残存高3.8cm。4は復元口径14.6cm、残存高7.2cm。5は復元口径37.6cm、残存高7.4cm。6は胴部下半まで残存。胴部外面のケズリ方向は上半と下半で異なる。復元口径33.1cm、残存高29.8cm。

20の凸帯は口唇部端面よりわずかに下がった位置に貼付されO字のキザミがある。口唇部に凸帯をもつ縄文土器は、20と同じく口唇部端面より一段下がった位置に貼付されている。AⅡ(1)〔23〕の口唇部には2条を1単位とする浅いV字キザミが施される。口頸部外面はケズリ調整。24の口唇部内面には、1条の沈線が施される。口唇部のキザミは広いV字。非河内産。25は肩部にD字形爪形文を連続刺突するもの。内彎しながら開き口縁部で外反する。刺突帯下部外面はケズリ調整する。口唇部キザミはV字である。34はAⅡ(2)に分類されるが、口唇部のキザミが端面でなく前面に施されるため、口唇部から離れた位置に貼付された凸帯を含めて断面三角形状を呈する。キザミはともにD字。BⅠ(1)〔35〕の外面のケズリは口唇部直下まで及んでいる。口唇部はナデ調整。復元口径14.8cm、残存高4.3cm。31・33は非河内産。

浅鉢　A類〔40～42〕、B類〔43～51〕C類〔52・53〕D類〔54・55〕がある。

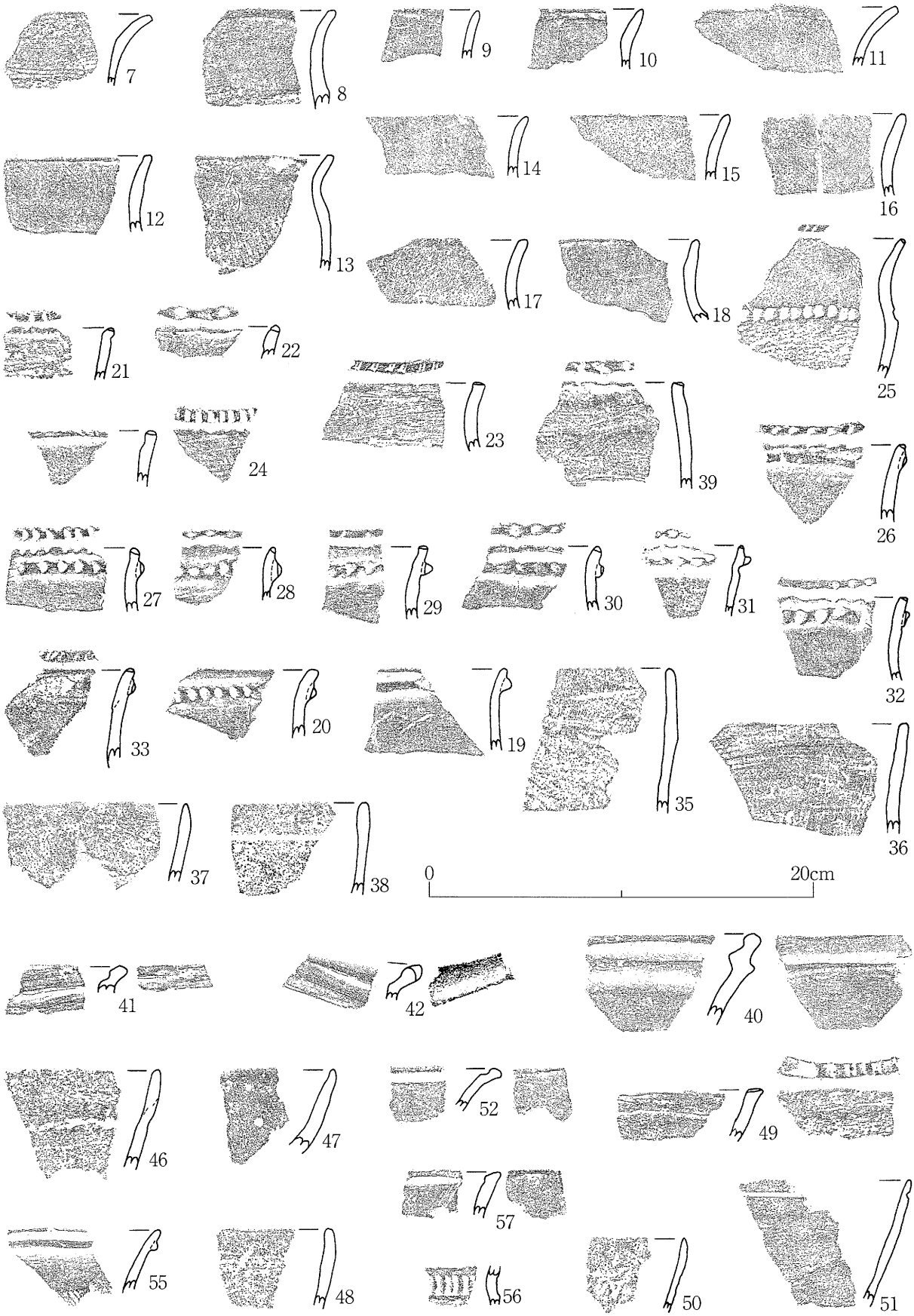
口唇部のみ残存した土器が多くあり、それらは厳密にはA類かC類か決しがたいが、口唇部内面の沈



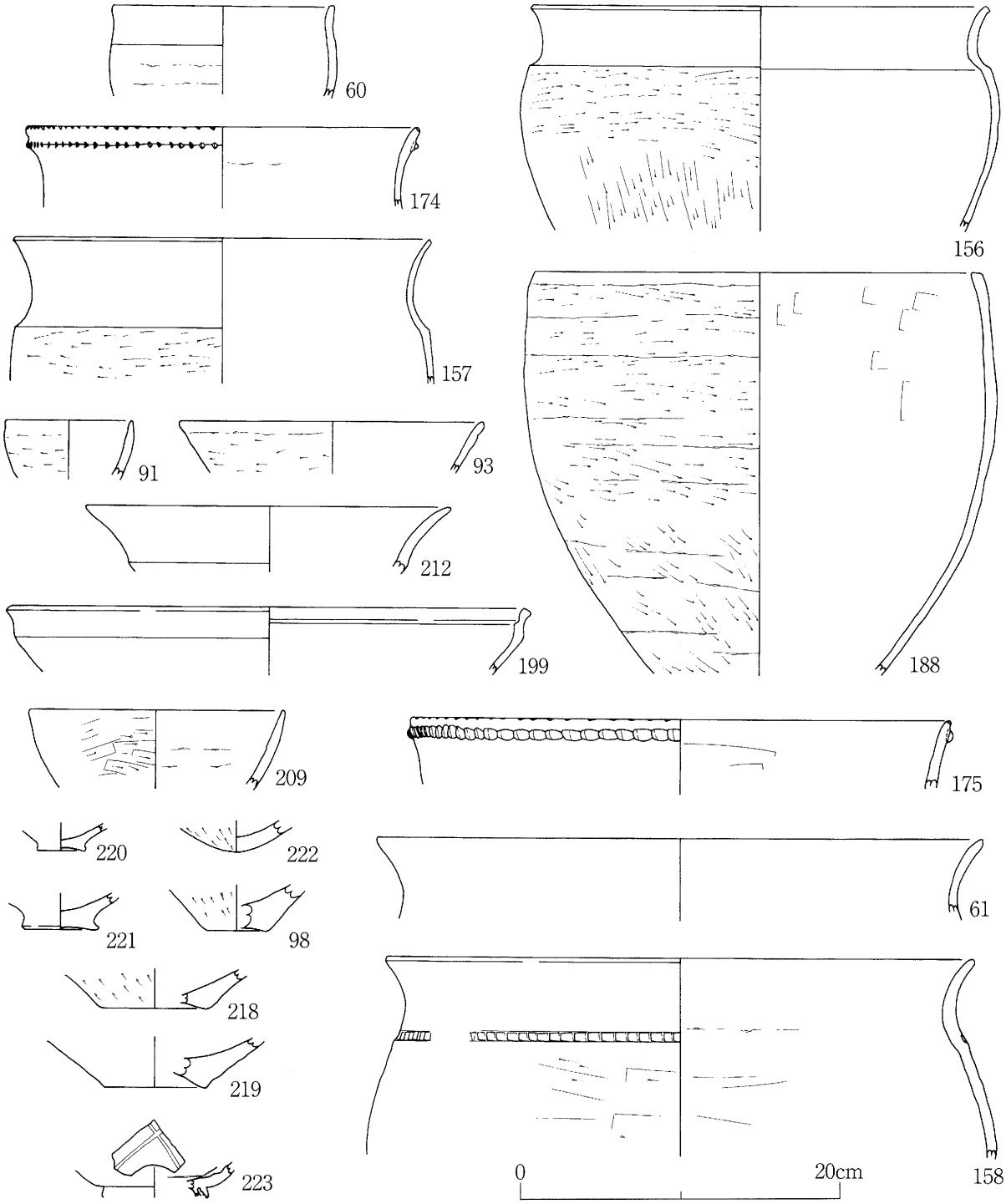
第16図　縄文土器実測図(1)

線から概ねＡ類に属すると考えられた。Ｂ類が多く認められる。

40は内面２段の突出は沈線で区画される。２条の沈線間は蒲鉾状に仕上げられる。口唇端部は内側に肥厚する。内外面ともミガキ調整。42は口唇部突起の破片である。43は復元口径13.8cm、残存高5.5cm。44は口唇部に小さなＶ字のキザミをもつもの。口唇部はごく短く外折する。外面は二枚貝条痕、内面はナデ調整。復元口径17.4cm、残存高9.5cm。45は突起をもつ浅鉢で椀形というより皿形を呈するもの。平面形は楕円形を呈する。平らな底部から内彎しながら上方へ開く。復元口径27.8cm、残存高5.5cm。52・53は口唇部内面に1条の沈線を施すもの。54はＣ類の器形に、口唇部やや下に凸帯がほどされる浅鉢。現存部分では凸帯上のキザミは認められない。復元口径25.4cm、残存高7.1cm。55も同様である。56は長いＣ字形の爪形文刺突が見られるもの。器厚から浅鉢とした。49・51・52・56は非河内産。



第17図　縄文土器実測図(2)

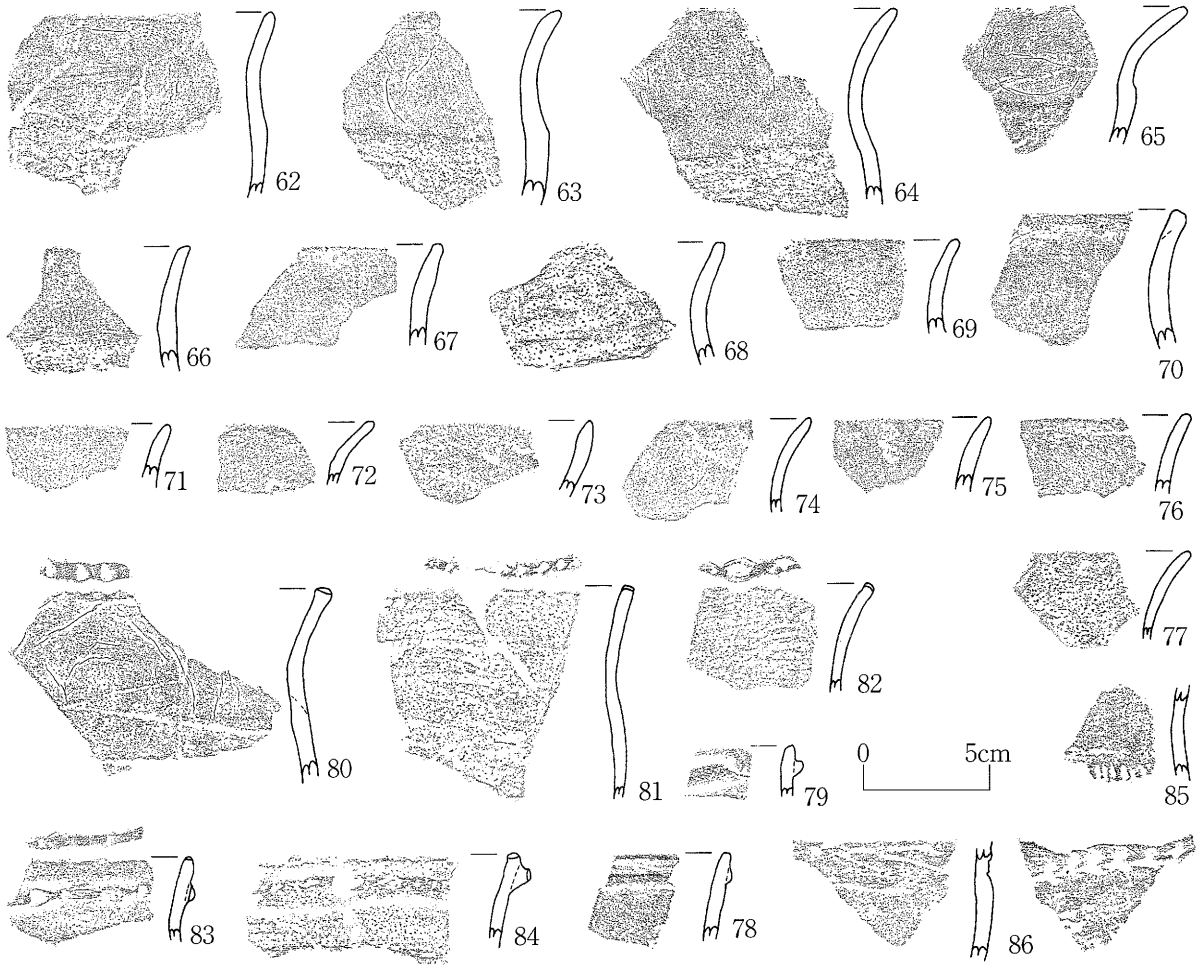


第18図　縄文土器実測図(3)

底部　尖底〔57・59〕と浅めの凹底〔58〕が見られた。

各遺構出土縄文土器(第18・19・23図)

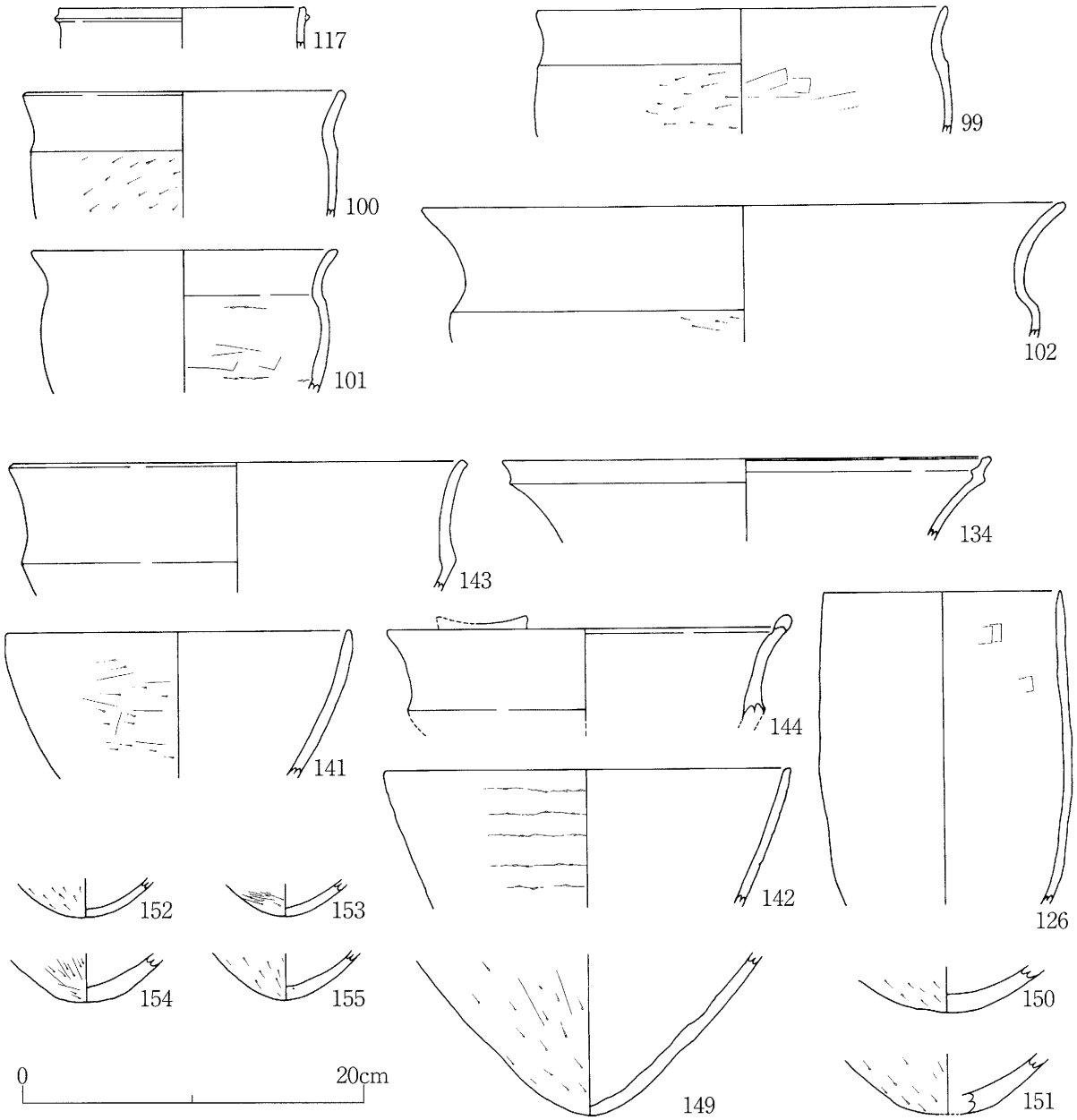
深鉢　A類のみでＡⅠ(1)〔60～64・66～77〕、ＡⅠ(2) a〔78・79〕、ＡⅡ(1)〔80～82〕、ＡⅡ(2)〔83・84〕がある。60は頸部の屈曲が弱く、そのまま上方へ立ち上がる深鉢。胴部外面に粘土紐接合痕が認められる。小型の深鉢である。復元口径14.0cm、残存高5.5cm。61は口頸部の破片。内外面ともナデ調整。復元口



第19図　縄文土器実測図(4)

径38.2cm、残存高5.1cm。62～64・66は口頸部片で、口頸部内外面ともナデ調整、胴部外面はケズリ調整で共通している。82は口唇部に大振りなO字キザミを施す。口頸部外面はケズリ調整。内面はナデ調整。83は口唇部端面にV字キザミ、口唇部下に離れた位置の凸帯上にはD字キザミが施される。85・86は胴部片である。85は屈曲部やや下に小さなC字形爪形文が半截竹管状工具により連続刺突される。内外面ともナデ調整。86は逆コ字形爪形文が連続刺突される。内外面ともケズリ調整。68・81・82・84・85は非河内産。

浅鉢・底部　浅鉢にはA類〔87～90〕、B類〔91～93・97〕、C類〔94～96〕がある。
87の外面の沈線は凹線状を呈する。内外面ともミガキ調整。88の口唇部内面には3段の鋭い突出が見られる。内外面ともナデ調整。91は小型の椀形を呈する浅鉢。外面はケズリ調整。内面ナデ調整。復元口径7.8cm、残存高3.7cm。93はC類の可能性があるが、口縁部が外上方に開く器形からB類としておく。内面および口唇部外面をナデ調整。体部をケズリ調整。口縁部と体部の境には粘土紐接合痕が認められる。復元口径19.0cm、残存高3.3cm。95・96は非河内産。98・218は凹底の底部である。縄文土器の出土地点は次のとおりである。60・62・63・66・68・70・73・77・80・84・85・92・96・218はSX99、61・81・82・88・90・95はSD102、64・83・89・98はSK104、67はSD103、69はSP315、71・74・76・78・91・97はSD300、72・79・93・94はSK121、75はSP123、86はSP310、87はSP108。このうち、SX99・SK104・SD102・SD103・SD300は弥生時代の遺構で縄文土器は混入品である。SK121は近現代の遺構。

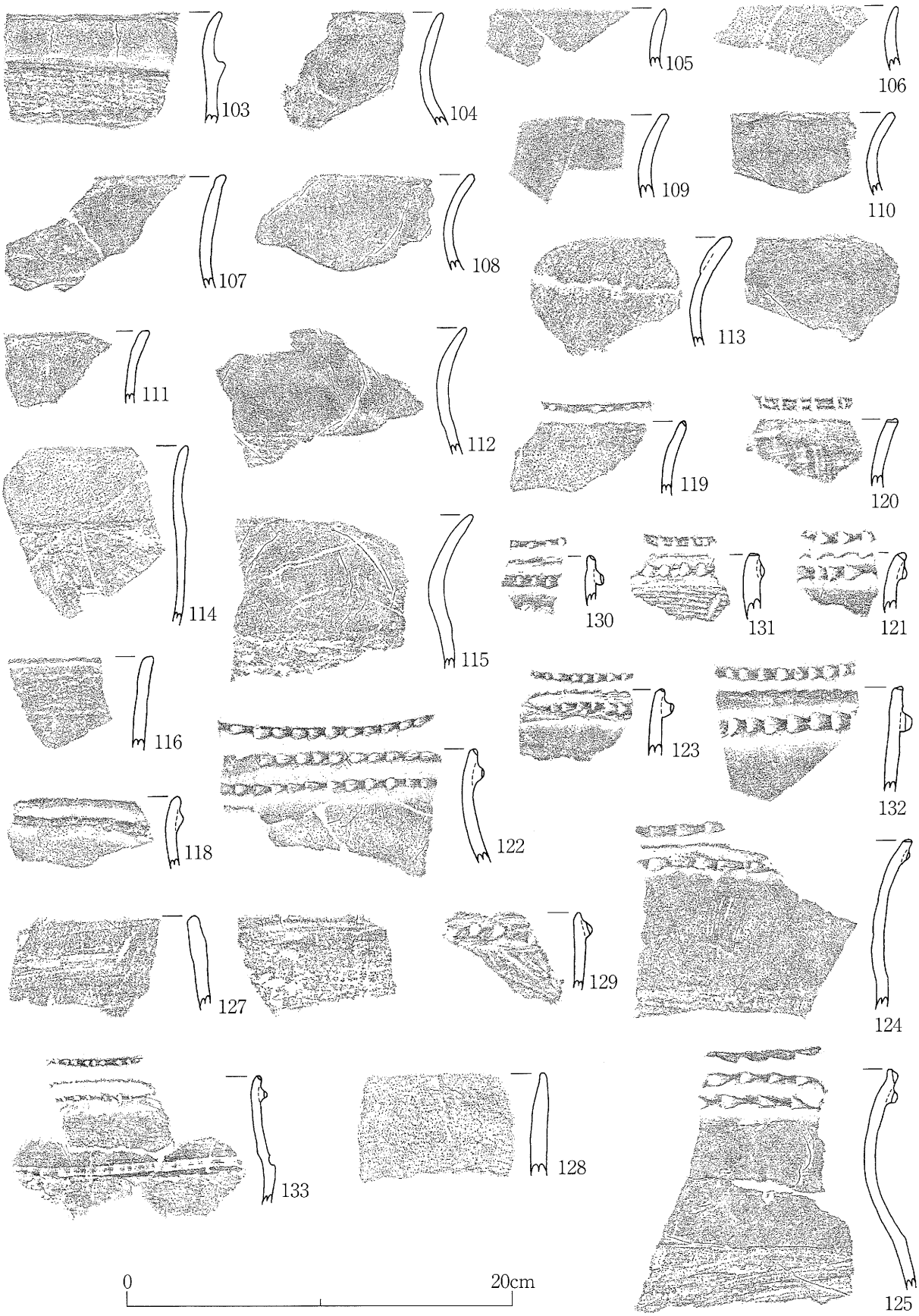


第20図　縄文土器実測図(5)

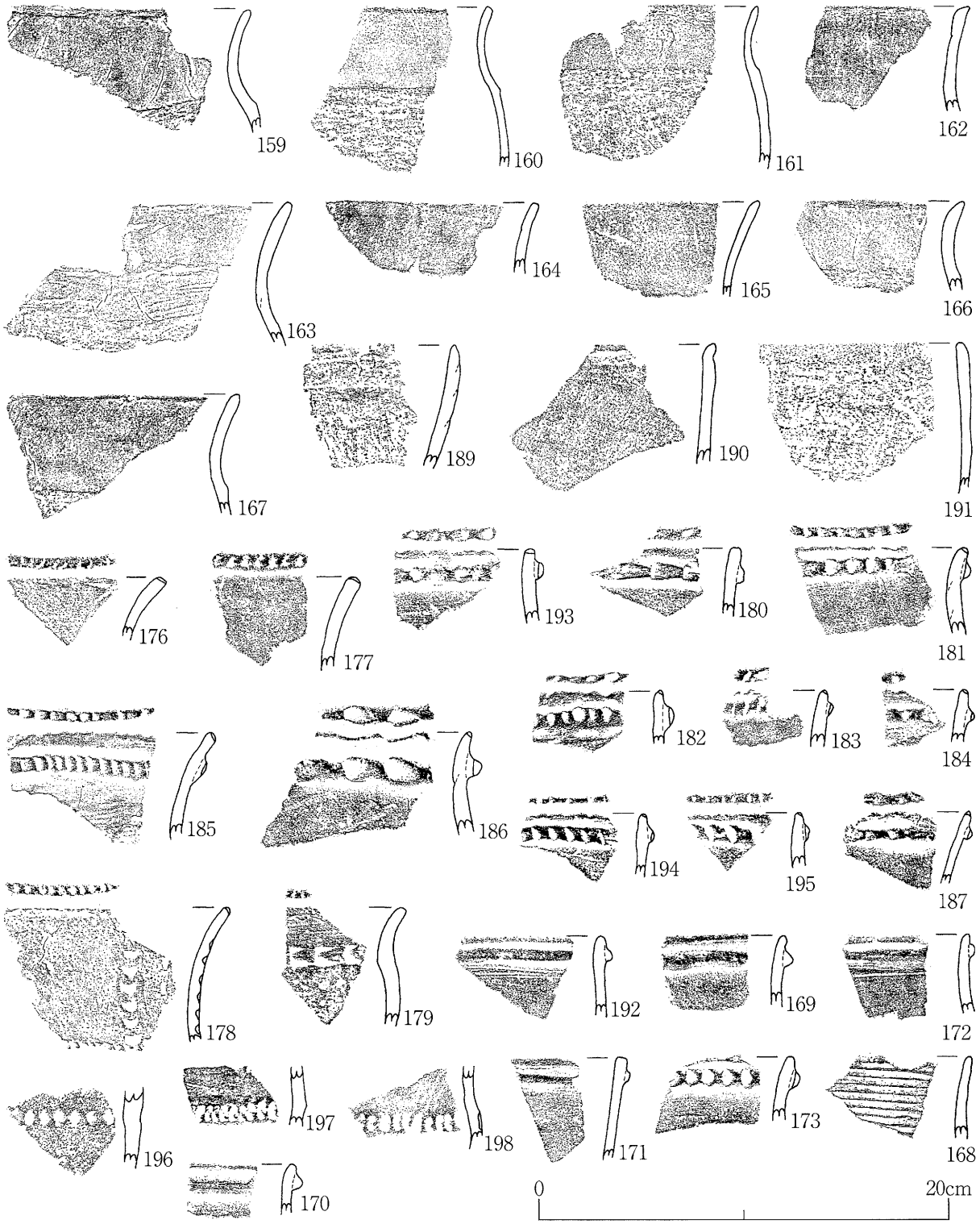
第６層内出土縄文土器(第20・21・23図)

深鉢　Ａ類にはＡⅠ(1)〔99～116〕、ＡⅠ(2)ａ〔117・118〕、ＡⅡ(1)〔119・120〕、ＡⅡ(2)〔121～125〕があり、Ｂ類にはＢⅠ(1)〔126～128〕、ＢⅠ(2)ｂ〔129〕、ＢⅡ(2)〔130～133〕が見られる。

99は口頸部が緩やかに外反するもの。口頸部外面はナデ調整、胴部外面はケズリ調整を行う。内面はナデ調整で工具痕が遺存する。復元口径24.0cm、残存高7.5cm。100も99と同様の器形。復元口径18.6cm、残存高7.5cm。101は甕形の器形を呈するもの。外面は磨耗のため口頸部から胴部まで調整法不明。内面はナデ調整。復元口径17.8cm、残存高8.5cm。102は大型の深鉢で口頸部は大きく屈曲して外反する。口頸部内外面ともナデ調整。胴部外面はケズリ調整。復元口径37.6cm、残存高8.0cm。103は頸部で折り返し気味の屈曲があり、胴部外面に強いケズリ調整を行うため、頸部で凸帯状の突出が見られるもの。他の例がないため、ここではＡⅠ(1)に含めている。107は口唇部端面内側が肥厚気味となる。113は

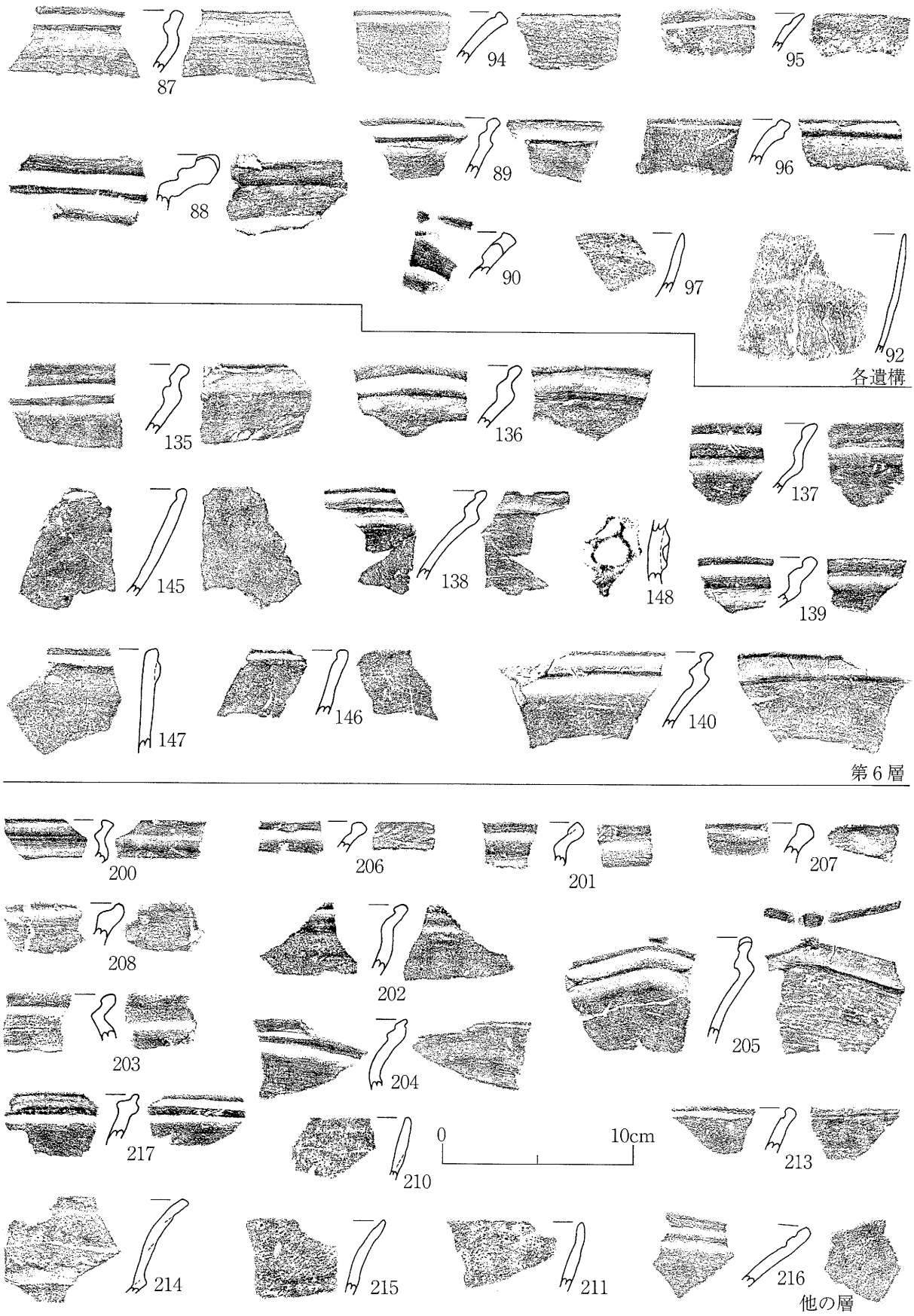


第21図　縄文土器実測図(6)



第22図　縄文土器実測図(7)

口頸部内面に粘土の折り返しが見られるもの。114は102と逆に胴部から口頸部の屈曲がほとんど見られず直立気味に開くもの。口頸部外面のナデ調整、胴部外面のケズリ調整によりその境が認められるものである。116は口唇部直下に一条の浅い沈線が施されるもの。120は口唇部端面にV字キザミが見られる。口頸部外面はケズリ調整、内面はナデ調整。125は口唇部端面、凸帯ともにD字キザミ。口頸部中央で



第23図　縄文土器実測図(8)

大きく屈曲する。凸帯下外面はナデ調整、胴部外面はケズリ調整。126はほぼ全体の器形が知られるＢＩ(1)タイプで、口唇部外面と体部内面はナデ調整。口唇部以下の体部外面は磨耗のため調整不明。復元口径14.0cm、残存高18.5cm。127は内傾する口頸部片で、外面はケズリ調整、内面はナデ調整。129は口唇部下の凸帯にＤ字キザミ。口唇部端面は尖る。131は口唇部端面にＶ字キザミ、凸帯はＤ字キザミ。凸帯直下の外面には二枚貝条痕、内面はナデ調整。133は口唇部端面と凸帯ともに小さなＯ字キザミが施される。肩部には半截竹管状工具による逆コ字形爪形文が連続刺突される。凸帯から肩部の外面はナデ調整、肩部以下の外面はケズリ調整。口唇部以下の内面はナデ調整。瀬戸内地方での前池式に併行する土器である。120・128・130・131・133は非河内産。

浅鉢　Ａ類〔134～140〕、B類〔141・142〕、Ｃ類〔143～146〕、Ｄ類〔147〕、その他〔148〕がある。134は鍵手状口縁をもつＡ類で口縁部から体部までの器形が知られる資料である。口唇部内面の突出は2段で緩やかである。内外面ともミガキ調整。復元口径28.6cm、残存高4.9cm。135の内面２段の突出のうち下方部は瘤状を呈しており直上の沈線は深く段を形成する。136・137では逆に緩やかで下部の沈線は凹線状を呈している。138も同様である。140では外面の突出が鋭く突線状になる。Ａ類は内外面ともミガキ調整である。141はB類で口唇部以下外面はケズリ調整、内面はナデ調整。復元口径30.2cm、残存高6.1cm。142は口唇部外面はナデ調整、以下体部外面はケズリ調整、内面はミガキ調整。復元口径23.8cm、残存高8.2cm。143は明瞭に屈曲する肩部を持つＣ類。長く伸びる口唇部は緩く外反して端部は面を持つ。内外面ともミガキ調整。復元口径復元26.2cm、残存高7.8cm。144は突起を持つ浅鉢。肩部を欠くが器形よりＣ類と考えられる。内外面とも磨耗のため調整不明。復元口径23.6cm、残存高5.5cm。145･146は長く伸びる口縁をもつためＣ類に措定した。ともに内外面ともミガキ調整。147は凸帯をもつ浅鉢だが凸帯部は扁平である。内外面ともナデ調整。148は浅鉢の分類外の胴部片である。円形の貼り付け文をもつ。東日本系の文様を志向したものと考えられる。144は非河内産。

底部　尖底〔149・155〕、丸底〔150・151〕、尖底気味の丸底〔152～154〕の各種が見られる。全て外面はケズリ調整、内面はナデ調整。

各層出土縄文土器(第18・19・22・23図)

深鉢　ＡＩ(1)〔65・156～168〕、ＡＩ(2)ａ〔169～172〕、ＡＩ(2)ｂ〔173〕、ＡⅡ(1)〔176～179〕、ＡⅡ(2)〔174・175・180～187〕、ＢＩ(1)〔188～191〕、ＢＩ(2)ａ〔192〕、ＢⅡ(2)〔193～195〕がある。

156は復元口径28.4cm、残存高14.3cm。157は復元口径26.0cm、残存高9.2cm。158は瀬戸内谷尻式併行で復元口径36.8cm、残存高12.6cm。168は口頸部外面を二枚貝条痕、内面をナデ調整する。174は復元口径24.4cm、残存高5.2cm。175は復元口径33.6cm、残存高4.8cm。178は口唇部からＣ字形爪形文を肩部へ連続刺突して垂下し、肩部にもＣ字形爪形文が見られる。188は復元口径28.0cm、残存高25.5cm。

浅鉢・底部　浅鉢はＡ類〔199～208〕、B類〔209～211〕、Ｃ類〔212～216〕、Ｄ類〔217〕がある。

199は復元口径33.2cm、残存高4.5cm。205はボタン状の突起を持つＡ類浅鉢。212は復元口径22.6cm、残存高4.2cm。底部　218・219は凹底。220・221は底部側面が突出する凹底。223は内面に十字状の浮彫がある底部である。

縄文土器の出土層位は次のとおりである。156・157・160・161・165・176～178・200・203・216は第５層上面、65・158・174・181・182・186・190・192・194・199・202・205・209・212・213・217・220～222は第６層上面、159・162・167・168・183・188・189・191・196・197・204・211・215・219・223は第４層内、163・164・179は第４層上面、166は第７層上面、169は第２層上面、170・173・184・193・195・198・201・208・214は第６Ａ層内、171・172・175・180・187・206・207・210は第６Ａ層上面、185は機械掘削時表採。

２） 弥生土器

弥生土器は前期～中期のものがある。中期のものはⅢ～Ⅳ様式である。

遺構出土土器

方形周溝墓供献土器(第24・25図　224～236)

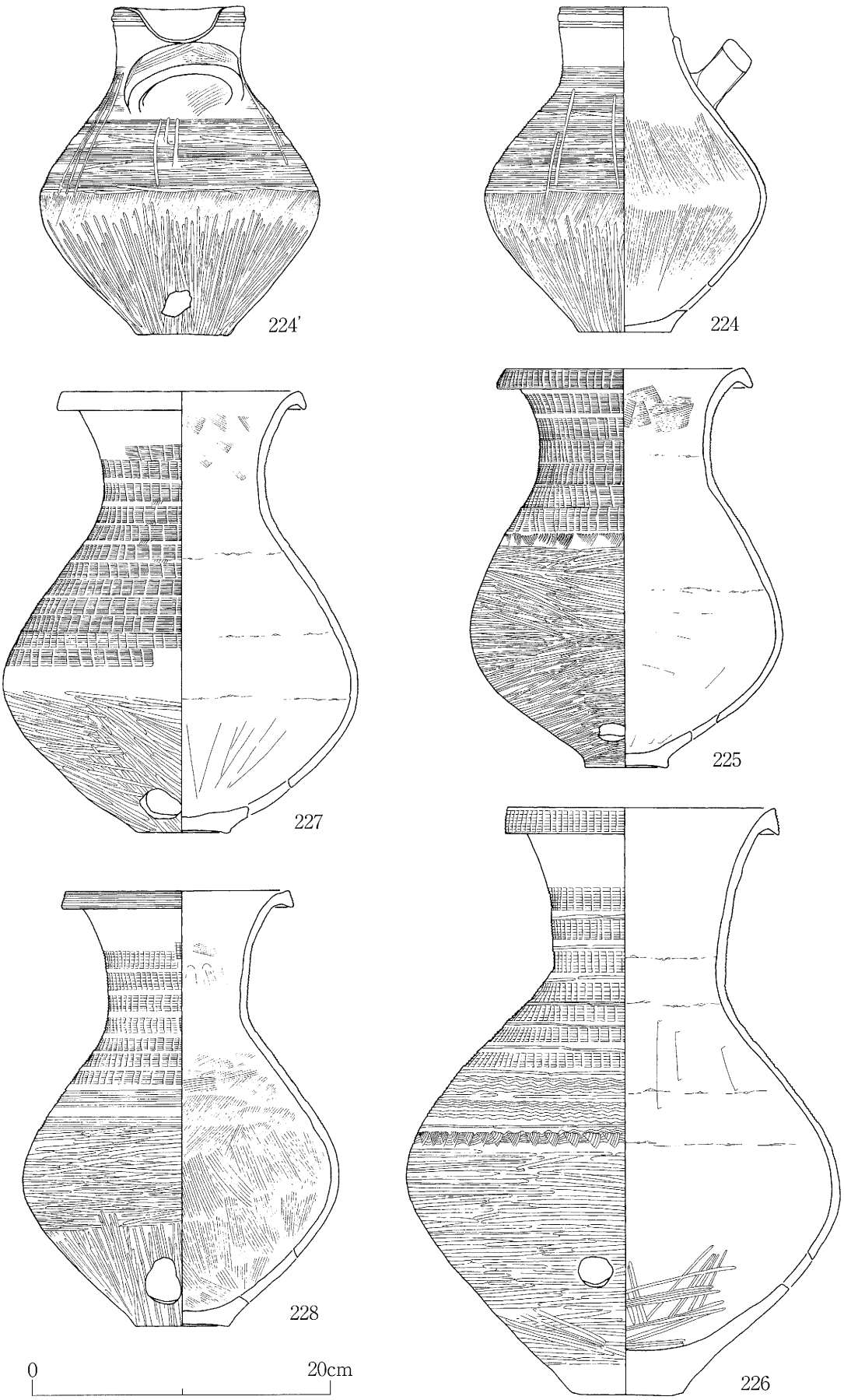
水差形土器・壷・鉢・甕の器種がある。

224・232・233は水差形土器である。224は底部が平底を呈する。体部の張りは大きく、口頸部は上方へ伸びる。口縁端部は丸く終る。頸部と体部の境に半円形を呈する把手が付く。把手の上部に位置する口縁部はゆるいU字形の切り込みを入れる。口縁部に２条の凹線文、体部に５帯の櫛描直線文を施す。直線文間は研磨する。また、縦方向に２～３本単位の研磨を等間隔に施す。体部外面の上半はハケメ調整、下半はヘラミガキ調整する。体部内面はハケメ調整する。体部下半に穿孔が１孔ある。232は形状が224とほぼ同様であるが、体部が扁球形を呈する。把手は欠損する。口頸部に３帯の簾状文、体部は上から１帯の列点文、２帯の簾状文、その下に１帯の扇形文を施す。体部に３本単位の研磨を等間隔に施す。体部下半の外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。233は形状が224と同様であるが、口頸部と把手は欠損する。把手の剥落痕が残る。体部に上から４帯の直線文、１帯の簾状文、１帯の直線文、最下段に１帯の扇形文を施す。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。体部に穿孔が２孔ある。232は生駒西麓産、他は非河内産。中期。

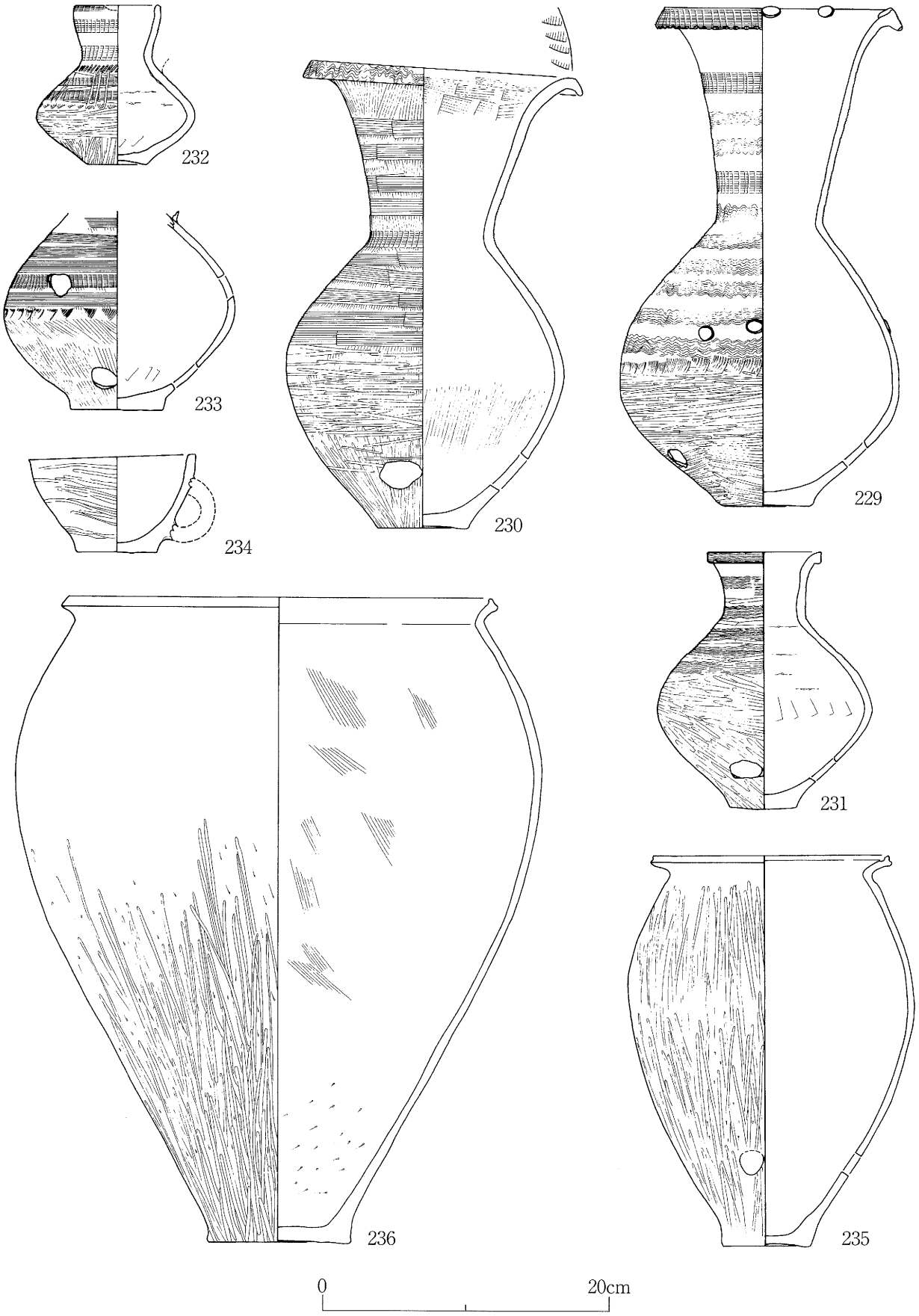
225～231は壷である。225～228は底部が平底を呈する。体部の張りは大きく、口頸部がゆるく外反する。口縁端部は下方へ拡張する。225は口縁端部に１帯の櫛描簾状文を施す。頸部から体部に６帯の簾状文、その下に１帯の扇形文を施す。体部下半の外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。226は口縁端部に１帯の簾状文を施す。頸部から体部に７帯の簾状文、その下に２帯の波状文を施す。最下段の波状文の上に扇形文を加える。文様帯間は研磨する。体部下半の外面はヘラミガキ調整する。内面は下半をヘラミガキ調整、上半をナデ調整する。227は頸部から体部に12帯の簾状文を施す。体部下半の外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。228は口縁端部に１帯の簾状文を施す。頸部から体部に７帯の簾状文、その下に２帯の直線文を施す。体部下半の外面はヘラミガキ調整する。内面は体部をハケメ調整、頸部をナデ調整する。229・230は底部が平底を呈する。体部の張りは小さく、やや球形に近い。口頸部は長く外上方へ伸び、口縁端部を下方へ拡張する。229は口縁端部に１帯の簾状文を施す。頸部から体部に上から1帯の簾状文、２帯の波状文、１帯の簾状文、６帯の波状文、最下段に１帯の扇形文を施す。体部中位と口縁部内面の相対する位置に２ヶ１対の円形浮文を貼り付ける。体部下半の外面はヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。230は口縁部に１帯の波状文を施す。頸部から体部に上から５帯の直線文、1帯の簾状文、４帯の直線文を施す。口縁部内面は１帯の扇形文を施す。体部外面は下半をヘラミガキ調整、上半をハケメ調整する。内面は体部中位と口縁部をハケメ調整、他をナデ調整する。231は225と形状が同様であるが小型である。口縁端部に１帯、頸部から体部に５帯の波状文を施す。文様帯間は研磨する。体部下半の外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。229は体部下半に２ヶ所、他は１ヶ所に焼成後の穿孔ある。225～230は体部下半に多量の煤が付着する。生駒西麓産。中期。

234は鉢である。平底を呈する底部より体部がやや内湾気味に立ち上がる。所謂、直口の鉢である。口縁端部は面を持つ。把手の剥落痕が１ヶ所に残る。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産。中期。

235・236は甕である。体部の張りが大きく、口縁部は外折する。235は口縁端部を摘み上げ気味に拡張する。体部外面はヘラケズリの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。体部下半の１ヶ所に焼成



第24図　弥生土器実測図(1)



第25図　弥生土器実測図(2)

後の穿孔がある。236は口縁端部が面を持つ。体部外面はヘラケズリの後、ヘラミガキ調整する。内面は下部をヘラケズリ調整する。他はハケメの後、ナデ調整する。235は非河内産、236は生駒西麓産。中期。

ＳＸ99(第26図　237～239)

壷と高杯の器種がある。

237・239は壷である。237は口頸部が長く外上方へ伸び、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に１帯の櫛描波状文、頸部に３帯の直線文を施す。外面はハケメ調整する。内面は口縁部をハケメ調整、頸部をヘラミガキ調整する。239は体部の破片であり、３条単位のヘラ描山形文を施す。風化が著しく、調整法は不明である。生駒西麓産。237は中期、239は前期。

238は高杯の杯部である。浅い椀状を呈し、口縁端部が面を持つ。口縁部に４条の凹線文を施す。外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。生駒西麓産。中期。

ＳＸ100(第26図　240～242)

壷蓋と甕の器種がある。

240は壷蓋である。立ち上がりはゆるく、口縁端部は丸く終る。内外面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産。時期は不明。

241・242は甕である。体部の張りは小さく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部はやや面を持つ。外面に１条のヘラ描沈線文が残る。242は口縁端部に刻み目を施す。生駒西麓産。前期。

ＳＸ201(第26図　243～245)

底部と甕の器種がある。

243は底部である。やや上げ底を呈する平底である。内外面はナデ調整する。生駒西麓産。時期は不明。

244・245は甕である。底部が平底を呈する。体部はやや張り、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。244は口縁端部に１条の凹線文を施す。体部外面の上半はハケメ調整する。下半はヘラケズリの後、ヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。245は口縁端部に刻み目を施す。体部外面はハケメ調整、内面は風化が著しく調整法は不明である。244は生駒西麓産、245は非河内産。中期。

ＳＤ300(第26図　246・247)

甕と底部の器種がある。

246は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部はやや丸く終る。体部外面はハケメ調整する。内面は体部をナデ調整、口縁部をハケメ調整する。生駒西麓産。中期。

247は底部である。平底を呈し、体部の張りは小さい。外面はハケメ調整、内面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産。時期は不明。

ＮＲ１(第26図　248・249)

鉢と底部の器種がある。

248は鉢である。体部は内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が丸く終る。体部外面に櫛描波状文と直線文を１帯ずつ施す。体部内面はハケメ調整する。生駒西麓産。中期。

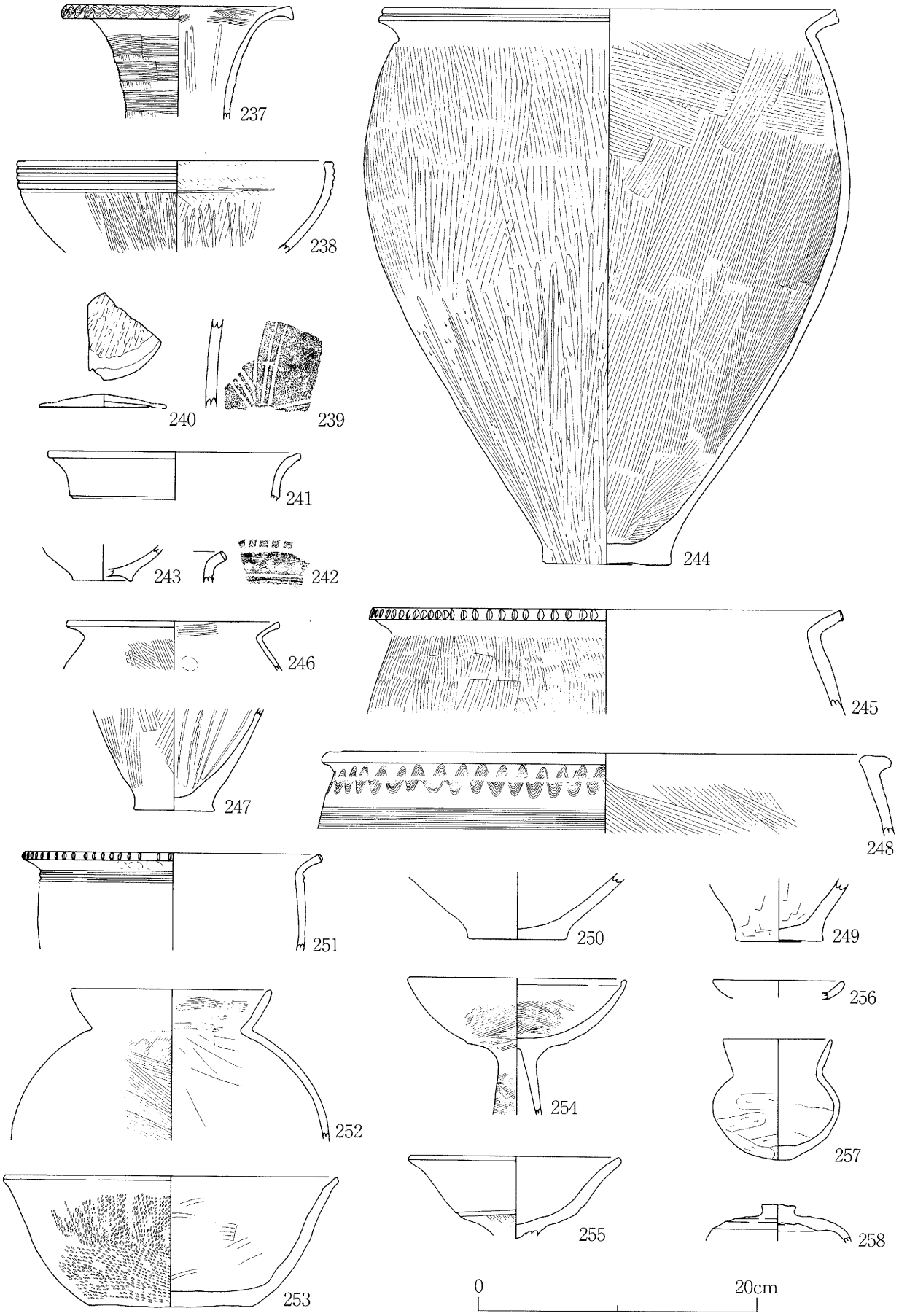
249は底部である。平底を呈し、体部の張りは小さい。内外面はハケメの後、ナデ調整する。生駒西麓産。時期は不明。

ＳＫ121(第26図　250・251)

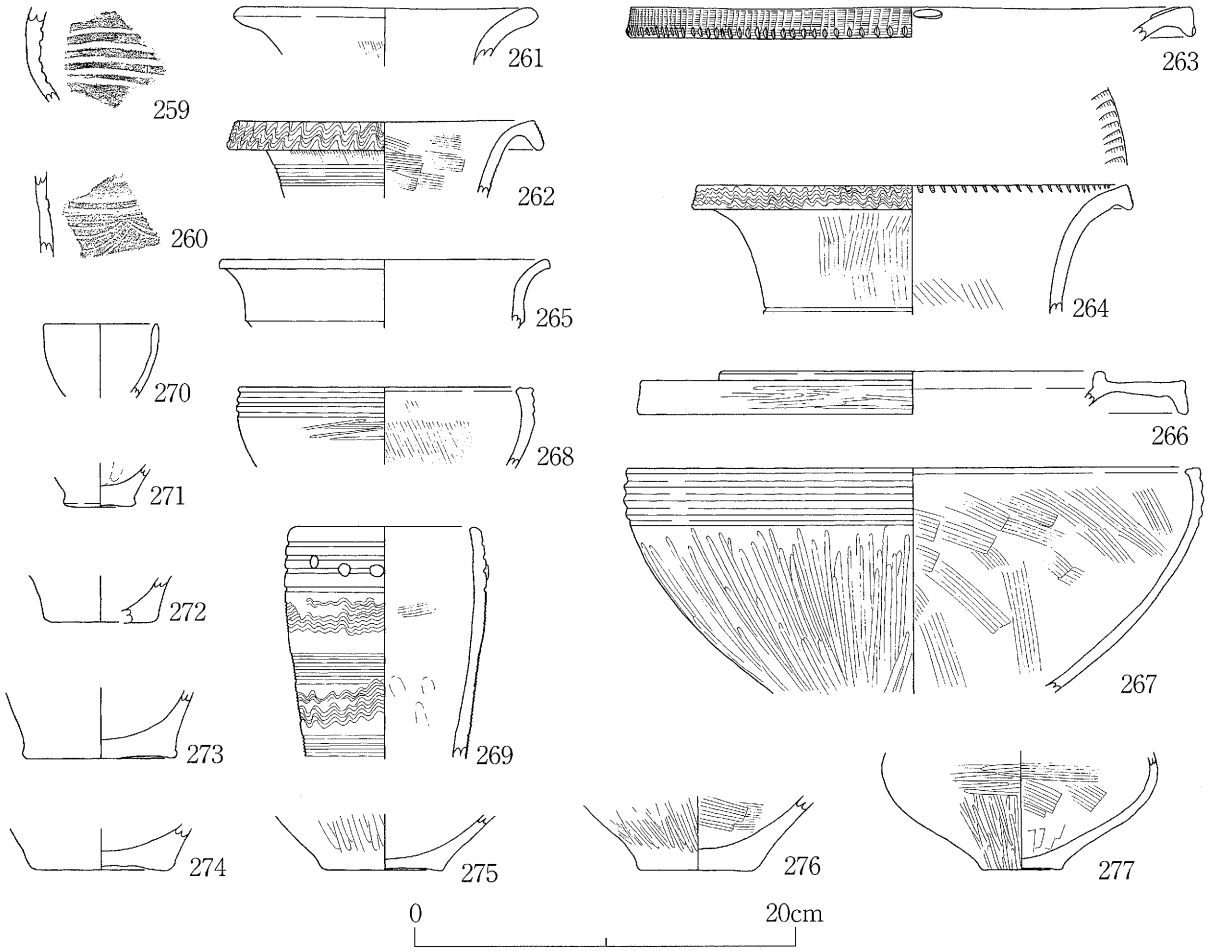
底部と甕の器種がある。

250は底部である。平底を呈し、体部の張りは大きい。内外面はナデ調整する。生駒西麓産。時期は不明。

251は甕である。体部の張りは小さく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部はやや面を持つ。口縁端部



第26図　弥生土器・土師器・須恵器実測図



第27図　弥生土器実測図(3)

に刻み目、体部に２条のヘラ描沈線文を施す。体部内外面はナデ調整する。生駒西麓産。前期。

遺物包含層出土土器(第27図　259～277)

第４・５・６・６Ａ層より出土したが層位的に時期差がないので一括して記す。壷・甕・高杯・細頸壷・鉢・底部の器種がある。

259～264は壷である。259・269は体部の破片である。259は５条のヘラ描沈線文、260は１条の削り出し凸帯とその下に４条１単位の弧状文を施す。261は口縁部が短く外反し、口縁端部が丸く終る。外面はハケメの後、ナデ調整する。内面はナデ調整する。262～264は口頸部がゆるく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。262は口縁端部に１帯の櫛描波状文を施す。頸部に１帯の直線文が残る。内外面はハケメ調整する。263は口縁端部に簾状文を施す。口縁部内面に円形浮文を貼り付ける。264は口縁端部に１帯の波状文、口縁部内面に１帯の扇形文を施す。頸部に１帯の直線文が残る。外面はハケメ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。260は非河内産、他は生駒西麓産。259～261は前期、他は中期。

265は甕である。体部の張りは小さく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部はやや面を持つ。外面に１条のヘラ描沈線文が残る。体部内外面はナデ調整する。生駒西麓産。前期。

266～268は高杯の杯部である。266は口縁部が水平方向に伸び、口縁端部を下方へ大きく拡張する。口縁部と杯部の内面境には１条の凸帯を廻らす。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。267・268は浅い椀状を呈し、口縁端部が面を持つ。267は口縁部に４条、268は３条の凹線文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面ハケメ調整する。266は非河内産、他は生駒西麓産。中期。

269は細頸壷である。頸部が上方へ伸び、口縁部がやや内湾する。口縁端部は丸く終る。口頸部には４

条の凹線文とその下に櫛描波状文と直線文を交互に２帯ずつ施す。凹線文の上に１帯の円形浮文を廻らす。内外面はナデ調整する。生駒西麓産。中期。

270はミニチュアの鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部が丸く終る。内外面はナデ調整する。生駒西麓産。中期。

271～277は底部である。平底を呈するものとやや上げ底を呈するものがある。内外面はヘラミガキ調整するものとナデ調整するものが多い。271・272は非河内産、他は生駒西麓産。時期は不明。

３）　古墳時代以降の土器

土師器・韓式系土器・須恵器がある。

遺構出土土器

ＮＲ１(第26図　252～254)

土師器と韓式系土器がある。土師器は甕と高杯、韓式系土器は鉢の器種がある。

252は甕である。体部の張りは大きく、口縁部が内湾気味に強く外反する。口縁端部は丸く終る。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はハケメ調整する。布留式期。

254は高杯である。柱状部はゆるく下方へ伸びる。杯部は内湾気味に伸び、浅い椀状を呈する。口縁端部は丸く終る。杯部の下部外面にゆるい稜が付く。内外面はハケメ調整する。布留式期。

253は鉢である。底部は平底を呈する。体部はゆるく外上方に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終る。外面は縄蓆文のタタキ調整、内面はナデ調整する。布留式期。

ＳＸ201(第26図　255)

255は土師器の高杯である。杯部がゆるく外上方へ伸び、口縁部がわずかに外反する。浅い椀状を呈する。口縁端部は丸く終る。杯部の下部外面にゆるい稜が付く。杯部外面の下半はハケメ調整、上半はナデ調整する。内面はナデ調整する。布留式期。

ＳＤ６(第26図　256)

256は土師器の皿である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終る。内外面はナデ調整する。中世期。

遺物包含層出土土器(第26図　257・258)

第６層より出土した。土師器と須恵器がある。

257は土師器の小型丸底壷である。底部は丸底であり、体部が球形を呈する。口縁部は外上方に直線的に伸び、口縁端部が丸く終る。体部外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。布留式期。

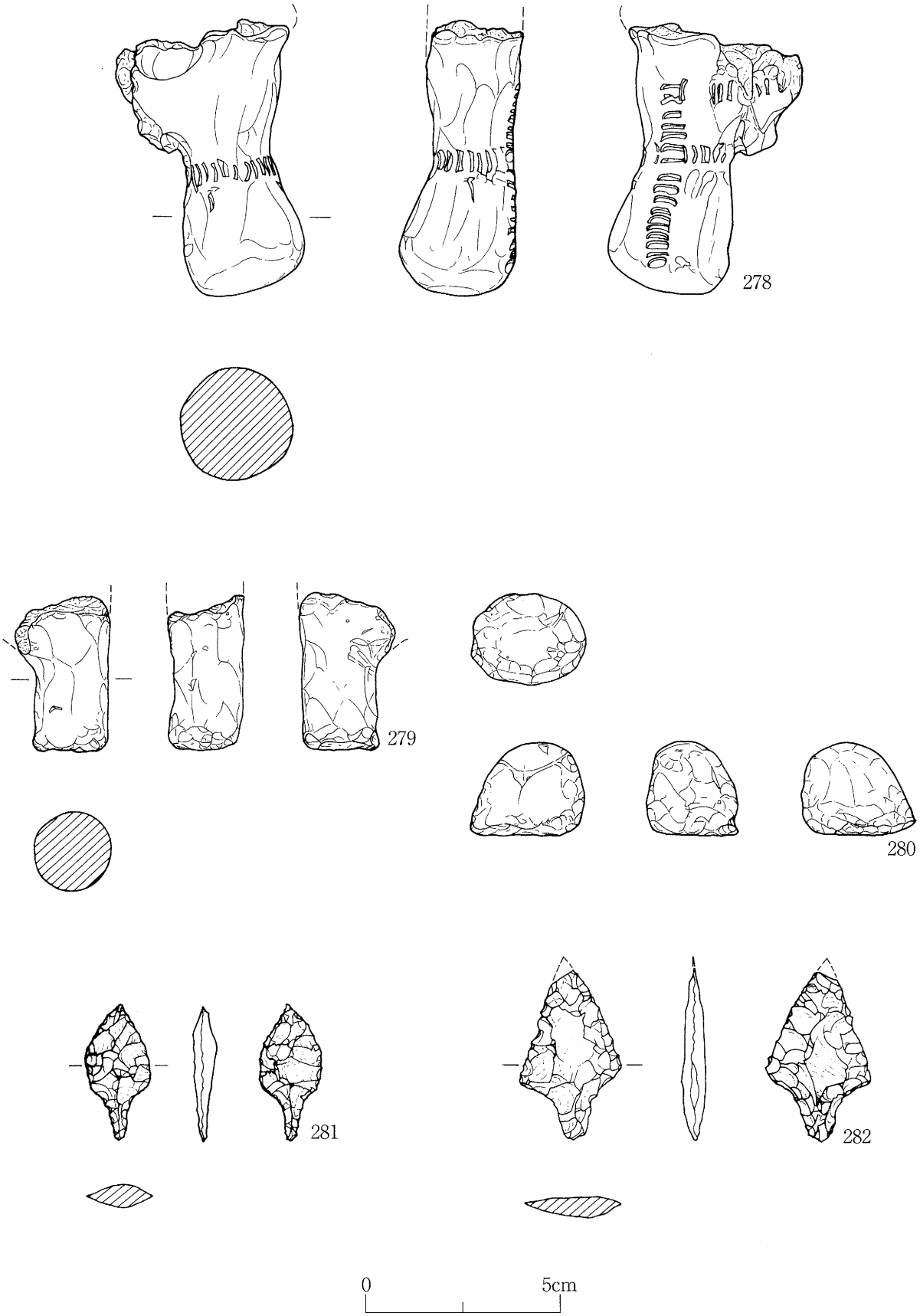
258は須恵器の蓋杯である。口縁部は欠損し、天井部が残る。外面の中央に円形のつまみが付く。外面は回転ヘラケズリ調整、内面は回転ナデ調整する。古墳時代。

４）　土製品(第28図　278～279)

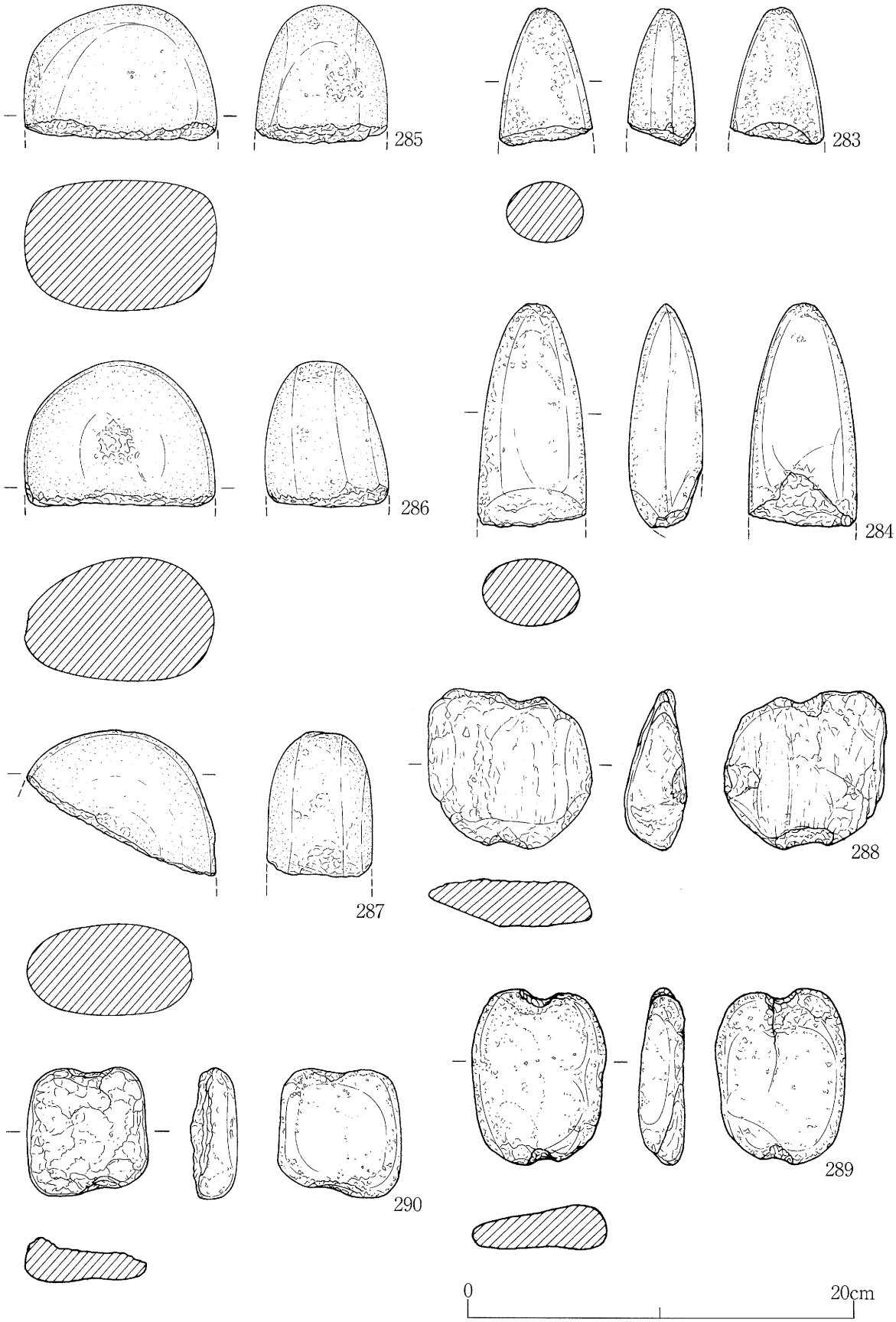
土偶と用途不明品がある。縄文時代晩期のものである。

278・279は土偶である。278は体部上半と左足を欠損する。足部は下に向かって径が大きくなる。後面の背中の下に円形の窪みを入れ、臀部を表現する。前面の腹部に横列、足に縦列、足上部に１周するＣ字形に近い刺突文を施す。全体は丁寧に撫でて仕上げる。279は左右は不明であるが足である。上から下までほぼ同じ径である。278と同様に撫でて仕上げるがやや粗雑である。生駒西麓産。278はＳＤ103の直上、279はＳＰ114より出土。縄文時代晩期。

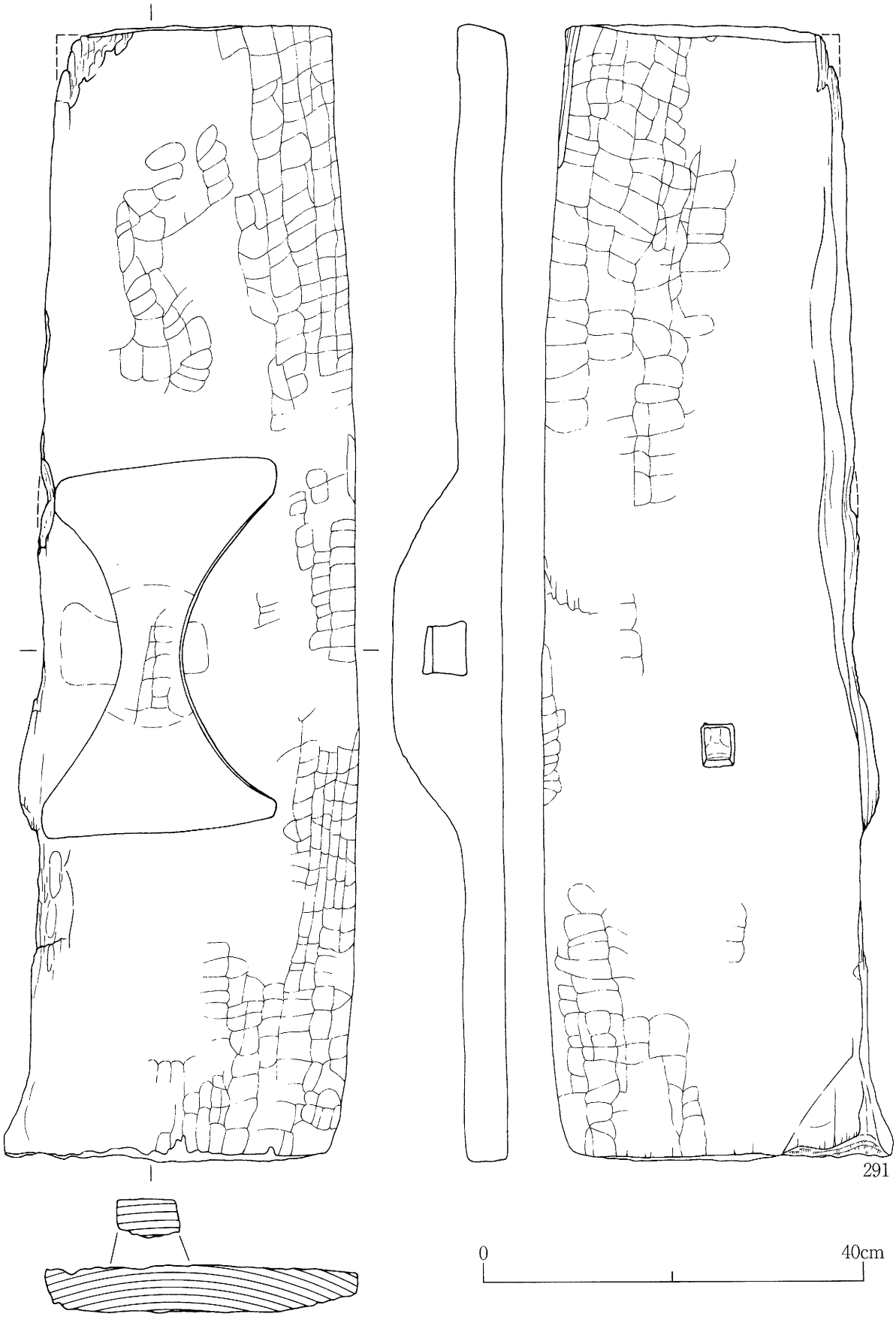
280は用途不明品である。半円形を呈する土製品である。下部に剥落痕があることから土製品の一部



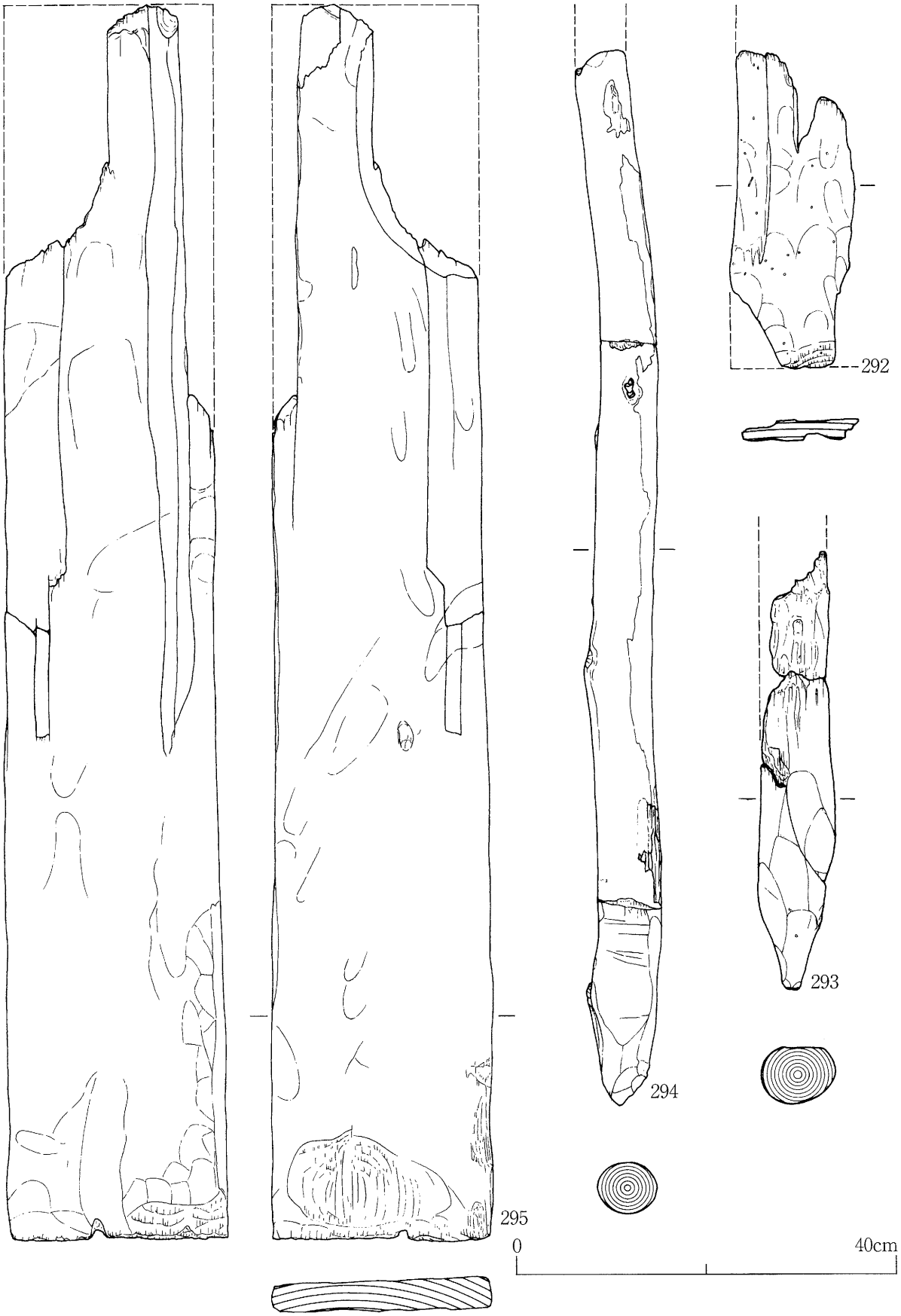
第28図　土製品・石器実測図



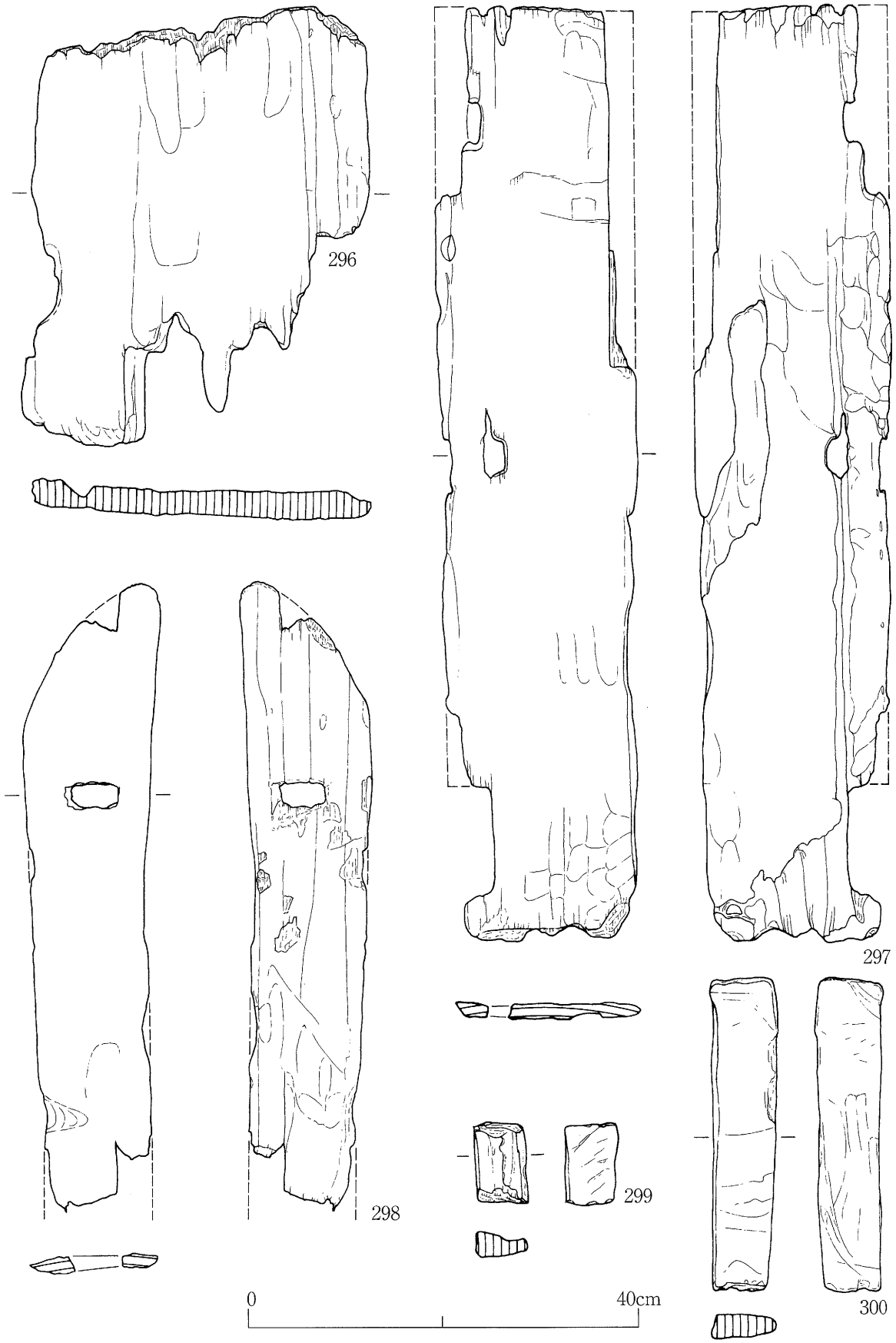
第29図　石製品実測図



第30図　木製品実測図(1)



第31図　木製品実測図(2)



第32図　木製品実測図(3)

と考えられる。全体は撫でて仕上げる。生駒西麓産。ＳＸ100より出土。縄文時代晩期。

５）　石器（第28・29図　281～290）

打製石器・磨製石器・礫を利用した石器がある。縄文時代晩期と弥生時代中期のものがある。

281・282は打製の石鏃である。茎を有する石鏃である。全体を押圧剥離によって丁寧に仕上げる。281は刃部が柳葉状、282は先端部を欠損するが三角形を呈する。石材は281が近畿では珍しいチャート製である。282はサヌカイト製である。281は第５層、282はＳＤ300より出土。弥生時代中期。

283・284は磨製の石斧である。乳棒状を呈するが刃部は欠損する。基部より刃部に向かって幅広になる。全体的に研磨は丁寧である。283はＳＸ99、284はＳＸ100より出土。縄文時代晩期。

285～287は磨石である。円礫を利用するが約1/2を欠損する。円周部に磨り痕や敲打痕が残る。また、285・286は欠損面にも同様の痕跡が残っており、握りやすくするために意図的に割っている可能性も考えられる。285はＳＸ201、286はＳＸ99、287は第６層より出土。縄文時代晩期。

288～290は石錘である。扁平な板状を呈する礫を利用しており、相対する２ヶ所を打ち欠く。他は自然面で残る。288はＳＸ100、289はＳＸ99、290は第７層より出土。縄文時代晩期。

６）　木製品（第30～32図　291～300）

木製品は建築材や土木材などがある。ＳＸ201より出土した。布留式期のものである。文中に針葉樹と広葉樹を記すが、専門家による樹種同定ではなく、筆者の肉眼観察によるものである。横断面の弧は木取りを表す。

291は扉板である。堰の部材として転用されていた。長方形を呈し、中央部に閂受けの握手状突起を削り出す。握手状突起には閂孔を穿つ。側縁の片側は二次加工によって削られている。また、閂受けが中心よりずれる。裏面には長方形の抉りが１ヶ所ある。全体に削り痕が明瞭に残る。板目材を使用する。材は針葉樹である。

292は矢板である。長方形を呈し、木口の一端を斜めに削り出す。板目材を使用する。材は針葉樹である。

293・294は杭である。棒の木口を鋭利に尖らす。上部は自然面である。294は部分的に樹皮が残る。芯持ち材を使用する。材は広葉樹である。

295は板である。木口の一端を欠損するが長方形を呈する。木口は細く尖らせる。削り痕が明瞭に残る。扉部材の方立の可能性がある。板目材を使用する。材は針葉樹である。

296は抉り入り板である。形状は正方形に近い。欠損部があるが側縁と木口の２ヶ所に抉りを入れる。柾目材を使用する。材は針葉樹である。

297・298は有孔板である。297は長方形を呈する。中央と上部の２ヶ所に孔を穿つ。298は木口をＪ字形に削る。一端は欠損しているので不明である。上部に孔を穿つ。板目材を使用する。材は針葉樹である。

299・300は角材である。長方形を呈する。板目材を使用する。材は広葉樹である。

Ⅶ　まとめ

1）　縄文時代晩期の集落域と出土遺物の様相について

調査開始の機械掘削時から縄文土器が多量に見られ、後世の遺物の混入が極めて少なかったことから、Ａ地区の東部には晩期の単純な遺物包含層が広がると考えられた。このため、遺物包含層である第６層の掘り下げについては、５ｍメッシュの地区杭のほか、これを2.5mで四等分した細分地区(北西ア・北東イ・南西ウ・南東エ)を用い、例えばＡ15エと表記して遺物の取り上げを行ったが、第４図の土層断面図で示したように、Ａ地区東区の東南側にのみ単純層の分布はとどまっていた。それ以外の箇所は量的に縄文土器が多いが、少量の弥生土器が混在する状態であった。ただし、層の変化は漸移的で、明確な分層は不能であった。扇状地での層の移動が考えられた。この単純層の分布と、土偶が出土したピットと埋土を等しくするものが広がるＡ地区の東端南側を中心に晩期の集落域が存在すると推定される。

縄文時代の遺物には、晩期中葉から後半の土器と、該期に属する土偶、土製品、石器がある。まず土器について予察を試みる。凸帯がある深鉢については口唇部と肩部に付く二条凸帯を有するものは認められず、また器種の構成は深鉢と浅鉢のみで壷は出土していない。このことから船橋式以降の縄文土器は除外される。口頸部が外反する深鉢ＡⅠ(１)類の中で口頸部外面に二枚貝条痕が施されるのは168のみで、他は全て、口頸部外面はナデ調整による。これは凸帯文土器出現直前の篠原式新段階の特徴である。凸帯のある深鉢は細片資料が多いが、浅鉢Ａ類が見られることから、滋賀里Ⅳ式とくに口唇部キザミを伴うＡⅡ(２)類はその前半期に位置づけられる。近年、型式が設定されつつある「鬼塚」式の様相に合致する。この点については別稿で論じたい。ただ１点のみ指摘したい。それは瀬戸内の谷尻式～前池式併行の土器群である。これらの土器群は既に鬼塚遺跡第８次、恩智遺跡昭和61年度調査区などで散見されるが、今回の調査でも中量認められる。Ｃ字形爪形文が口唇部から肩部に連続刺突し垂下する178は谷尻式、口唇部に凸帯を伴う133は前池式に併行する。179・198のように生駒西麓産の胎土をもつものがあり、瀬戸内の影響のもとに製作された土器が認められる。いっぽう、前池式には口頸部外面に二枚貝条痕が残存するが、前記したように今回の土器にはほとんど皆無であり対照をなしている。この点を踏まえて「鬼塚」式の様相を再考する必要があろう。

土偶は２点出土した。いずれも脚部である。278は正面から背面にかけて縦横にＣ字形爪形文が施される。縄文土器と類似した施文具が使用されている。爪形文が刺突された土偶は過去にも鬼塚遺跡で出土しており、いずれも脚部が踏ん張る形態をもっている。石器には磨製石斧・石錘・磨石など生業に係わる資料がみられた。

2）　弥生時代中期の墓域

前記した土層の理由から、Ａ地区東区・中区の遺構面Ⅳは、縄文時代と弥生時代の遺構が錯綜する結果となった。弥生時代の溝や土坑から弥生土器が出土しており、１個体に復元可能なものが多く認められた。これらは胴部下半に穿孔を伴い、墓への供献土器と考えられる。いま、遺構面Ⅱに含まれる弥生土器を併せて第33図に図示してみた。その結果、穿孔を伴う土器は、Ａ地区中区の北側と南側に列をなして収斂することがうかがわれる。今回は調査で明らかにできなかったが、網目で囲繞された方形周溝墓が想定される。これによると、一辺約13～14mを測る規模をもつ。網目を周溝と仮定すると、ＳＤ103出土の230、ＳＫ104出土の235が周溝の上部に、Ａ7杭とＡ10杭の中間で一括出土した226～228、231、236は周溝の下部に位置することになる。土器は穿孔とともに胴部下半に煤の付着が認められ、土器埋納儀礼のあり方を示唆する可能性がある。

3） ＳＸ201と出土扉板について

ＳＸ201は前述したように第5層上面を遺構面とする自然河川ＮＲ２を精査する過程で検出したものである。ＮＲ２の内部からはほとんど遺物が出土しなかったが、下部の溝状を呈する箇所からごく少量の弥生土器がみられ、中区では第5層上面でⅢ～Ⅳ様式の弥生土器が一括出土していることから、ＮＲ２の埋没時期を弥生Ⅳ期以降に推定することができる。いっぽう、ＳＸ201の上層で検出したＮＲ１には布留式期の土師器・韓式系土器（第26図252～254）を含み、ＳＸ201出土の土師器高杯（第26図255）と時期的に大きな隔絶は認められない。出土土器が少ないこともあり、ここでは５世紀代の中葉を中心とした時期に押さえておきたい。

ＳＸ201はその形状や構築方法から堰状遺構と考えているが、敷き詰められた拳大の礫の状況や桃核の出土からみて、河川の流向の制御や取水・排水など実務的な機能を有していたとは考え難い。具体的な遺物の出土に欠けるが、祭祀性の強い遺構とみることができる。この場合、参考になるのは、今回の調査地から北東約300mにある第11次調査で検出された石組遺構や配水遺構である。石組遺構については第２章で略説したので省き、配水遺構を紹介しておく。配水遺構は６世紀初頭の構築にかかり、中央に１m間隔で長さ1.1m幅15cmほどの板材２枚を横にならべ、内部には拳大の礫多数を配していたとされる。配水遺構の周辺には棒材や杭材のほかナスビ形鋤や盤などの木製品が流れ込んだ状態で出土している。板材の埋置や多数の礫の出土状況など、ＳＸ201との近似性が窺われる。ただし、報告者は伴出した水田遺構との関連を考えている。ここでは扇状地や谷地の上流側と下流側で親水性を共通項とする遺構がやや時期を違えて築造されたことを指摘しておく。

さて、今回の調査で扉板と方立が出土した。この部材がセットであれば、これは方立・小脇板形式の戸口装置になる〔宮本2007〕。松岡良憲氏は、扉板について29遺跡53出土例を集成されている〔松岡1997〕。宮本長二郎氏は、扉・蔀材について21遺跡78出土例を収集された〔宮本2007〕。宮本氏に拠れば、扉と蔀との区分は難しく、把手の有無や軸長で識別するとする。今回出土した扉板には転用時に扉軸を欠失したようで、正面からみて左右の区別はできないが、X字形把手が他の例と比較して巨大であることが特徴である。また転用先の出土状態を含めて、その形態は福岡県太宰府市尾崎遺跡出土例に近い〔古都太宰府を守る会1993〕ことが挙げられる。今後の出土例の増加に期待したい。

【主要な参考文献】（本文中に掲げた文献を除く）

家根祥多「近畿地方の突帯文土器出現期の様相」（『縄文時代晩期の土器編年の諸問題』〔第6回中四国縄文研究会資料〕、1995年。）

家根祥多「近畿地方の土器」（『縄文文化の研究4縄文土器Ⅱ』、1981年。）

平井　勝「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」（『古代吉備』10集、1988年。）

泉　拓良「西日本凸帯文土器の編年」（『文化財学報』８集、1990年。）

竹村忠洋「突帯文土器の小地域色」（『網干善教先生古稀記念考古学論集〔上〕』所収、1998年。）

財団法人東大阪市文化財協会「鬼塚遺跡第11次発掘調査概要報告」（『埋蔵文化財発掘調査概報集-1998年度（２）-』所収、1999年。）

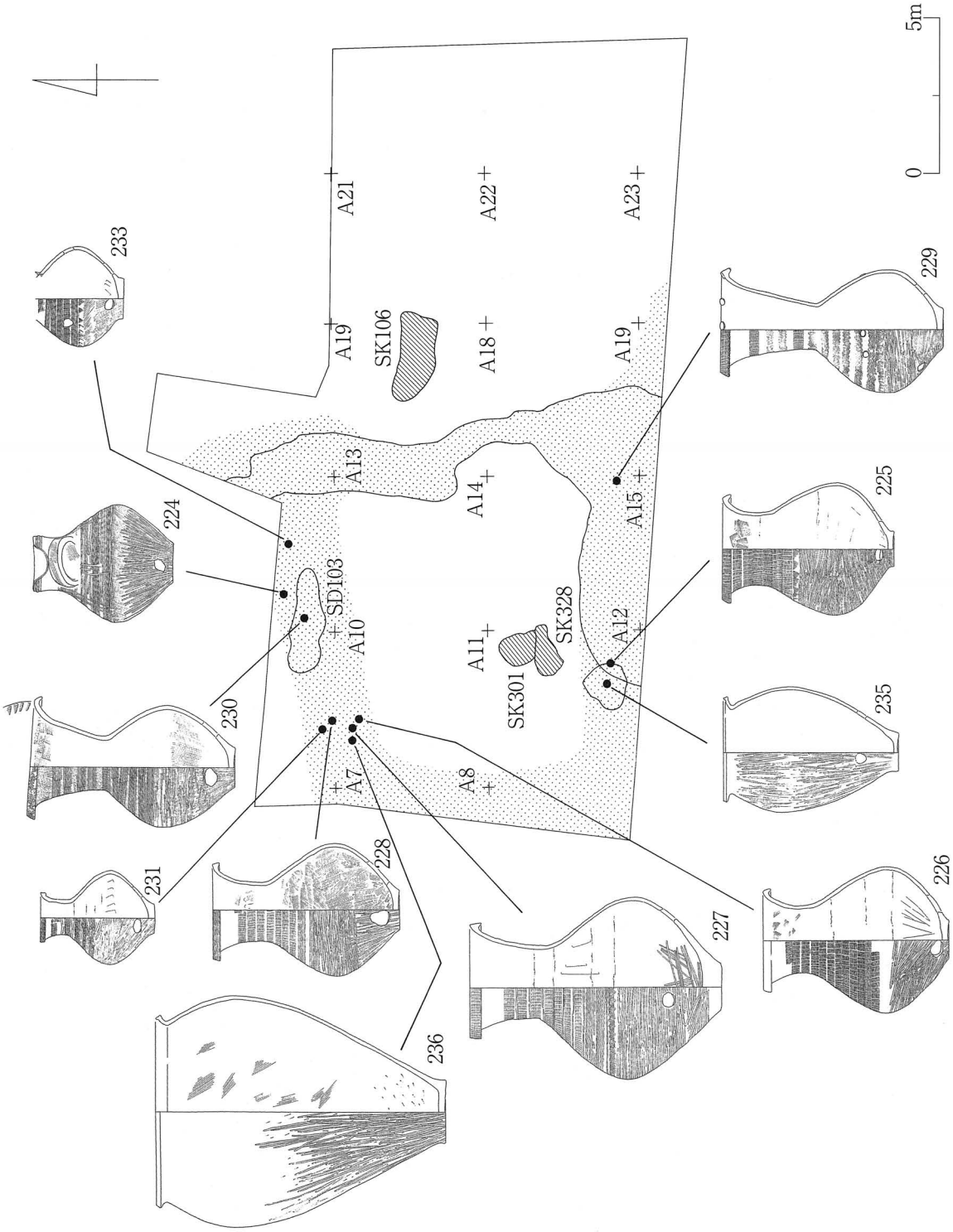
宮本長二郎『出土建築部材が解く古代建築』〔『日本の美術』490〕、至文堂、2007年。

大阪府教育委員会『讃良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅰ・Ⅱ』、1989・1991年。

奈良国立文化財研究所『木器集成図録近畿原始篇』、1993年。

財団法人古都大宰府を守る会『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅲ-尾崎遺跡第1次調査-』、1993年。

松岡良憲「古墳時代以前の戸口装置」（『堅田直先生古希記念論文集』所収、1997年。）



第33図　方形周溝墓想定図

図　　版

図版1　遺構

1．Ａ地区調査前の状況（北東より）

2．Ａ地区西区遺構面Ⅰ遺構検出状況（南より）

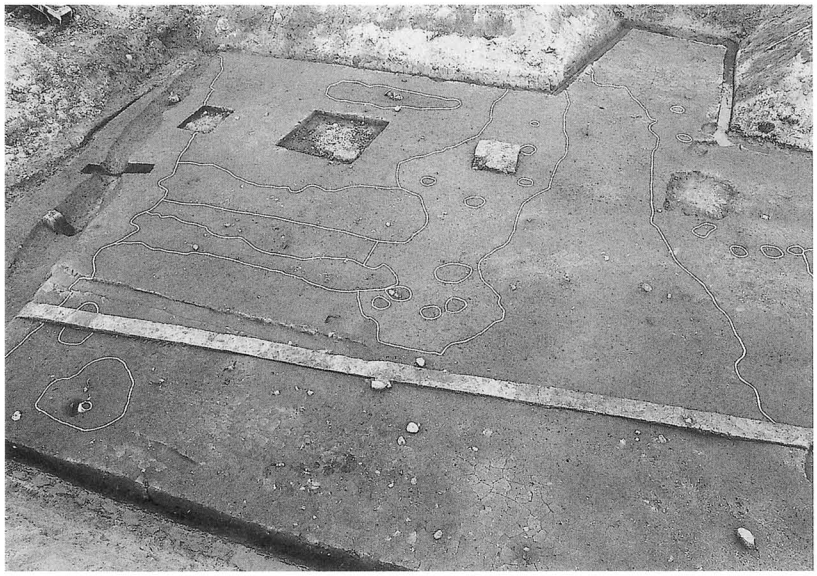
3．Ａ地区西区遺構面Ⅰ遺構掘削後状況（南より）

図版2　遺構

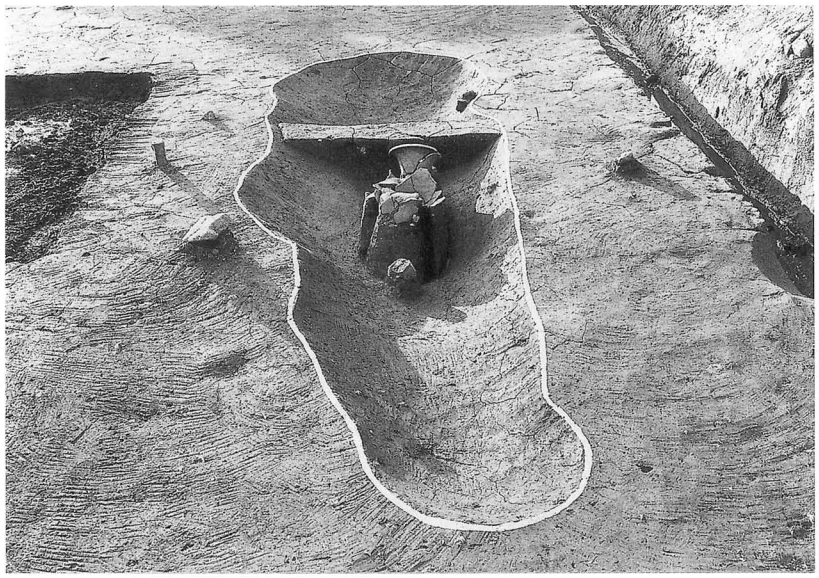
1．Ａ地区中区遺構面Ｉ遺構検出状況（南より）

2．Ａ地区中区遺構面ＩＳＤ10－Ａ掘削後状況（南より）

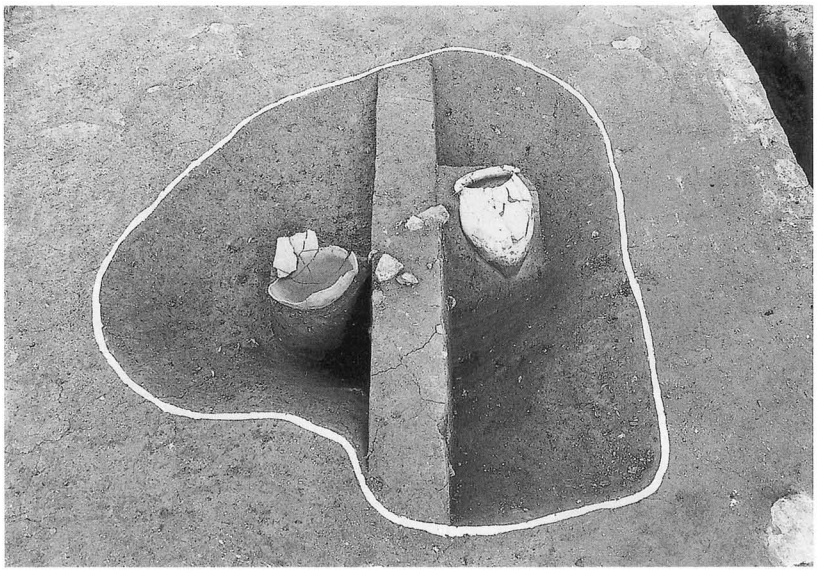
3．Ａ地区中区遺構面Ｉ遺構掘削後状況（南より）



1．Ａ地区中区遺構面Ⅱ遺構検出状況（南より）



2．Ａ地区中区遺構面ⅡＳＤ103掘削後状況（東より）



3．Ａ地区中区遺構面ⅡＳＫ104掘削後状況（西より）

図版4　遺構

1．Ａ地区西区ＮＲ１掘削後状況（南より）

2．Ａ地区西区遺構面ⅢＮＲ２掘削後状況（西より）

3．同上近景（南西より）

図版5　遺構

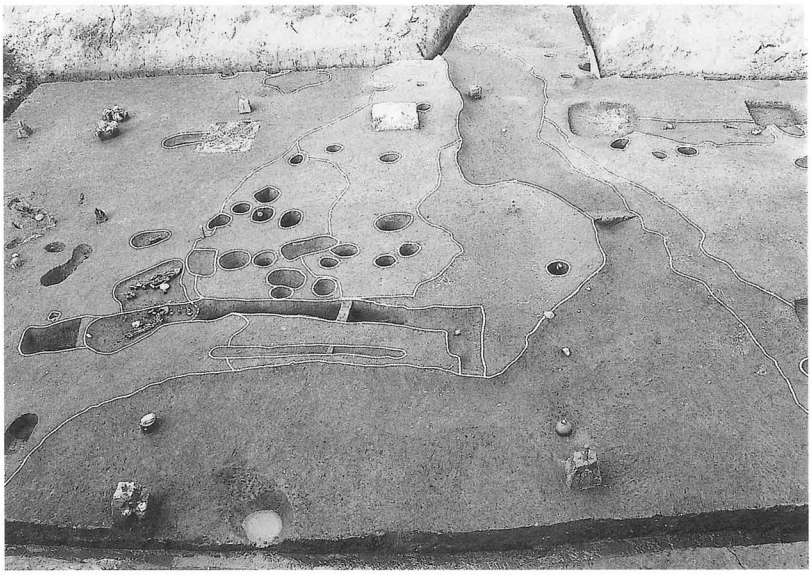
1．Ａ地区西区ＳＸ201検出状況（南より）

2．同上　土器・木器・礫・桃核出土状況

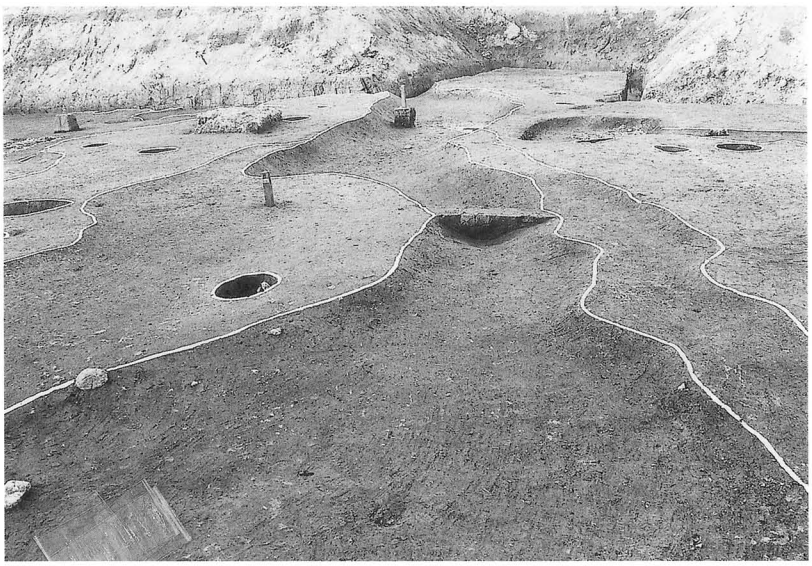
3．同上　下部　杭ほか出土状況（西より）

図版6　遺構

1．Ａ地区中区遺構面Ⅳ遺構検出状況（南より）



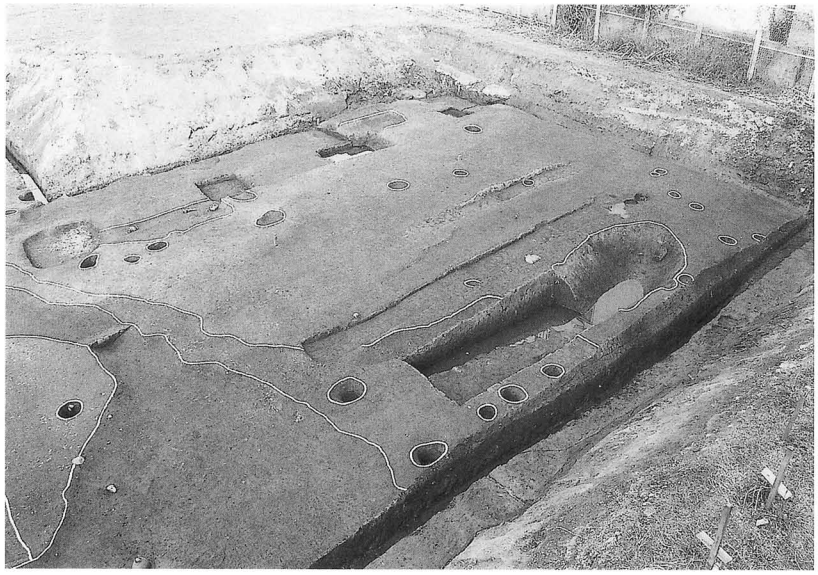
2．Ａ地区中区遺構面Ⅳ遺構掘削後状況（南より）



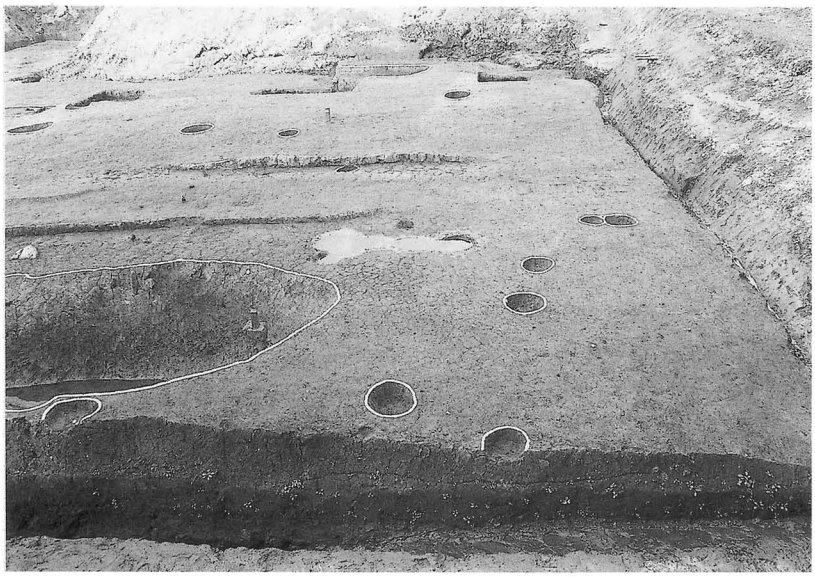
3．Ａ地区中区遺構面ⅣＳＤ300掘削後状況（南より）

図版7　遺構

1．Ａ地区東区遺構面Ⅳ遺構検出状況（南より）

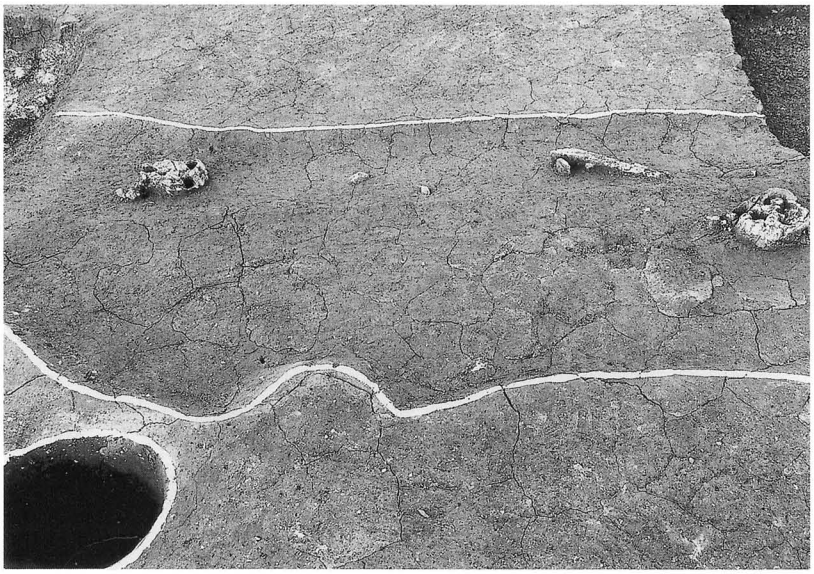


2．Ａ地区東区遺構面Ⅳ遺構掘削後状況（南より）

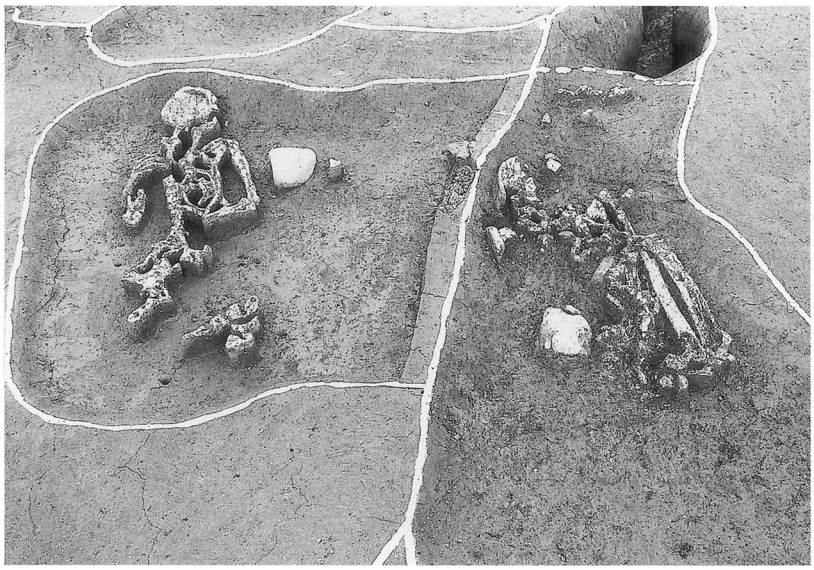


3．Ａ地区東区遺構面Ⅳピット群検出状況（南より）

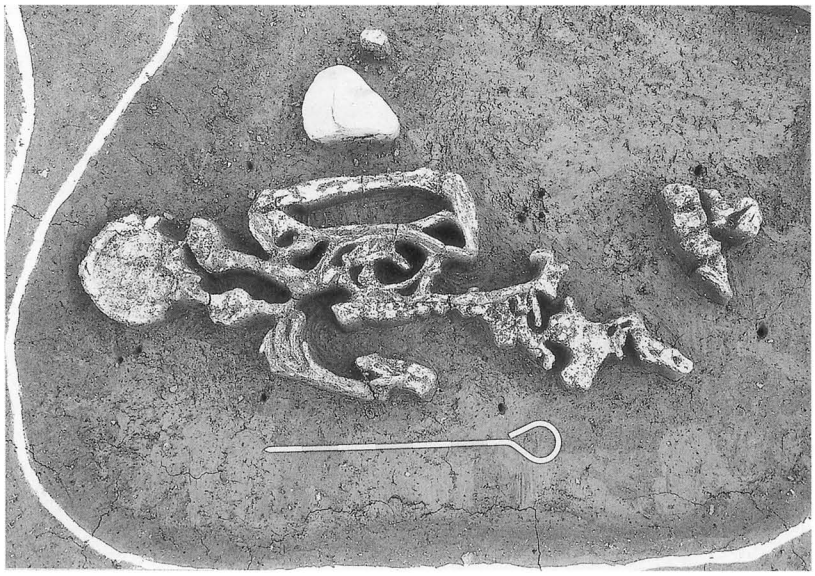
図版8　遺構



1．Ａ地区東区遺構面ⅣＳＫ106人骨出土状況（南より）

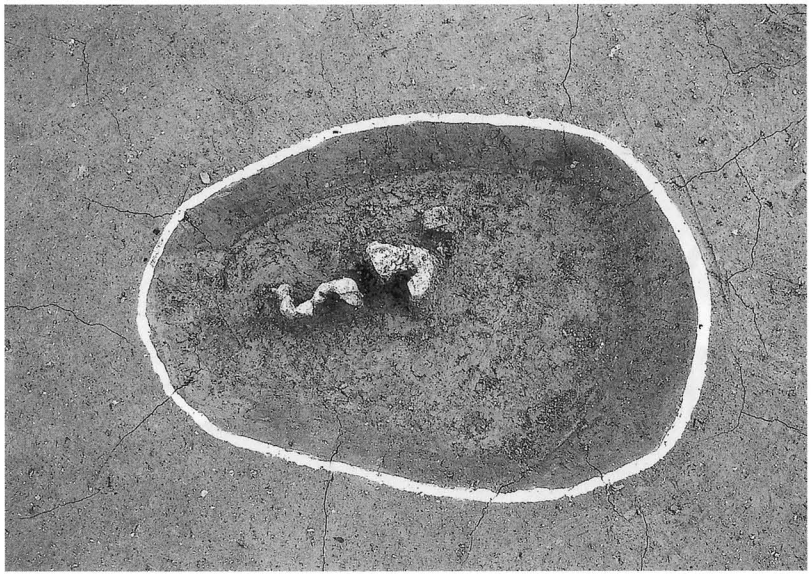


2．Ａ地区中区遺構面ⅣＳＫ301・ＳＫ328検出状況（西より）

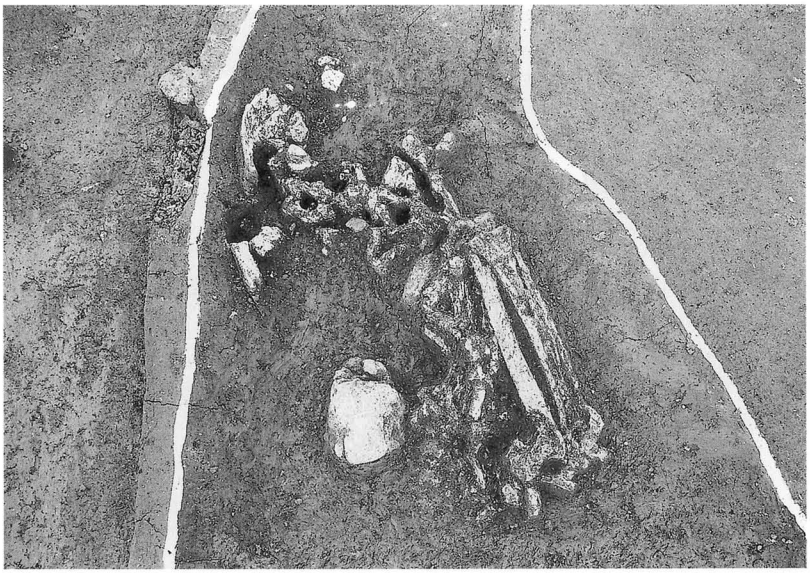


3．Ａ地区中区遺構面ⅣＳＫ301人骨出土状況（北より）

図版9　遺構



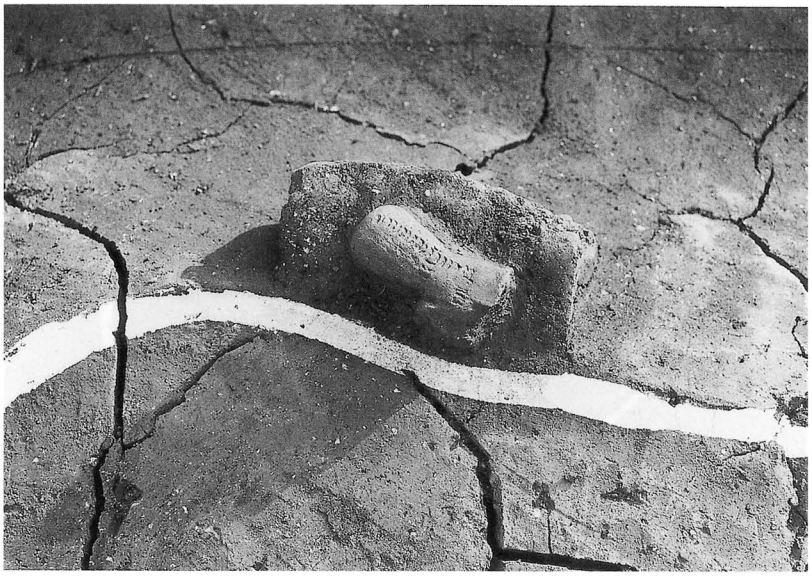
1．Ａ地区中区遺構面ⅣＳＫ302人骨
出土状況（西より）



2．Ａ地区中区遺構面ⅣＳＫ328人骨
出土状況（西より）

3．同上　近景（頭骨周辺）

図版10　遺構

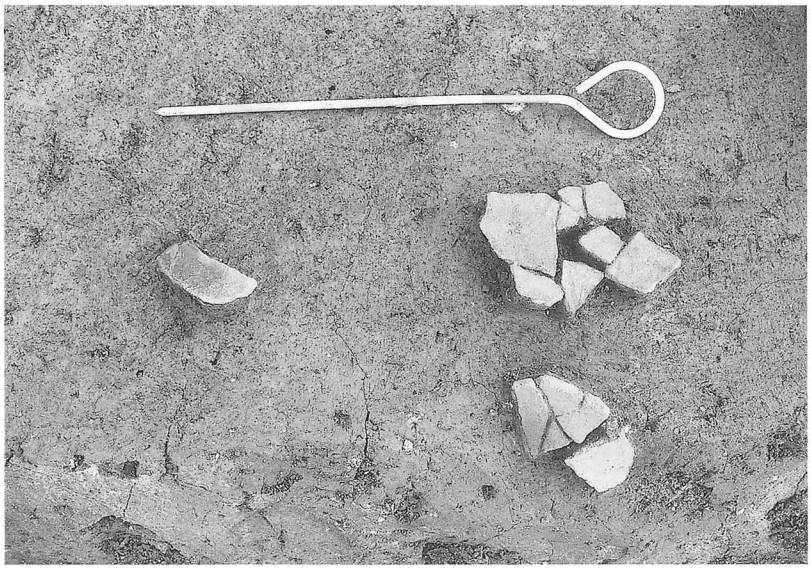


1．Ａ地区中区遺構面ⅢＳＤ103直上土偶出土状況（北より）

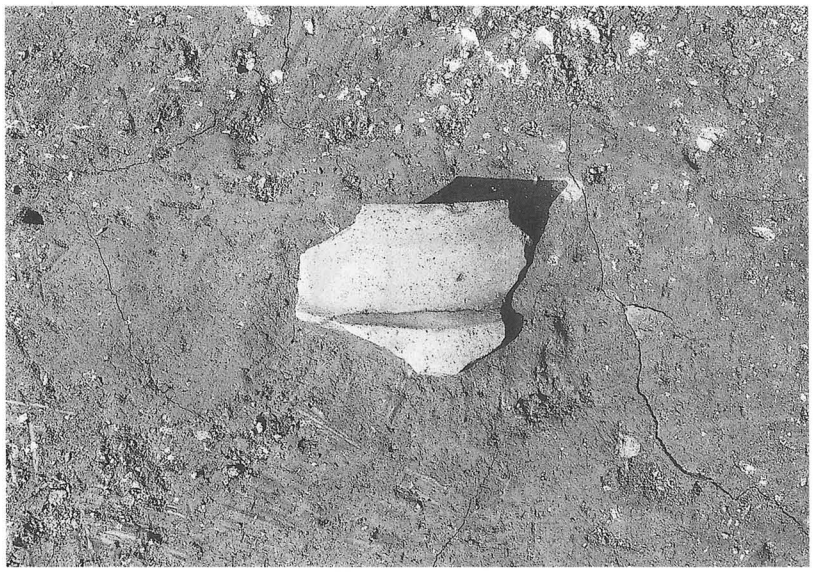
2．Ａ地区東区遺構面ⅣＳＰ114土偶出土状況（西より）

3．Ａ地区中区遺構面ⅡＳＸ100内石器出土状況（南より）

1．Ａ地区中区（Ａ15区）第６層内縄文土器出土状況（南より）

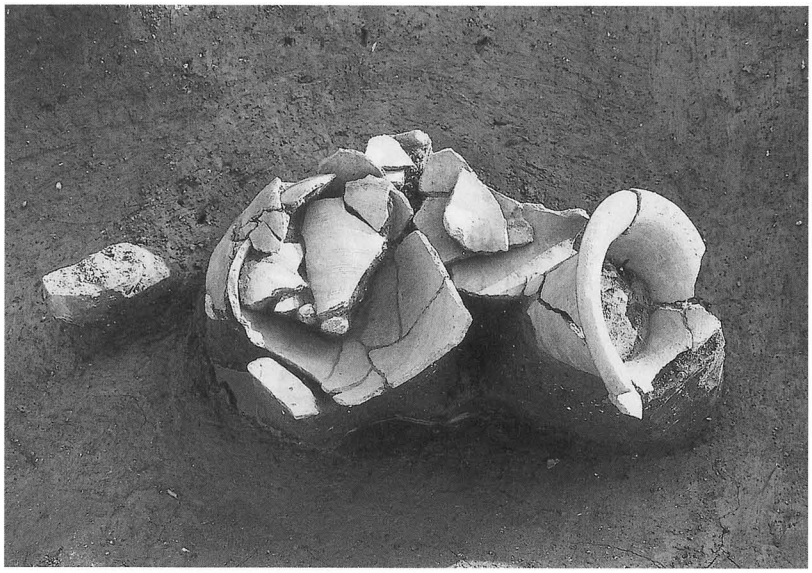


2．Ａ地区東区（Ａ23区）第６層内縄文土器出土状況（南より）

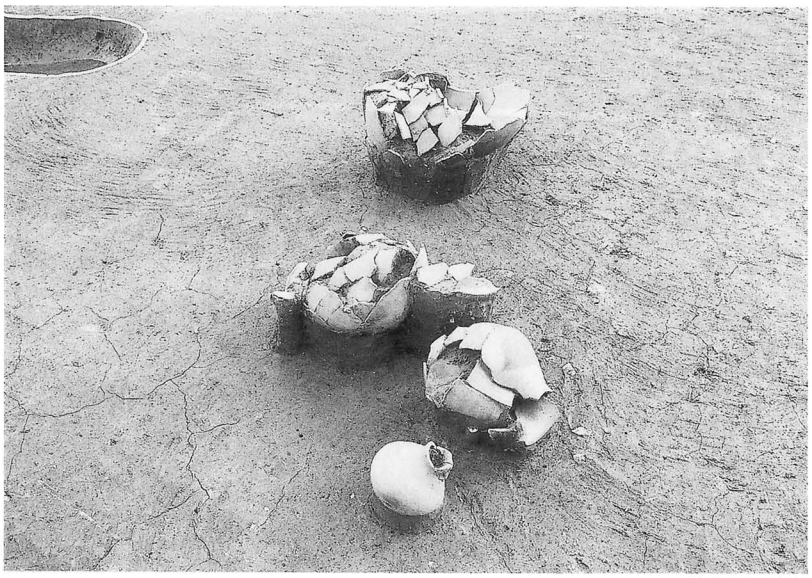


3．Ａ地区東区（Ａ18区）第６層内縄文土器出土状況（南より）

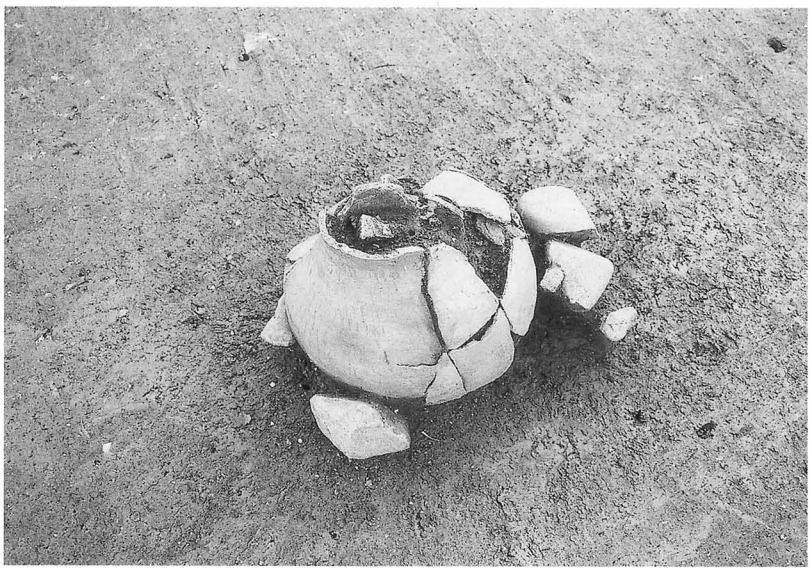
図版12　遺構



1．Ａ地区中区遺構ⅡＳＤ103弥生土器出土状況（北より）

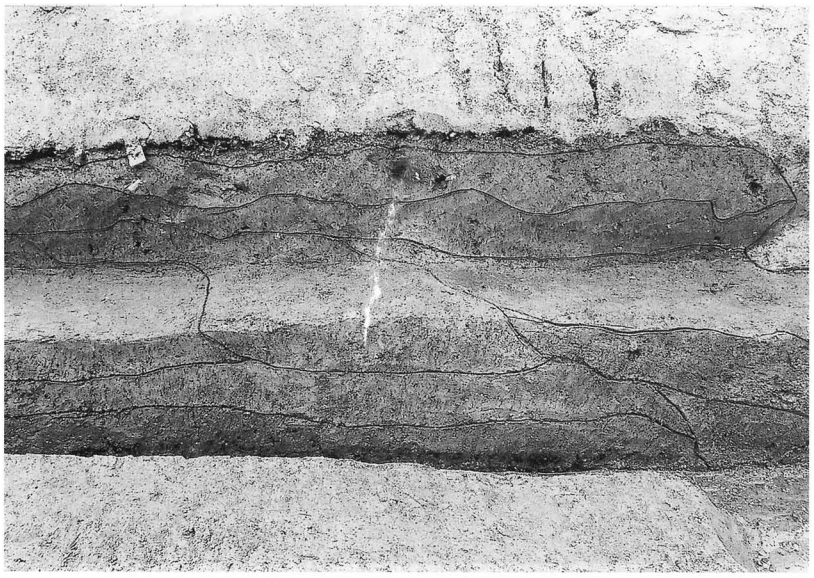


2．Ａ地区中区（A10～11区）遺構面Ⅳ直上弥生土器群出土状況（北より）

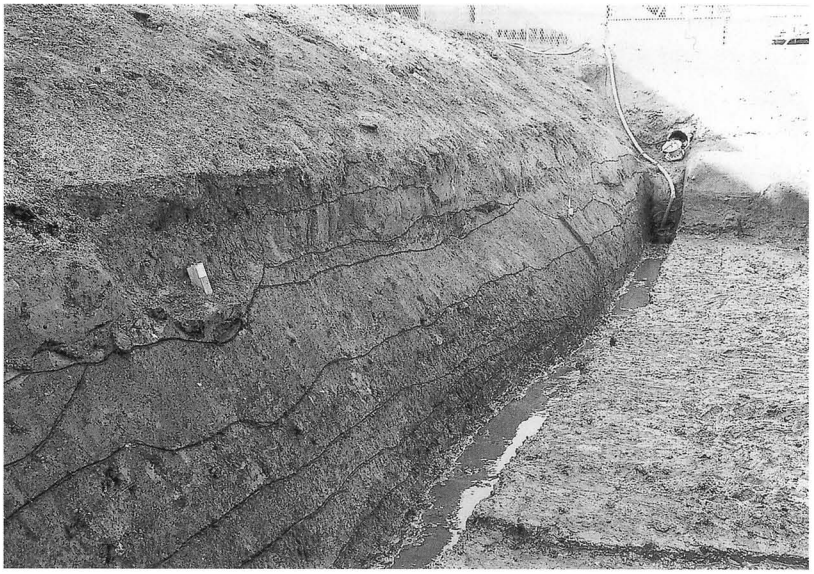


3．Ａ地区中区（A12区）遺構面Ⅳ直上弥生土器出土状況（北より）

図版13　遺構



1．Ａ地区南壁断面（東側）



2．Ａ地区南壁断面（西側）

3．現地説明会風景

図版14　遺構

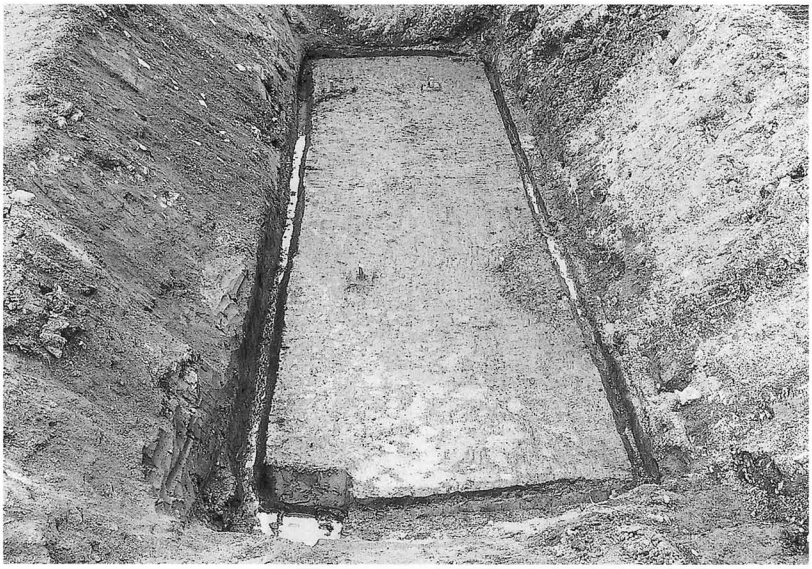
1．Ｂ地区調査前の状況（東より）

2．Ｂ地区北壁断面

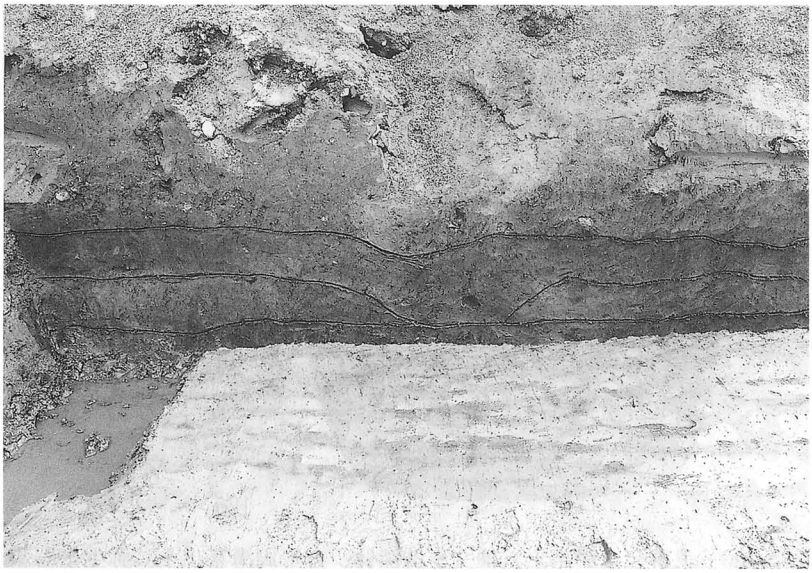
3．Ｄ地区（Ｄ４区）南壁断面

図版15　遺構

1．C地区調査前の状況（東より）

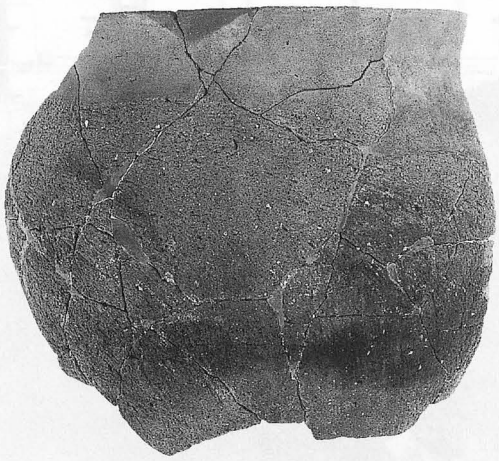


2．C地区掘削完了後の状況(東より)



3．C地区南壁断面

図版16　遺物



6

188

229

126

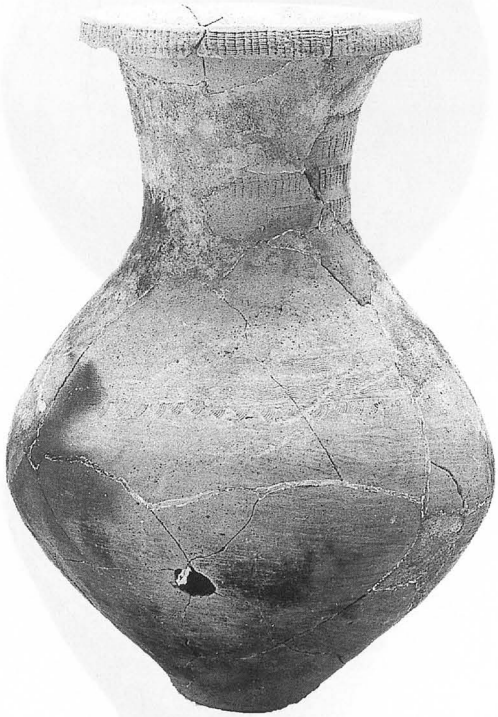
229'

ＳＸ100・遺構包含層出土　縄文土器深鉢、方形周溝墓出土　弥生土器壷

228

225

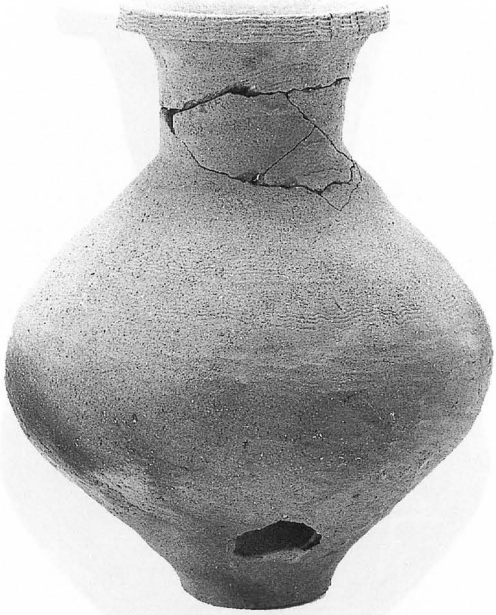
230



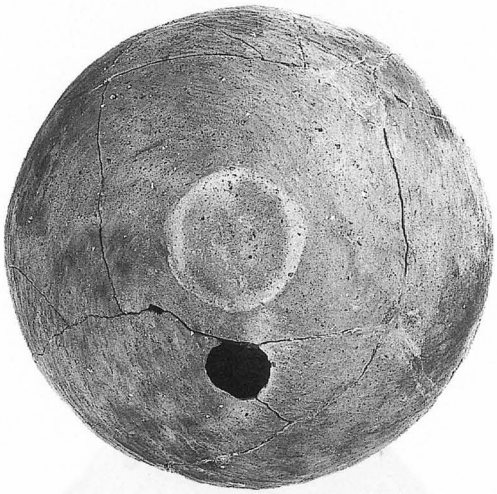
226

方形周溝墓出土　弥生土器壷

227



231



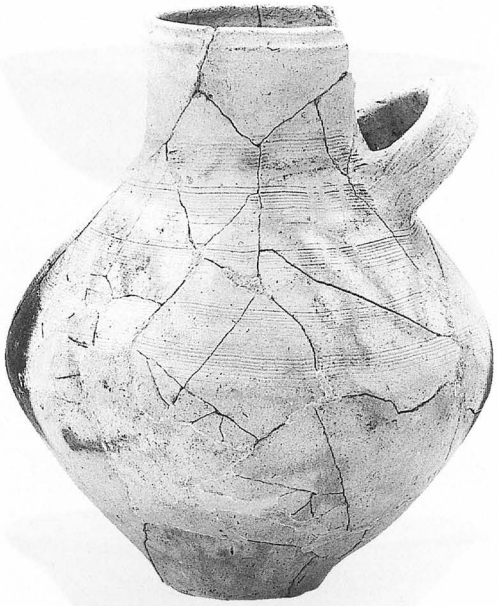
227'

231'

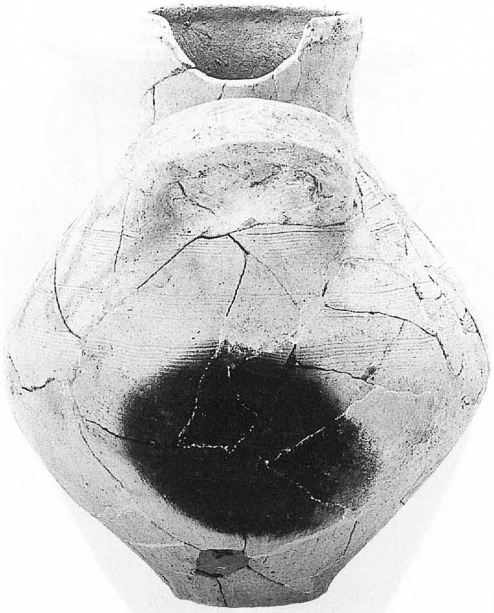
234'

234

方形周溝墓出土　弥生土器壷・鉢



224



224'

233

233'

232

236

方形周溝墓出土　弥生土器水差形土器・甕

235

254

255

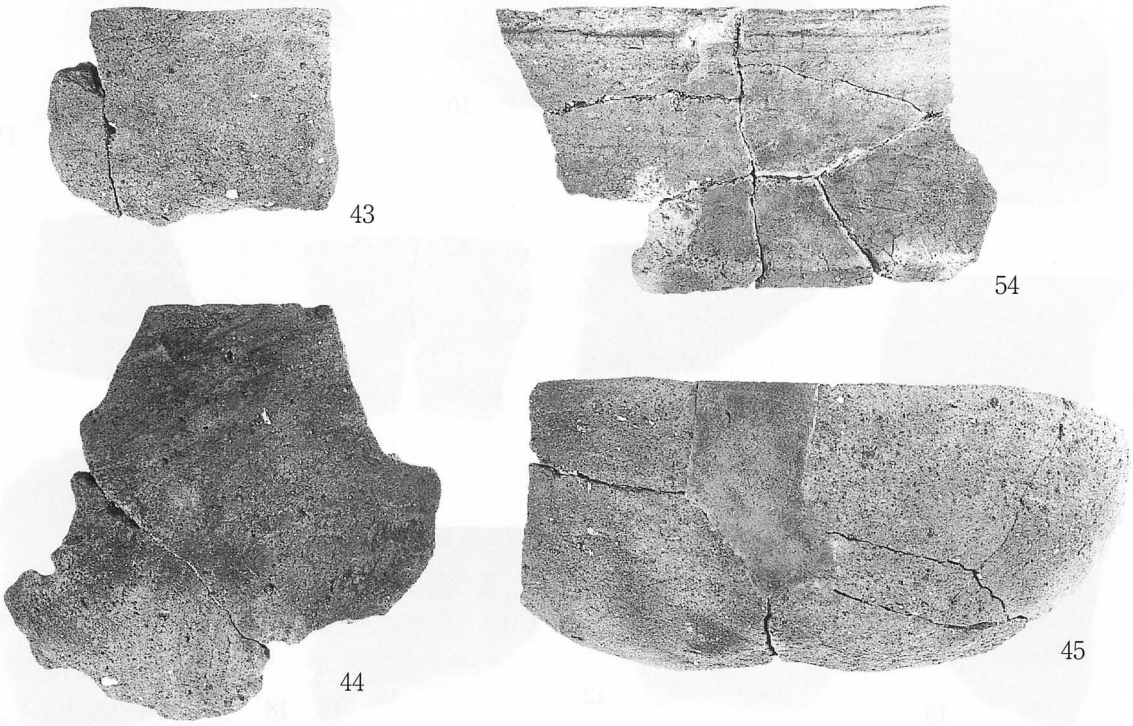
244

253

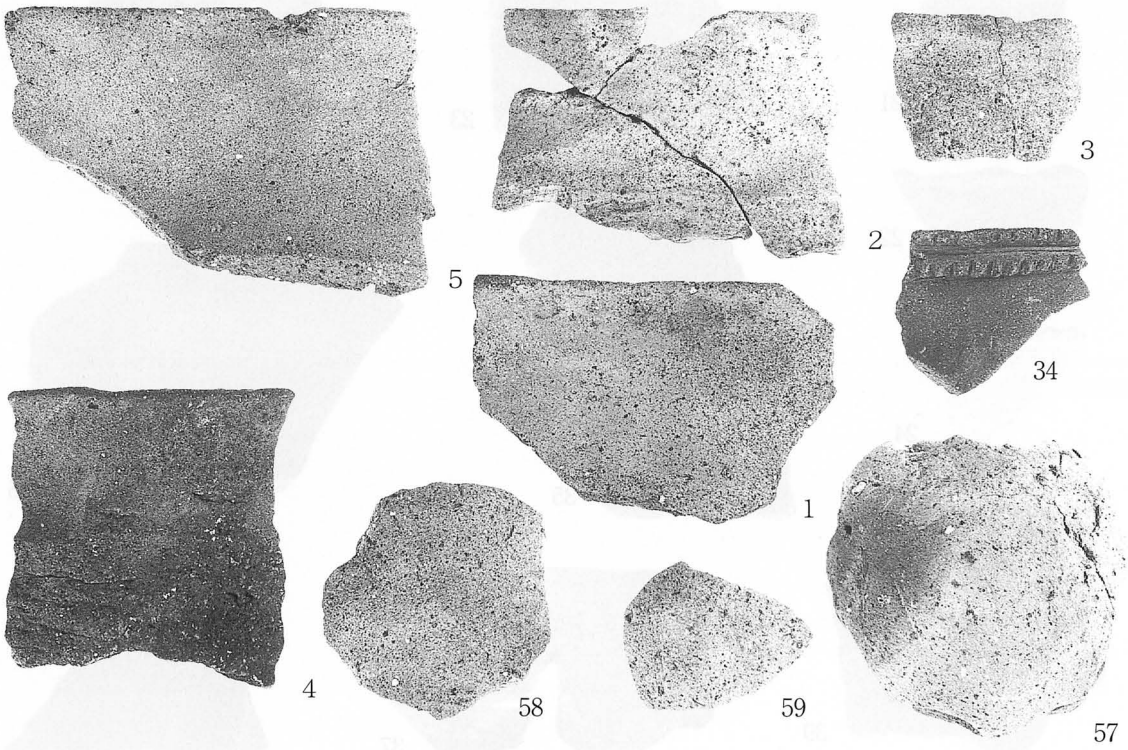
252

257

方形周溝墓・ＳＤ201出土　弥生土器甕、ＮＲ１・ＳＸ201・遺物包含層出土　土師器甕・高杯・小型丸底壷、ＮＲ１出土　韓式系土器鉢

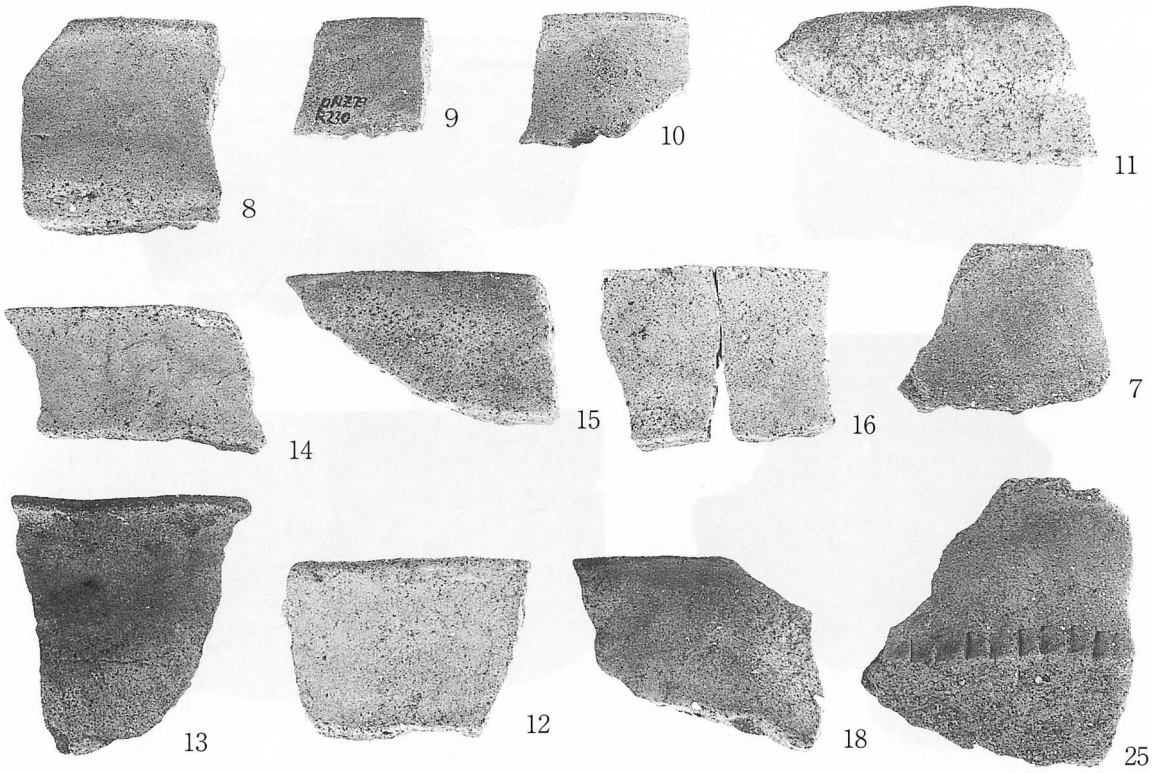


1．ＳＸ100出土　縄文土器浅鉢

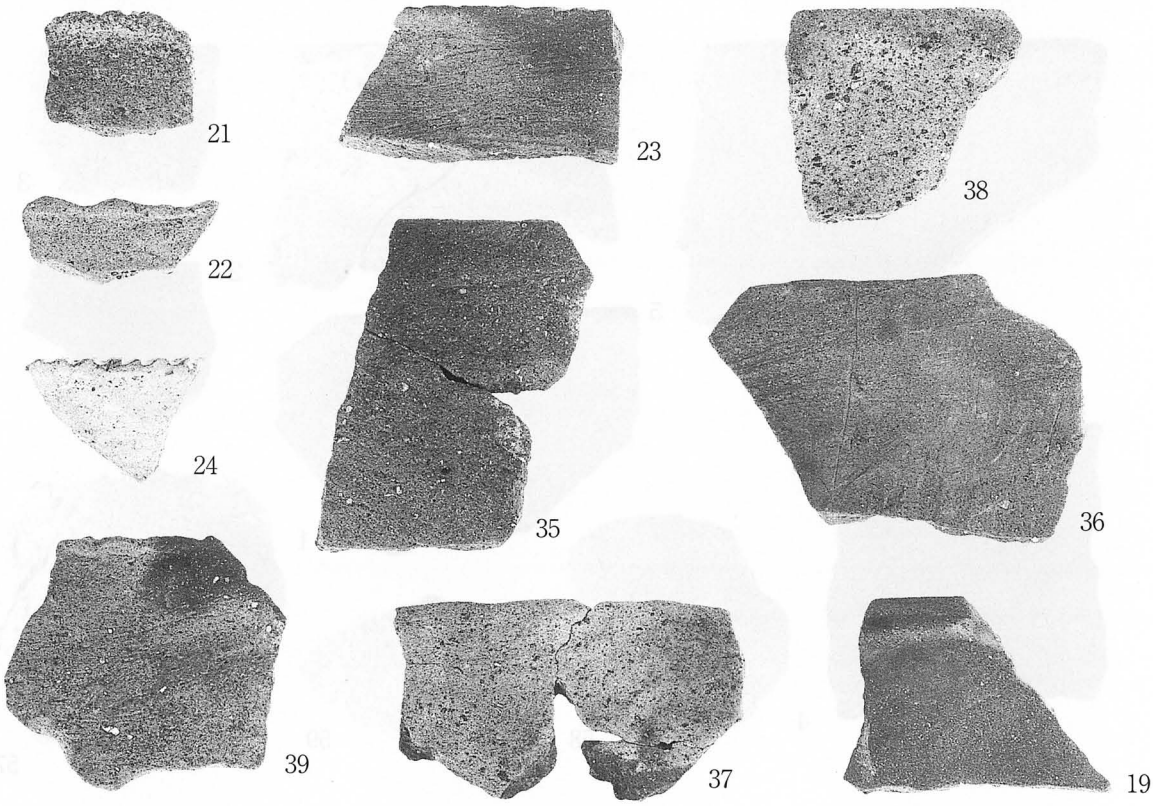


2．ＳＸ100出土　縄文土器深鉢・底部

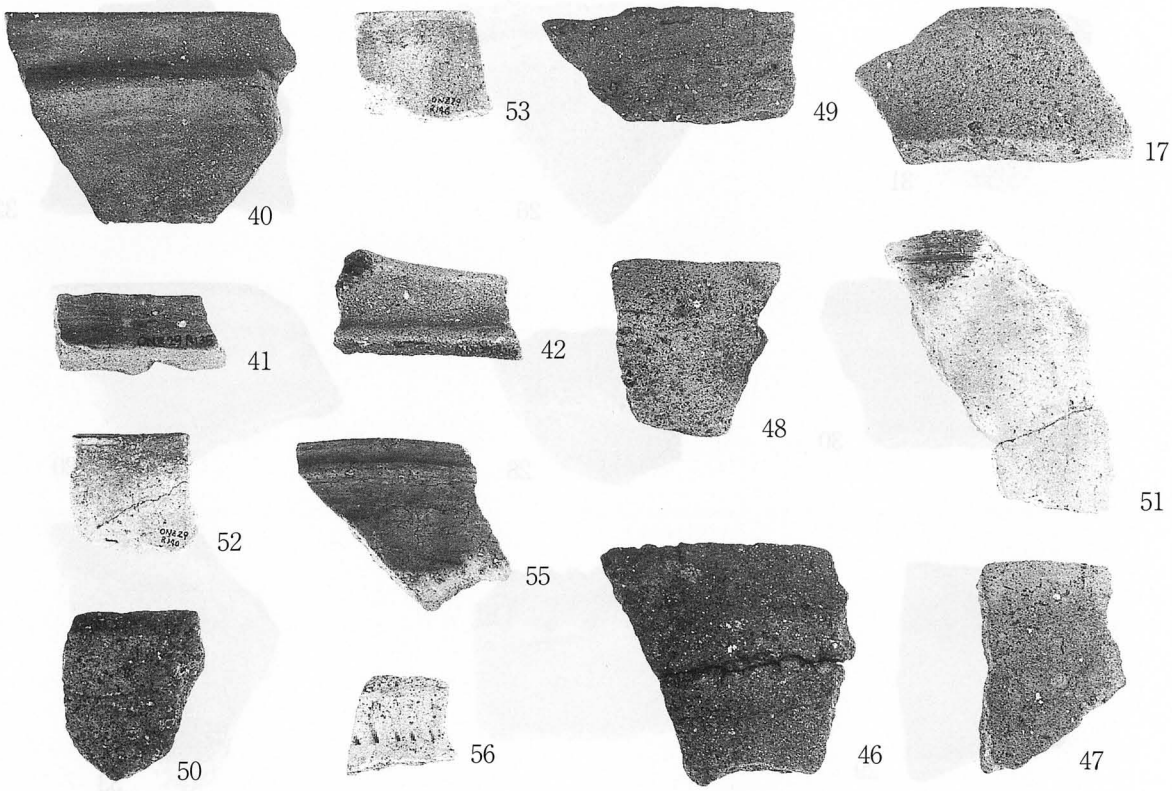
図版22　遺物



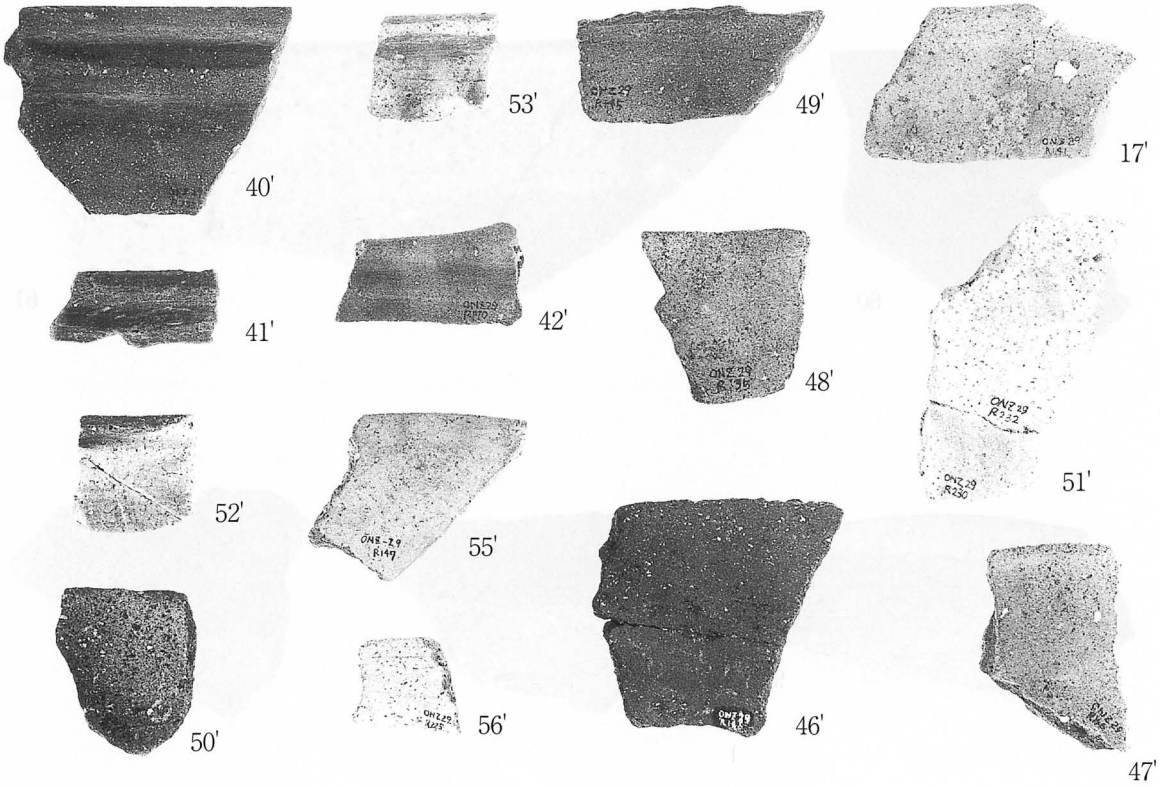
1．ＳＸ100出土　縄文土器深鉢



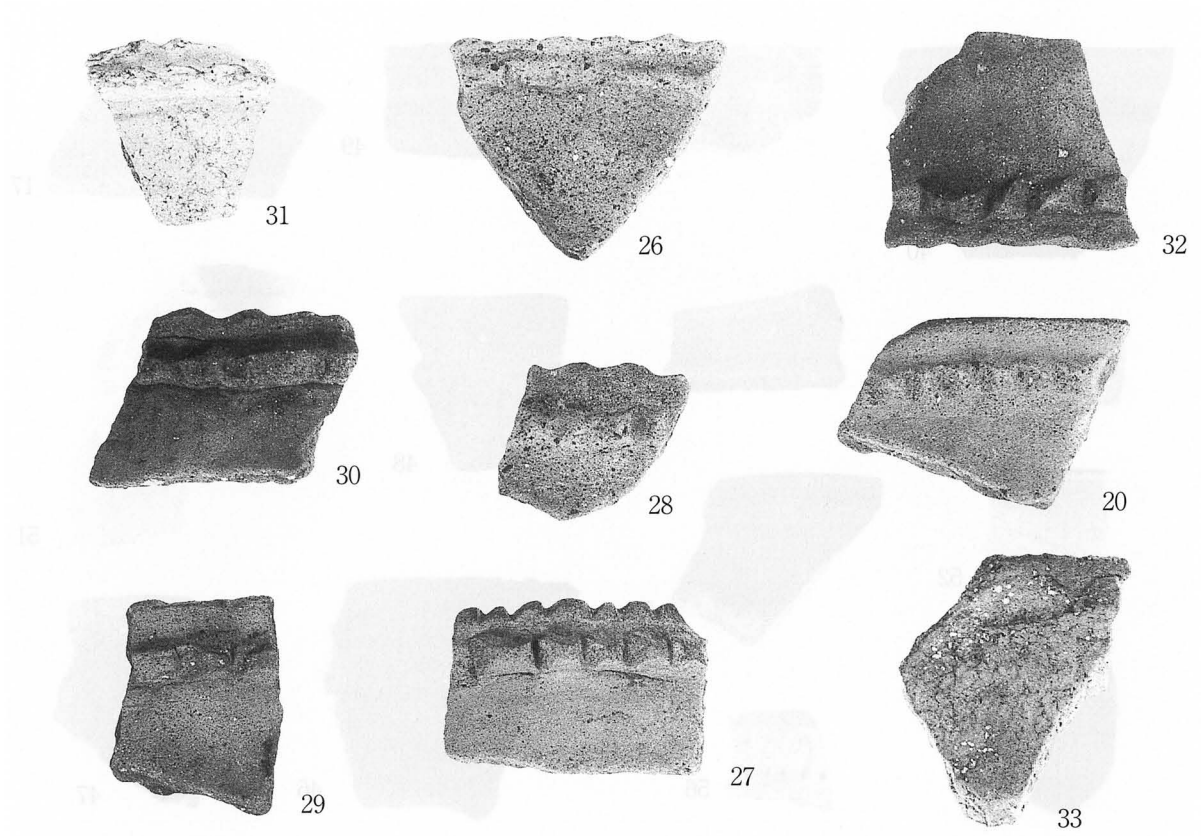
2．ＳＸ100出土　縄文土器深鉢



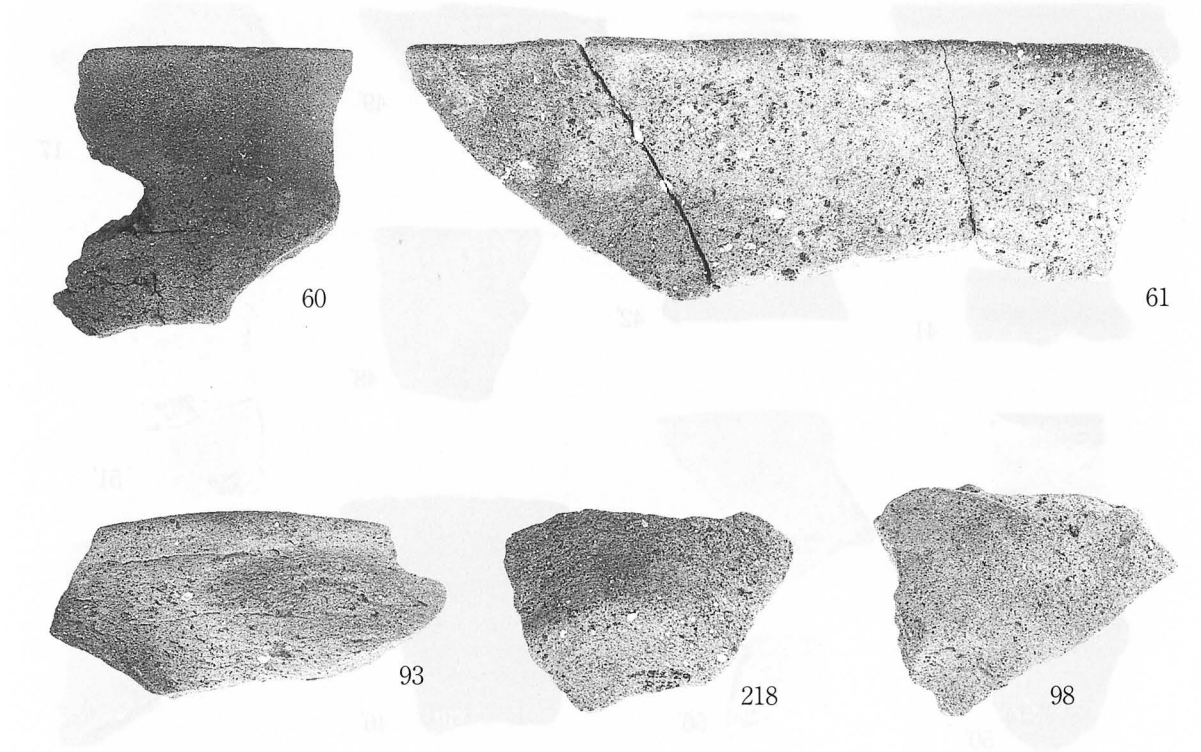
1．ＳＸ100出土　縄文土器深鉢・浅鉢（表）



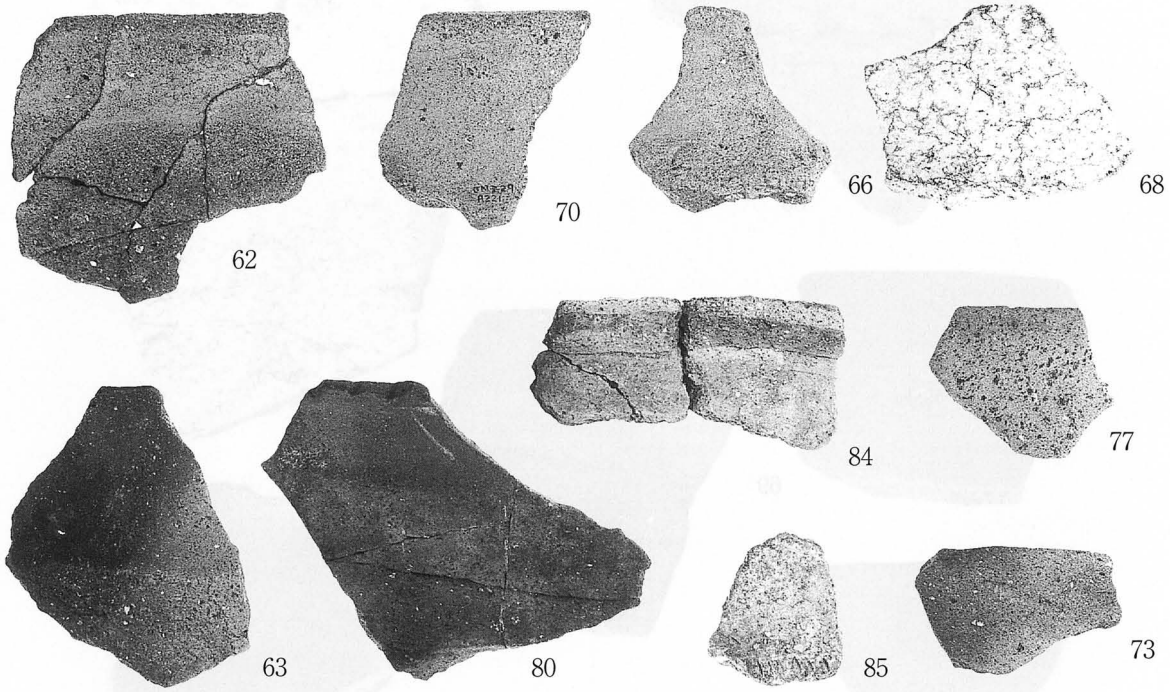
2．同上（裏）



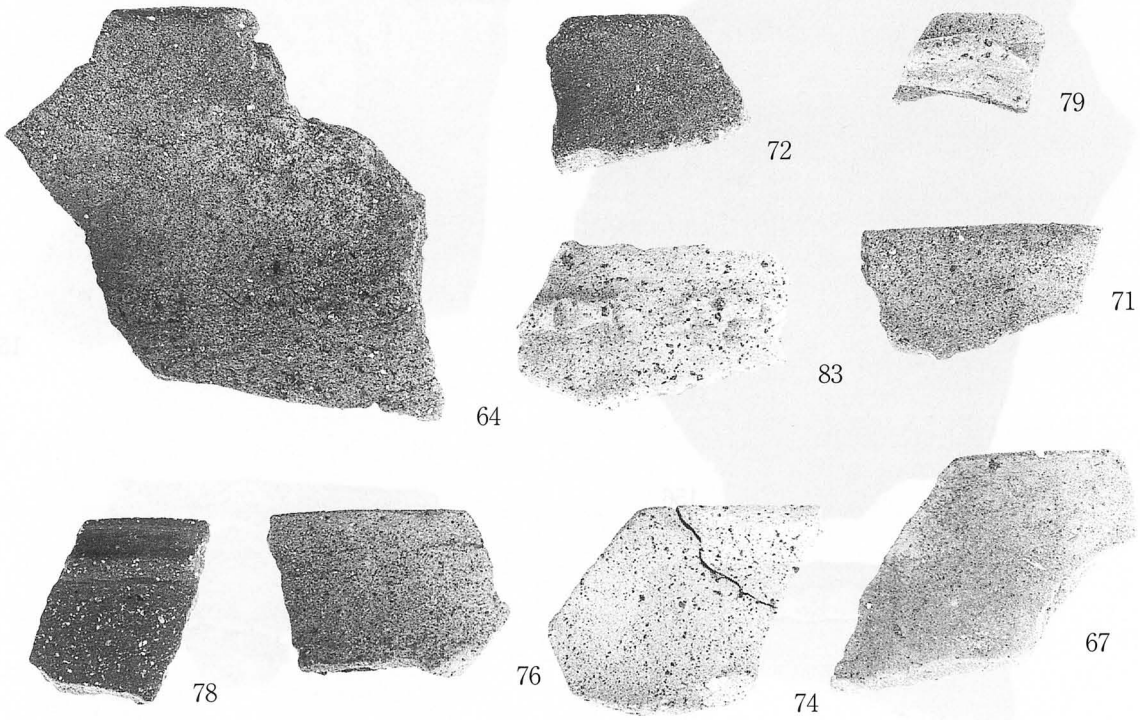
1．ＳＸ100出土　縄文土器深鉢



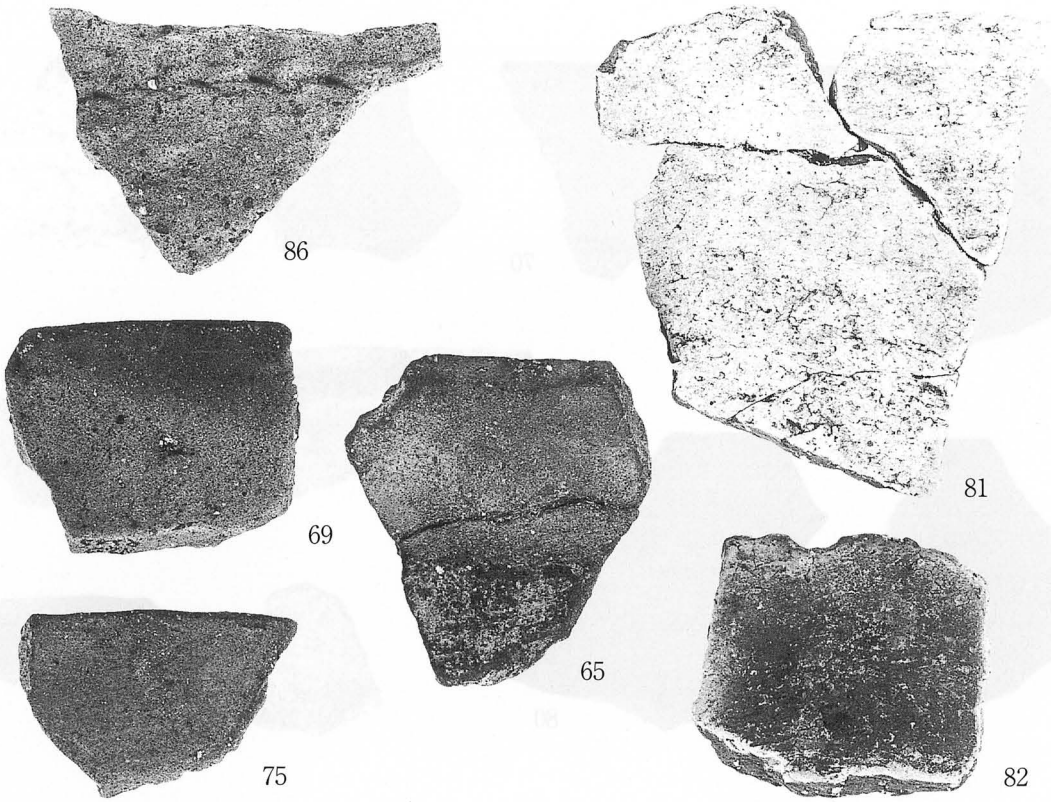
2．ＳＸ99、ＳＫ104・121、ＳＤ102出土　縄文土器浅鉢・深鉢・底部



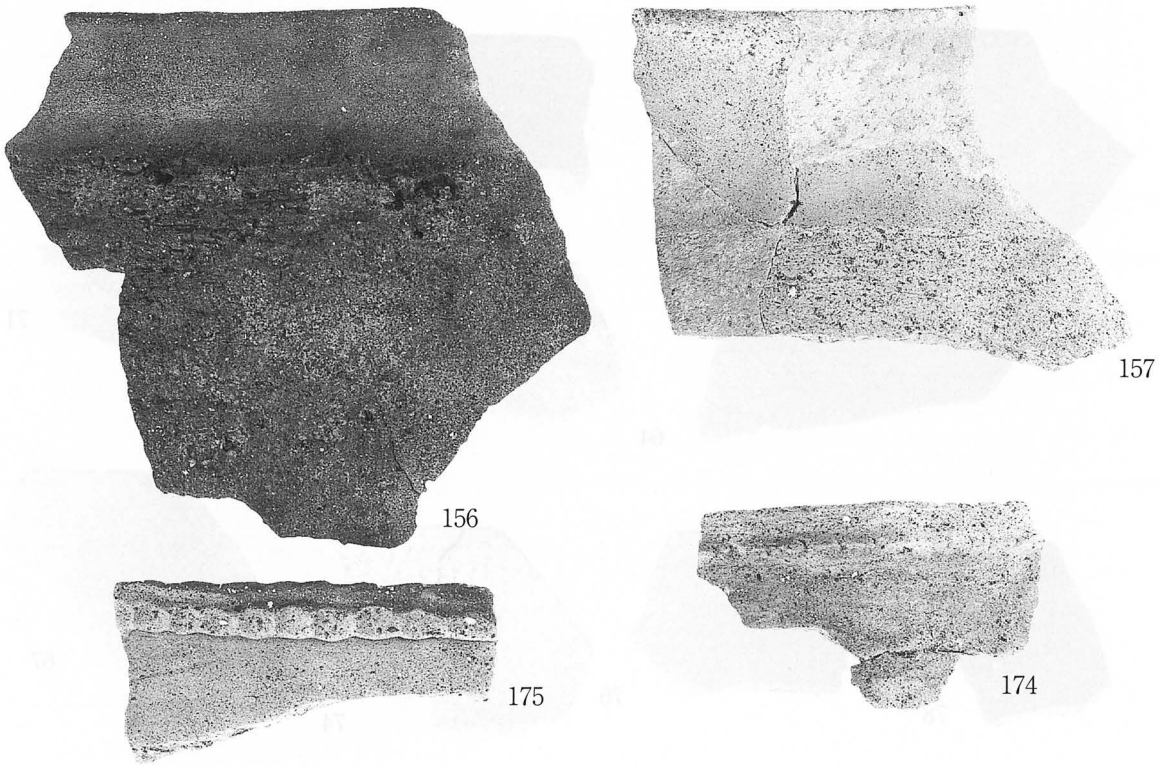
1．ＳＸ99出土　縄文土器深鉢・浅鉢



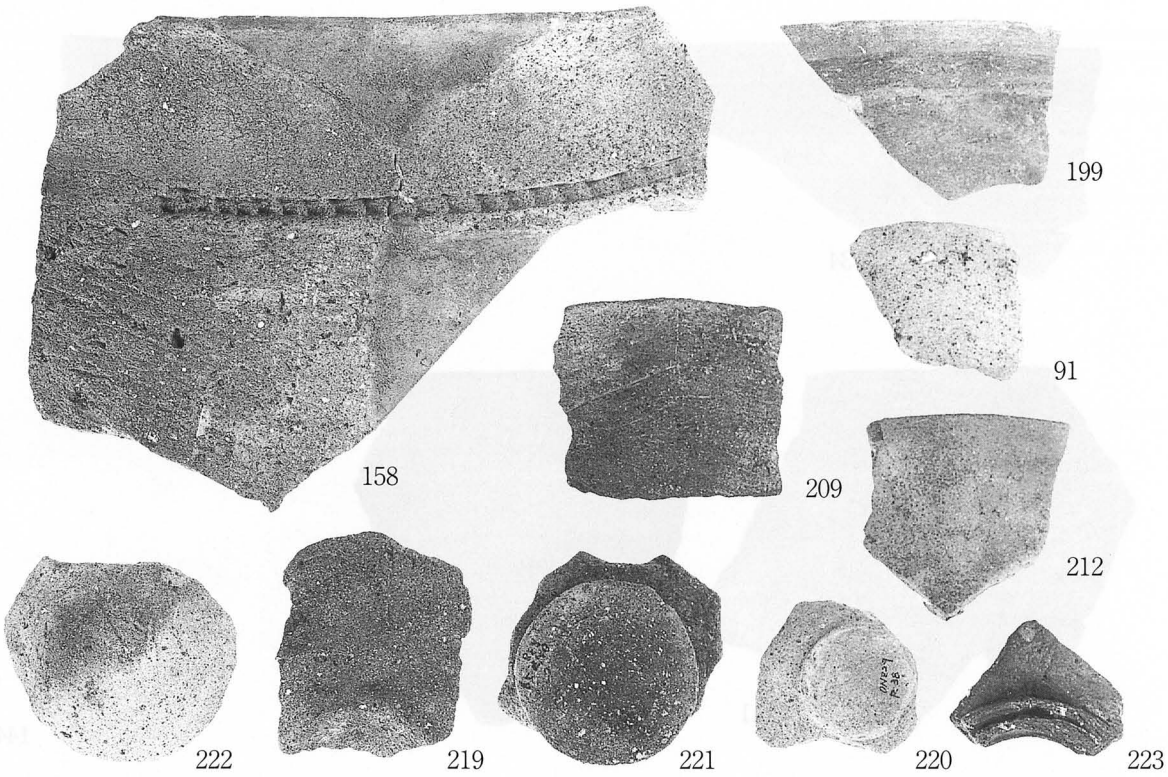
2．ＳＫ104・121、ＳＤ103・300出土　縄文土器深鉢



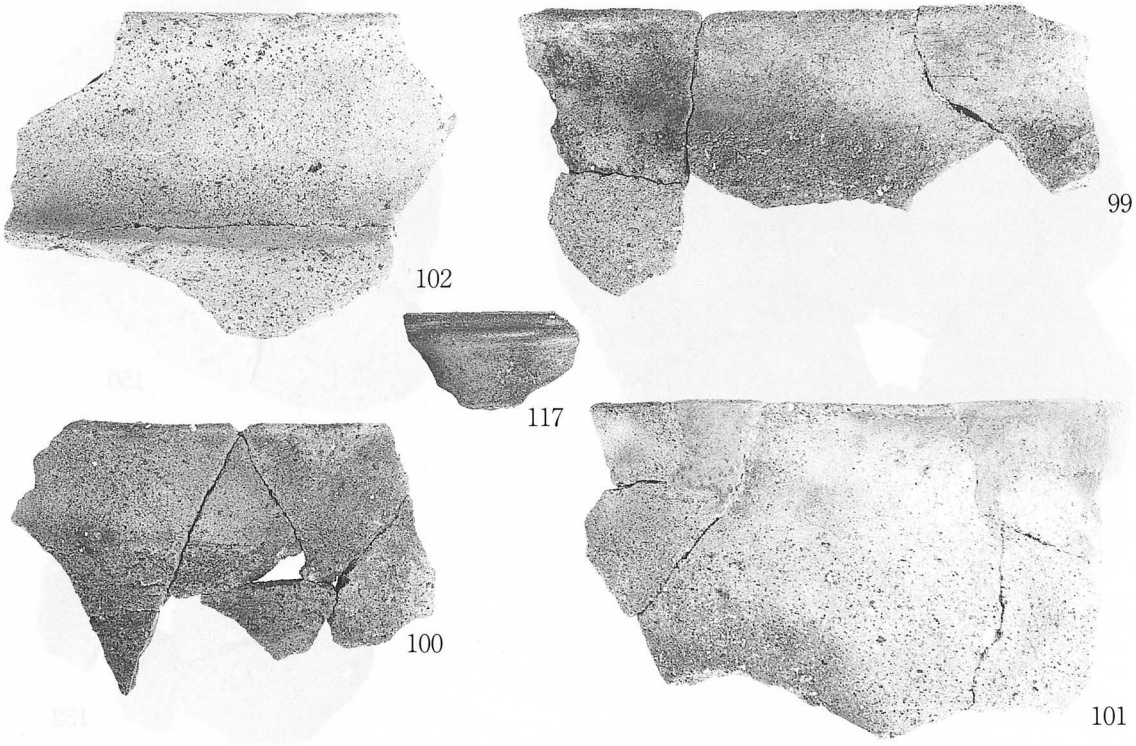
1．ＳＰ123・310・315、ＳＤ102、遺物包含層出土　縄文土器深鉢



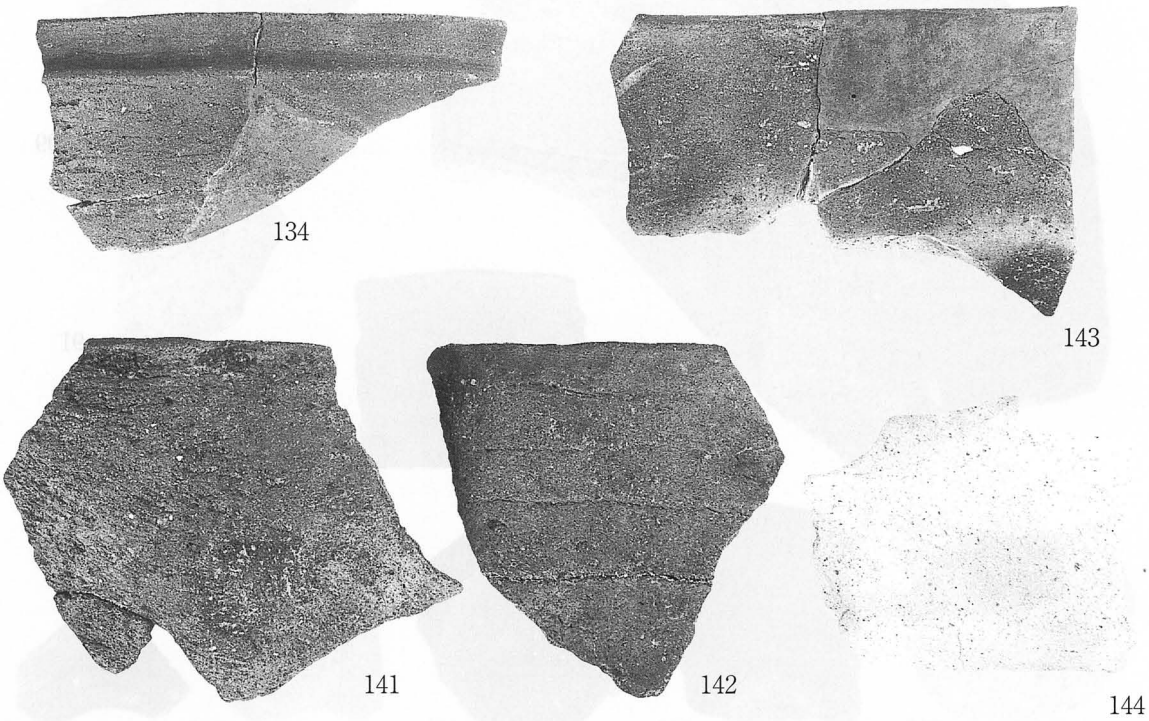
2．遺物包含層出土　縄文土器深鉢



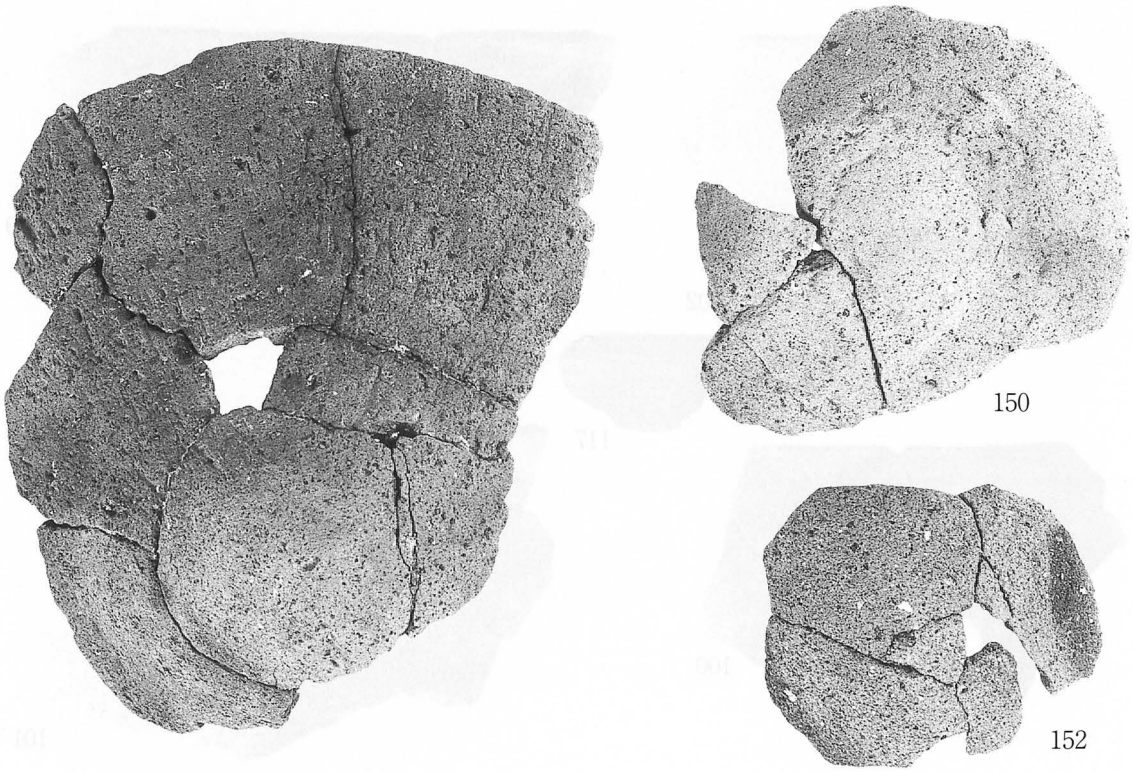
1．ＳＤ300、遺物包含層出土　縄文土器深鉢・浅鉢・器種不明・底部



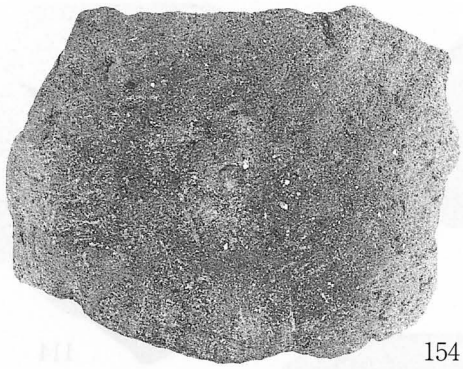
2．遺物包含層出土　縄文土器深鉢



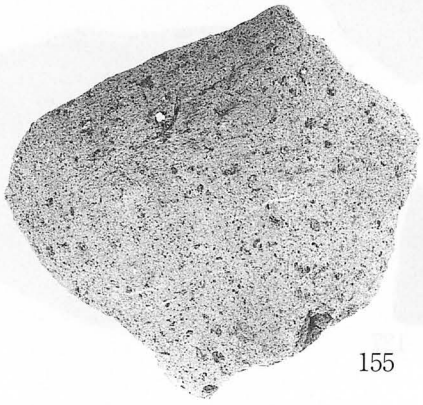
1．遺物包含層出土　縄文土器浅鉢

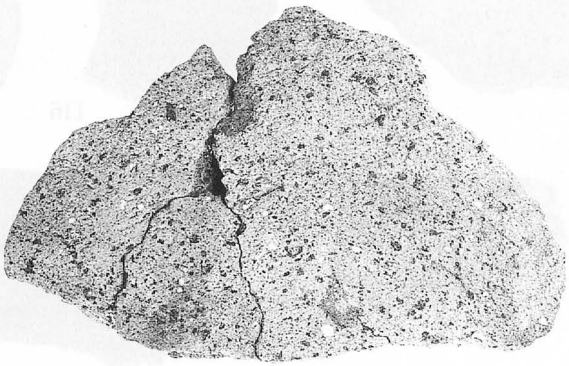


2．遺物包含層出土　縄文土器底部

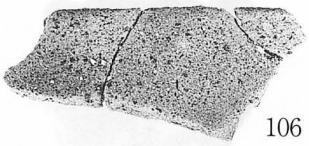

154

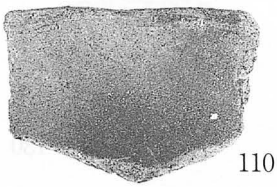
153


155

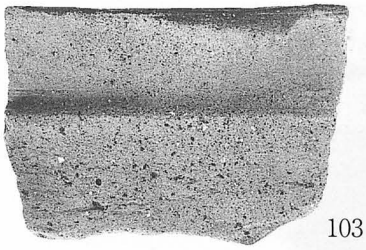

151

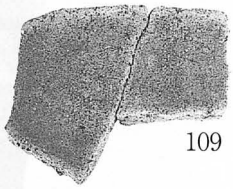
1．遺物包含層出土　縄文土器底部

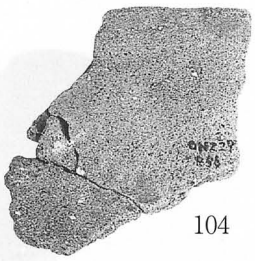

106

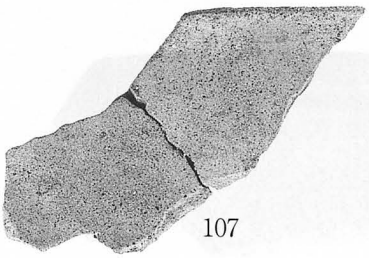

110

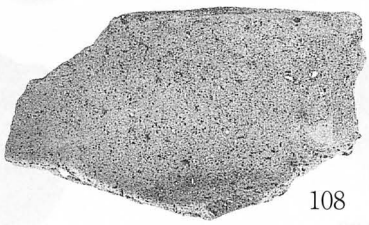
105

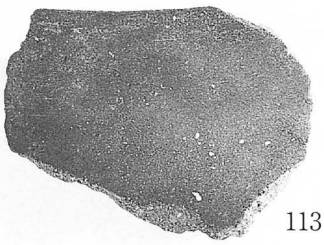

103


109

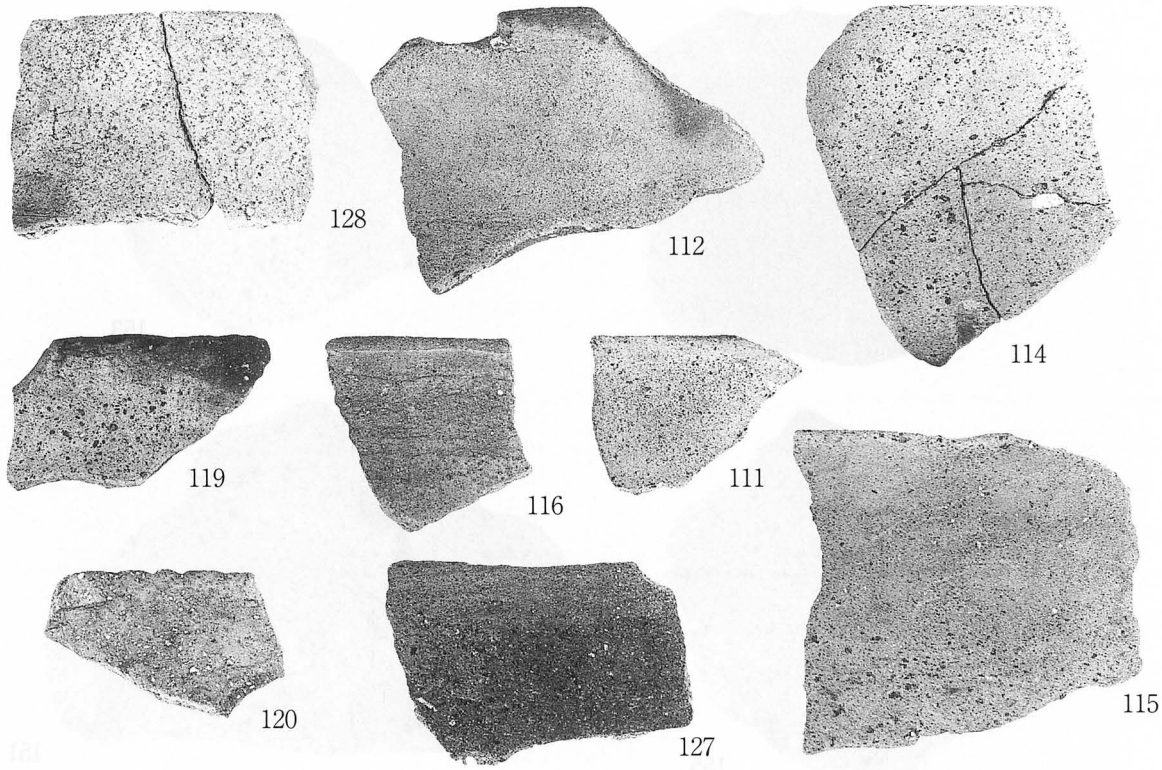

104


107

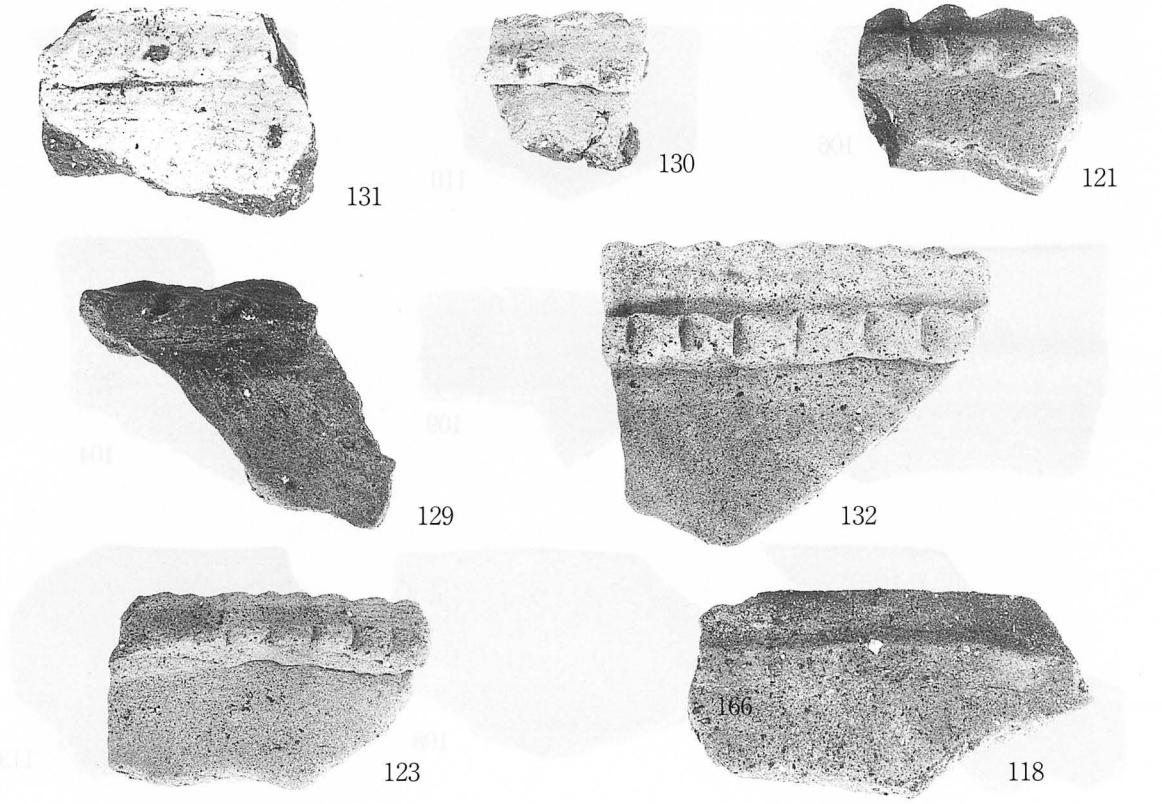

108


113

2．遺物包含層出土　縄文土器深鉢

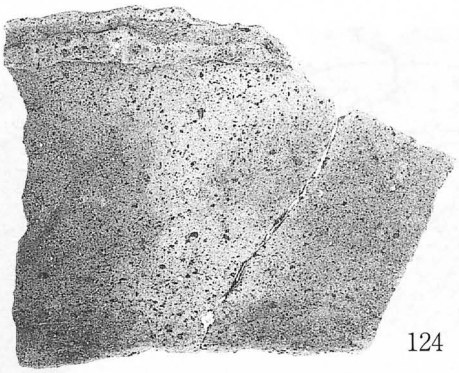


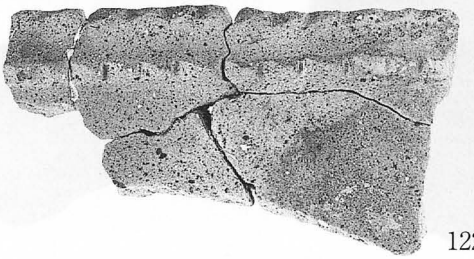
1．遺物包含層出土　縄文土器深鉢

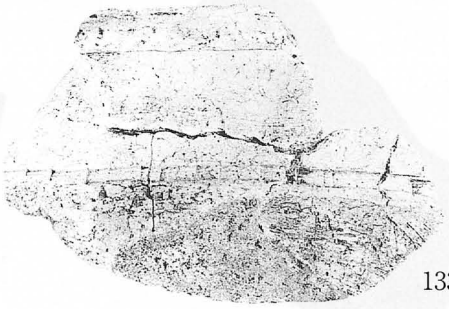


2．遺物包含層出土　縄文土器深鉢

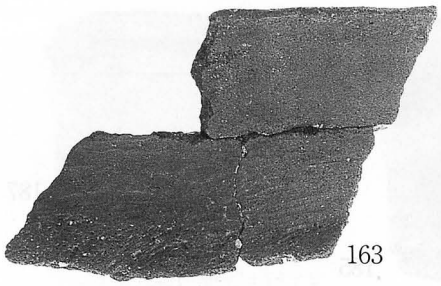
125

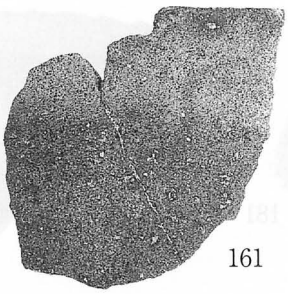

124

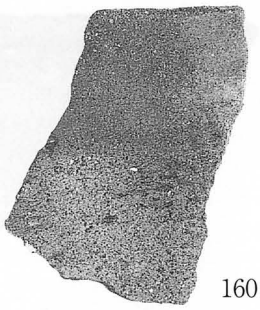

122

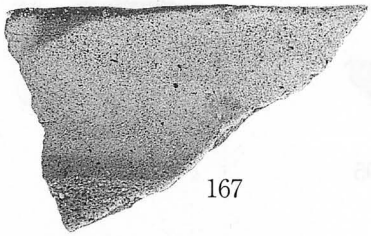

133

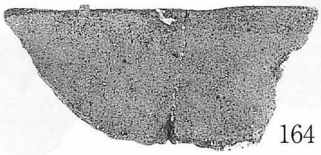
1．遺物包含層出土　縄文土器深鉢

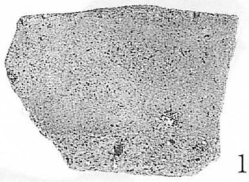

163

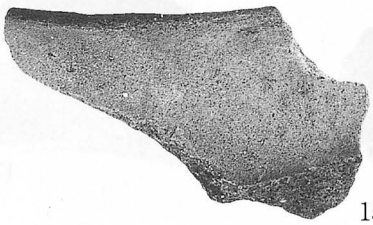

161

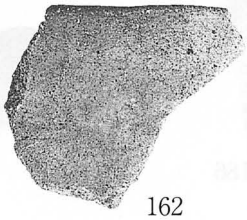

160

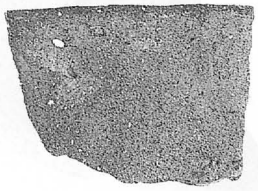

167


164

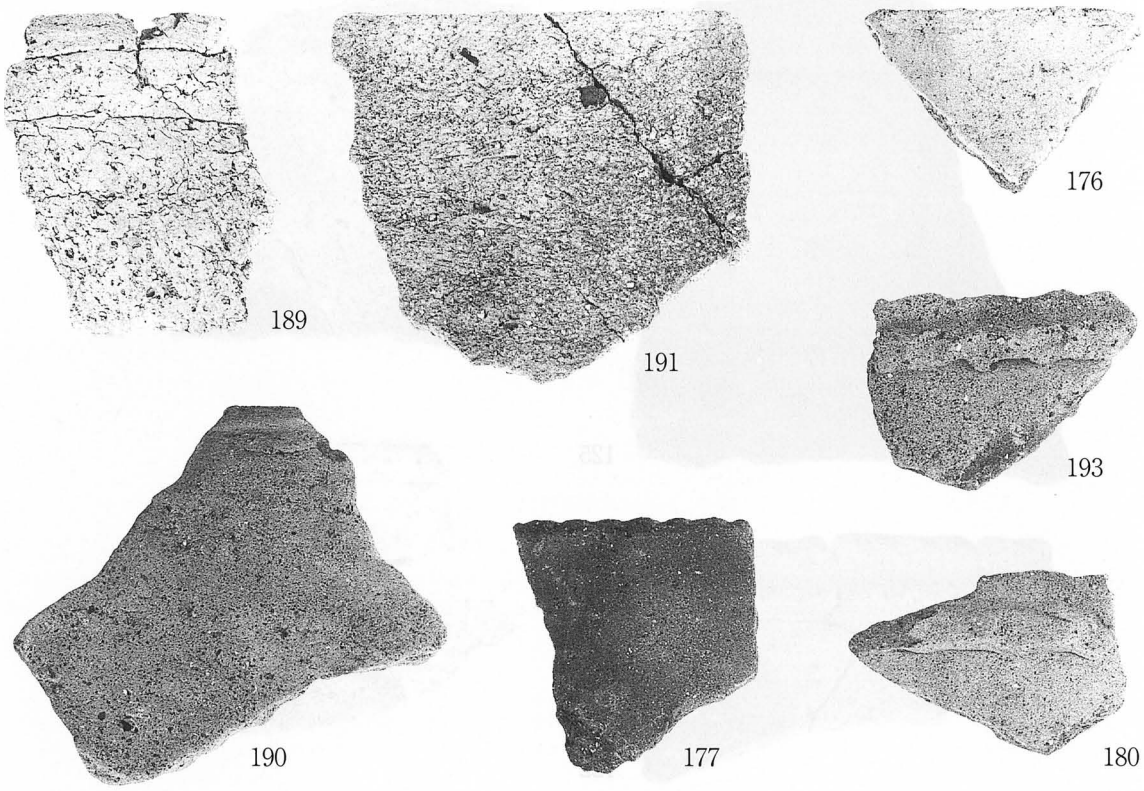

166


159

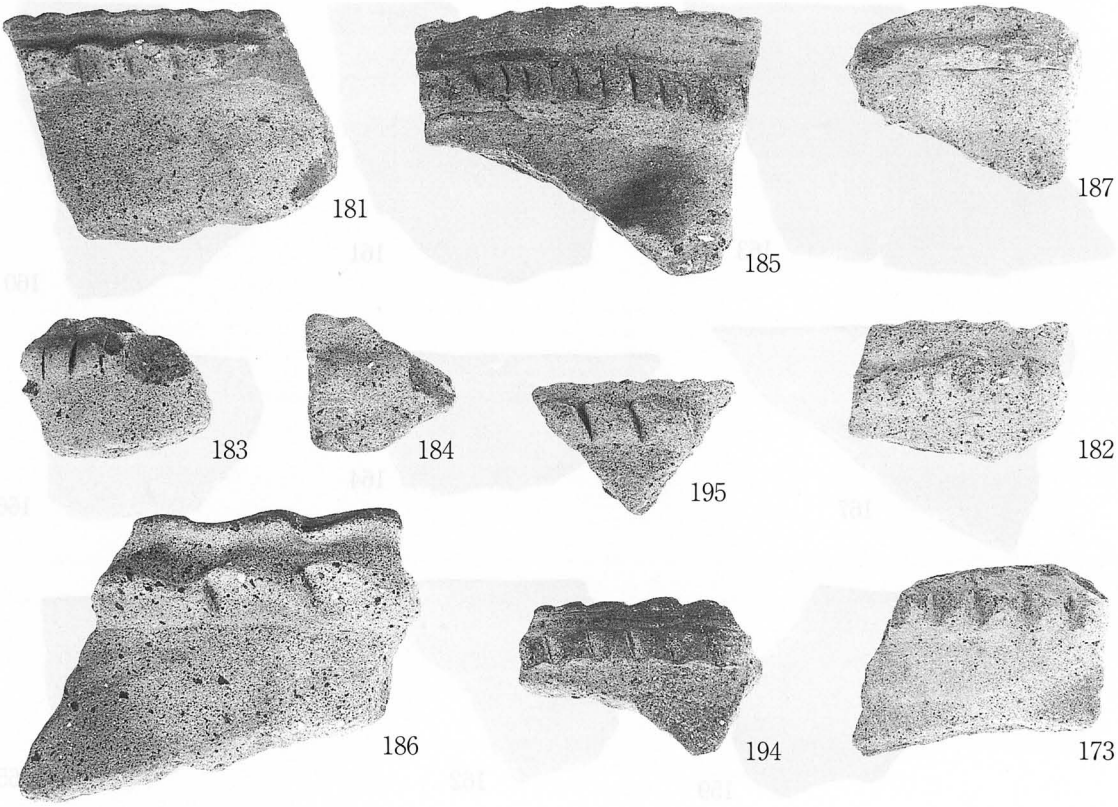

162


165

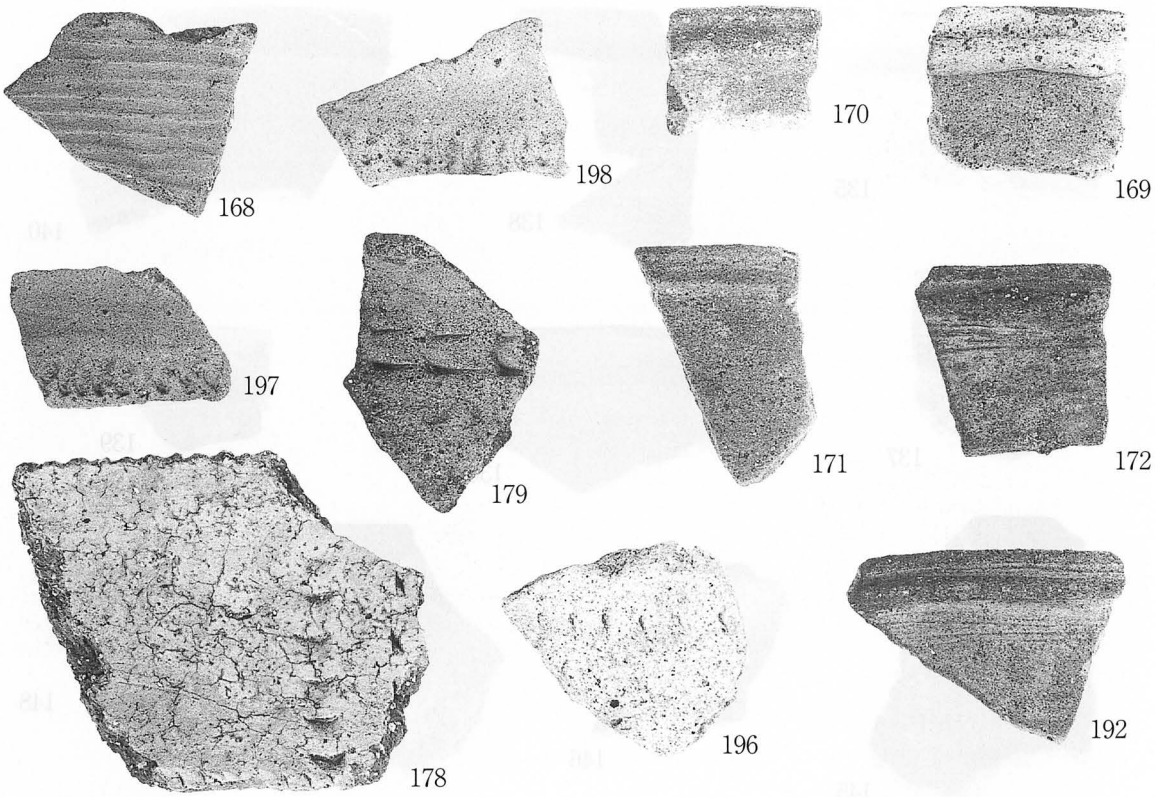
2．遺物包含層出土　縄文土器深鉢



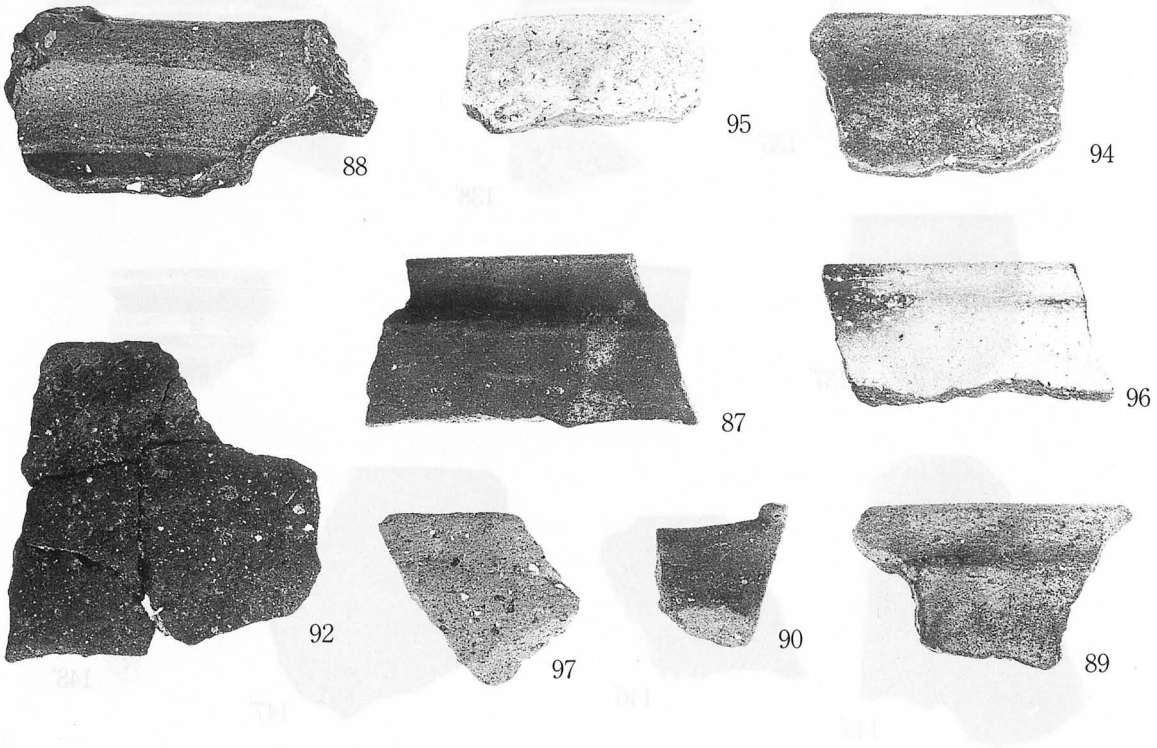
1．遺物包含層出土　縄文土器深鉢



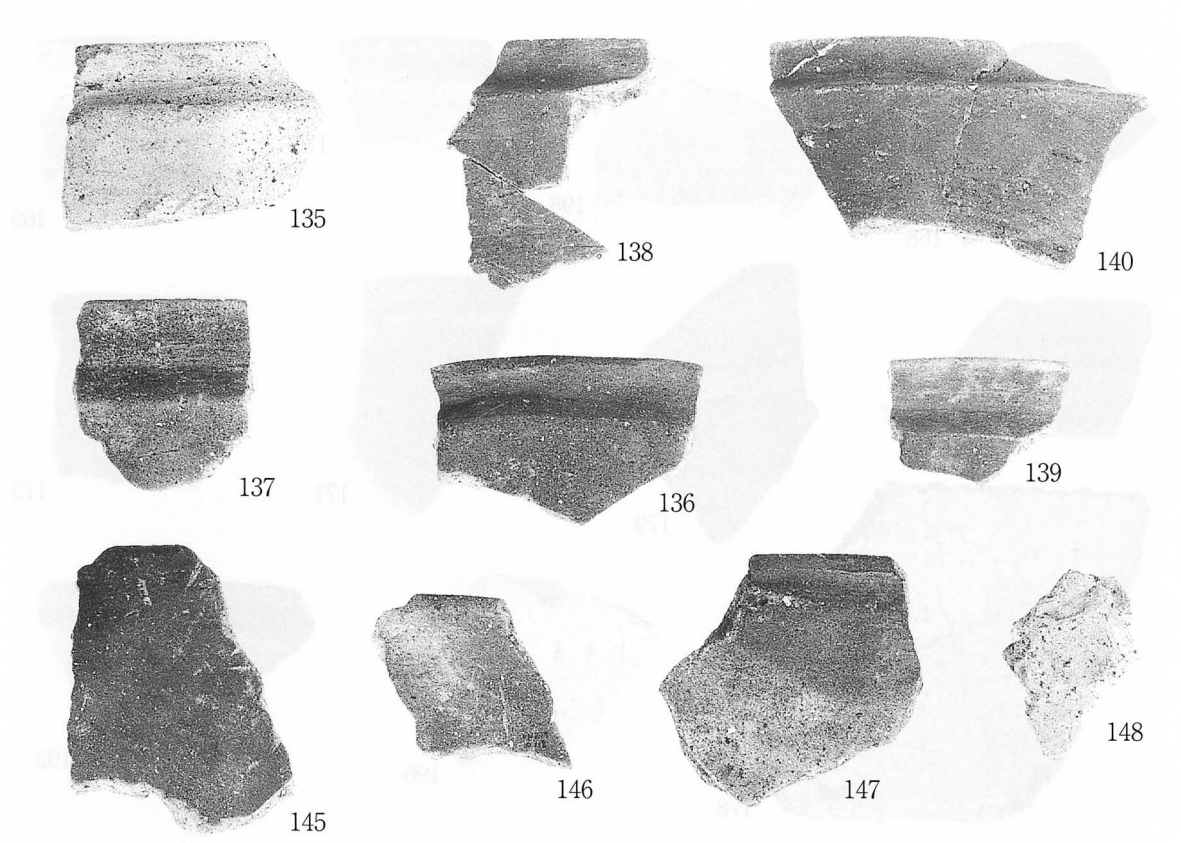
2．遺物包含層出土　縄文土器深鉢



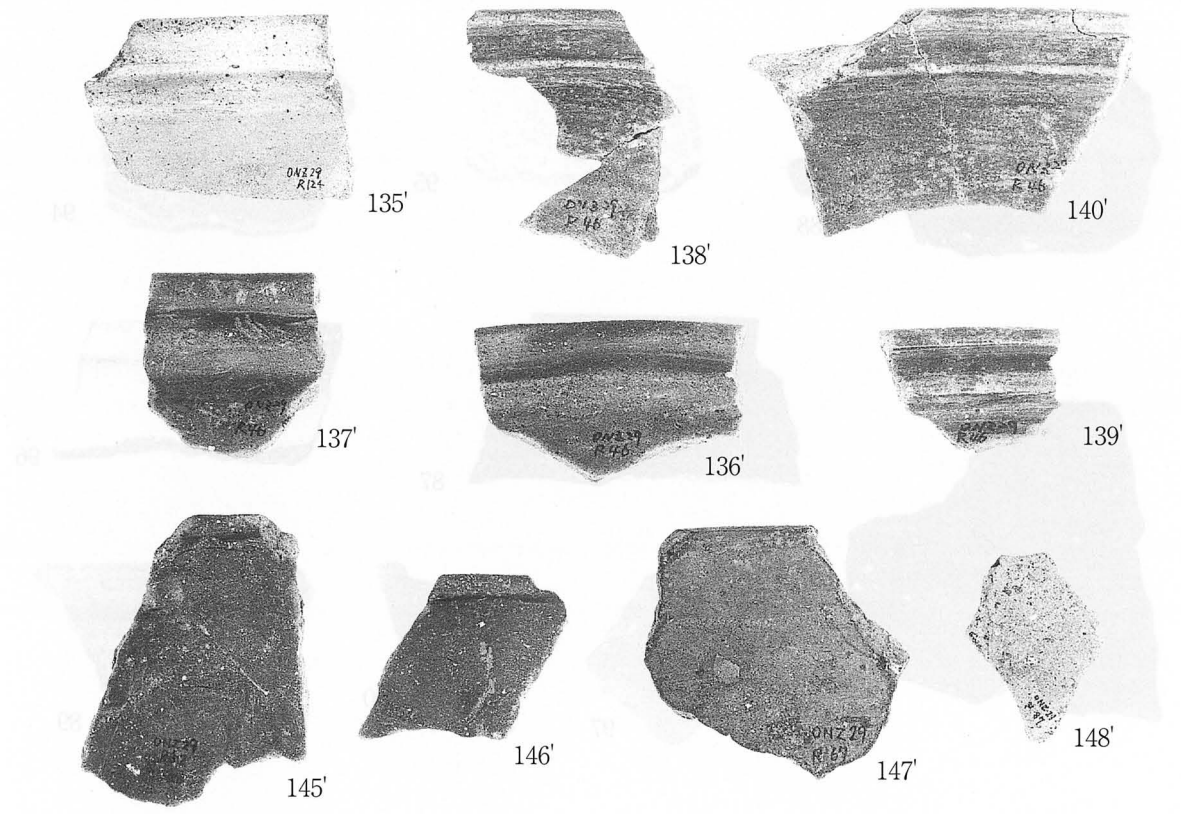
1．遺物包含層出土　縄文土器深鉢



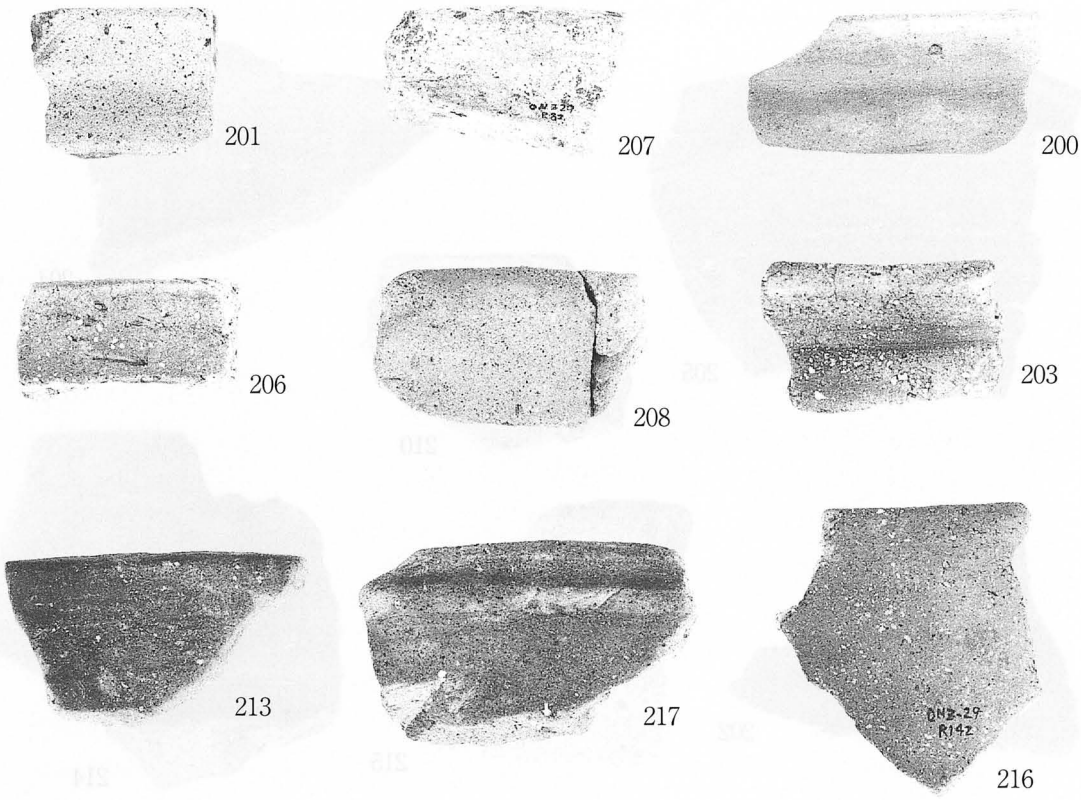
2．ＳＰ108、ＳＫ104・121、ＳＤ102・300、ＳＸ99出土　縄文土器浅鉢



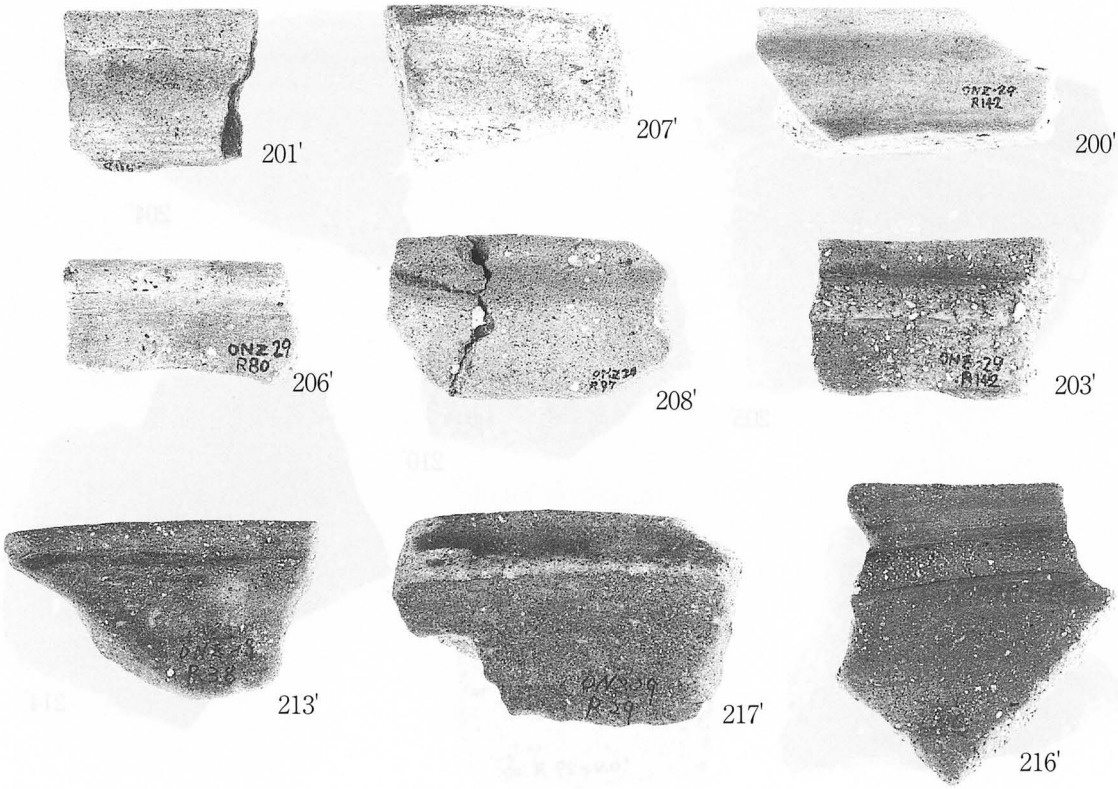
1．遺物包含層出土　縄文土器浅鉢（表）



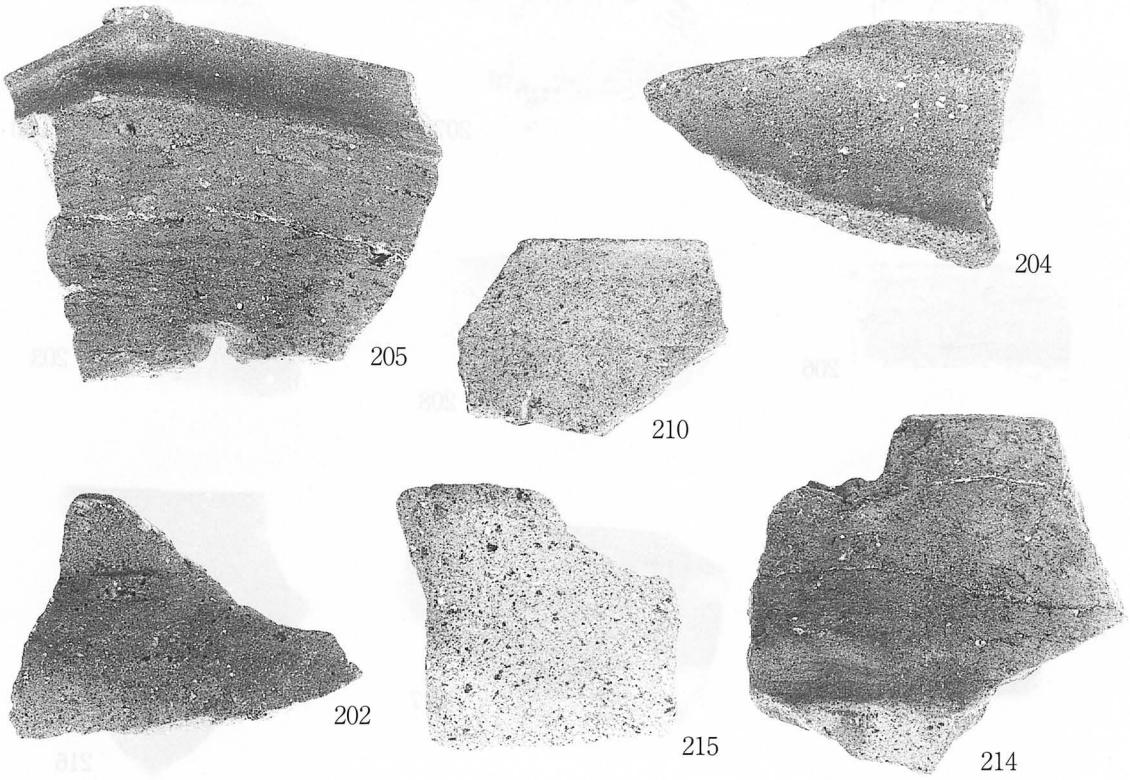
2．同上（裏）



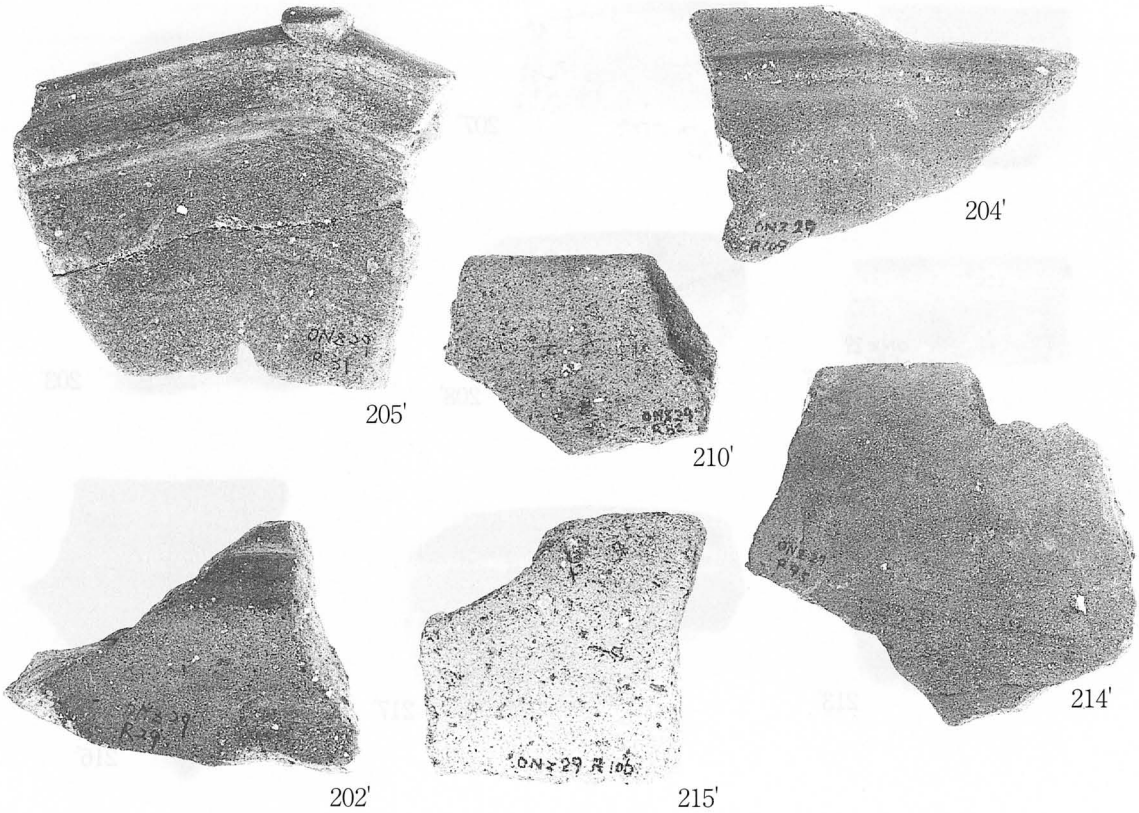
1．遺物包含層出土　縄文土器浅鉢（表）



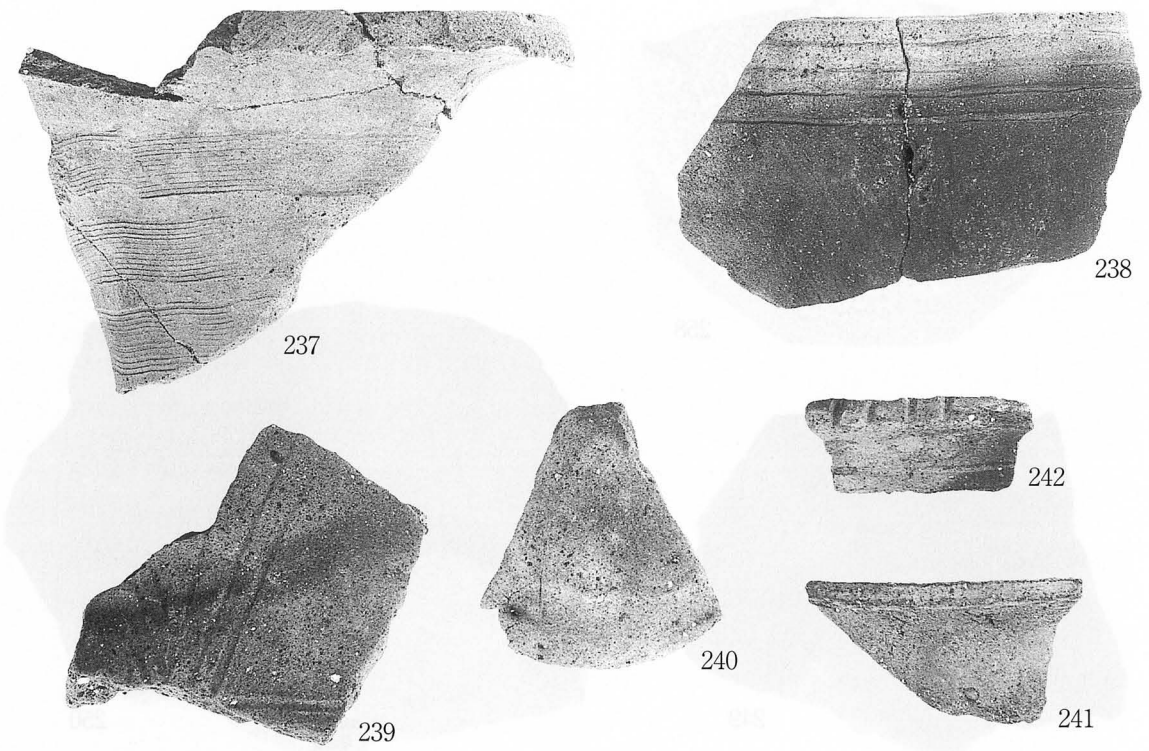
2．同上（裏）



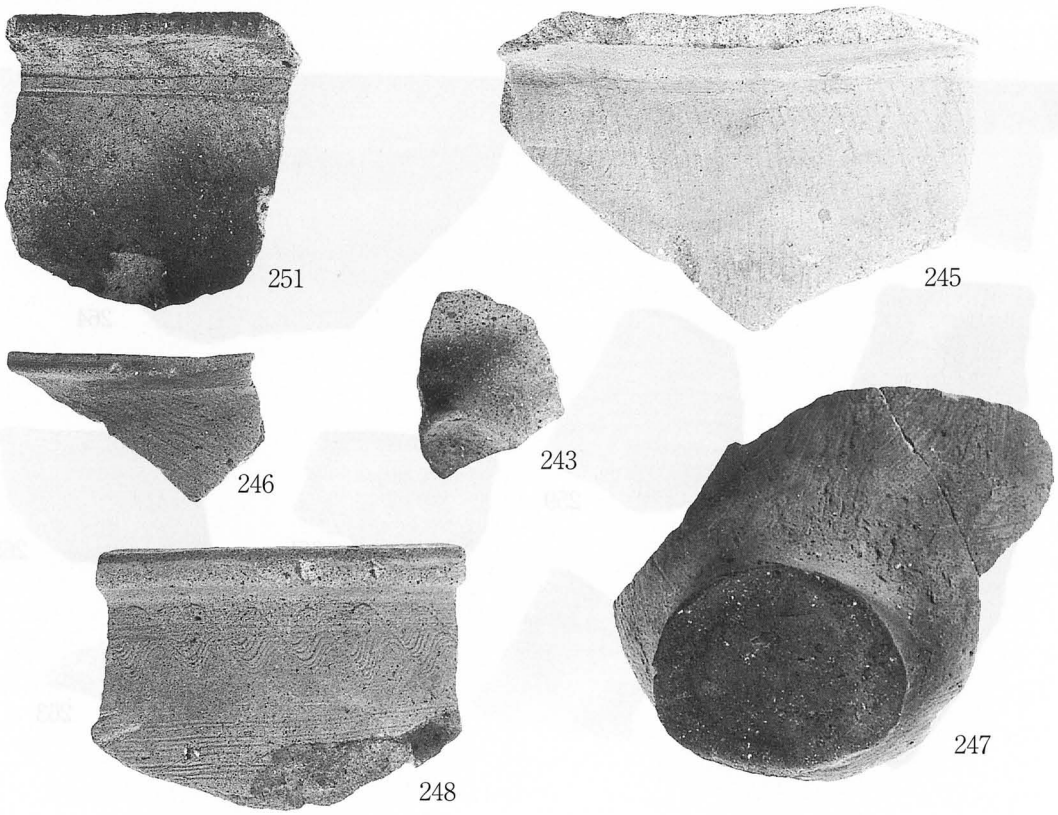
1．遺物包含層出土　縄文土器浅鉢（表）



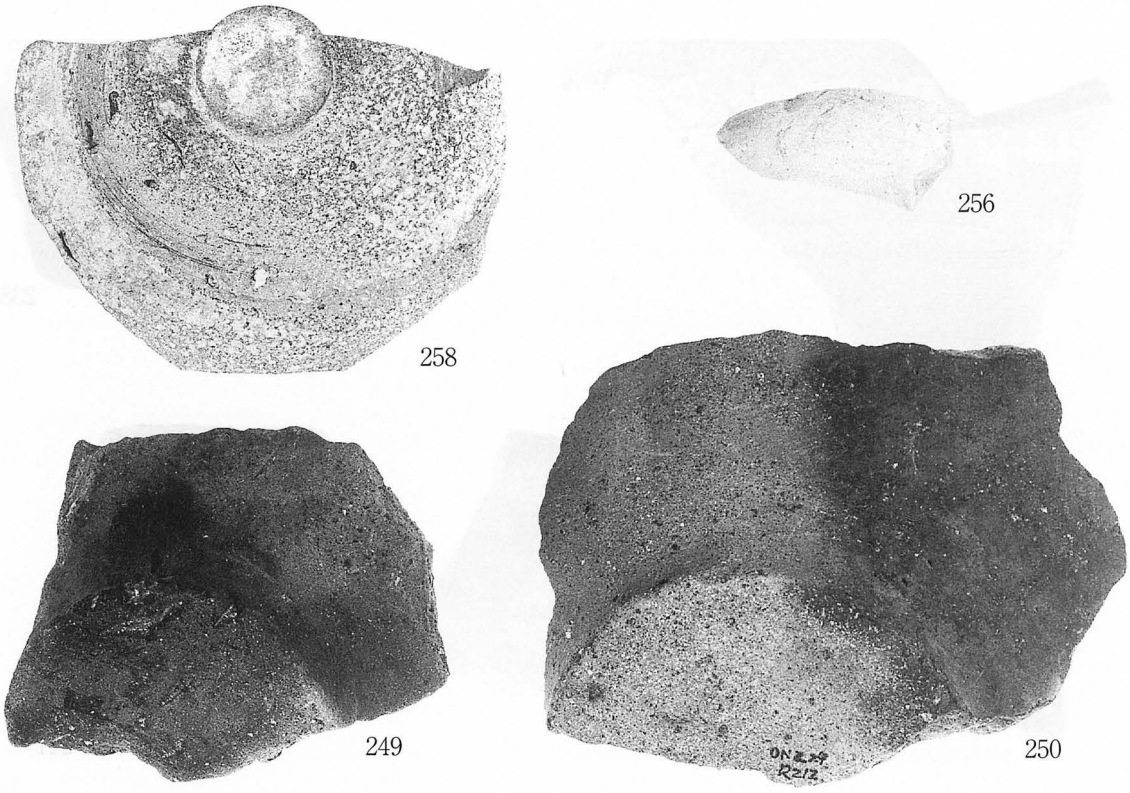
2．同上（裏）



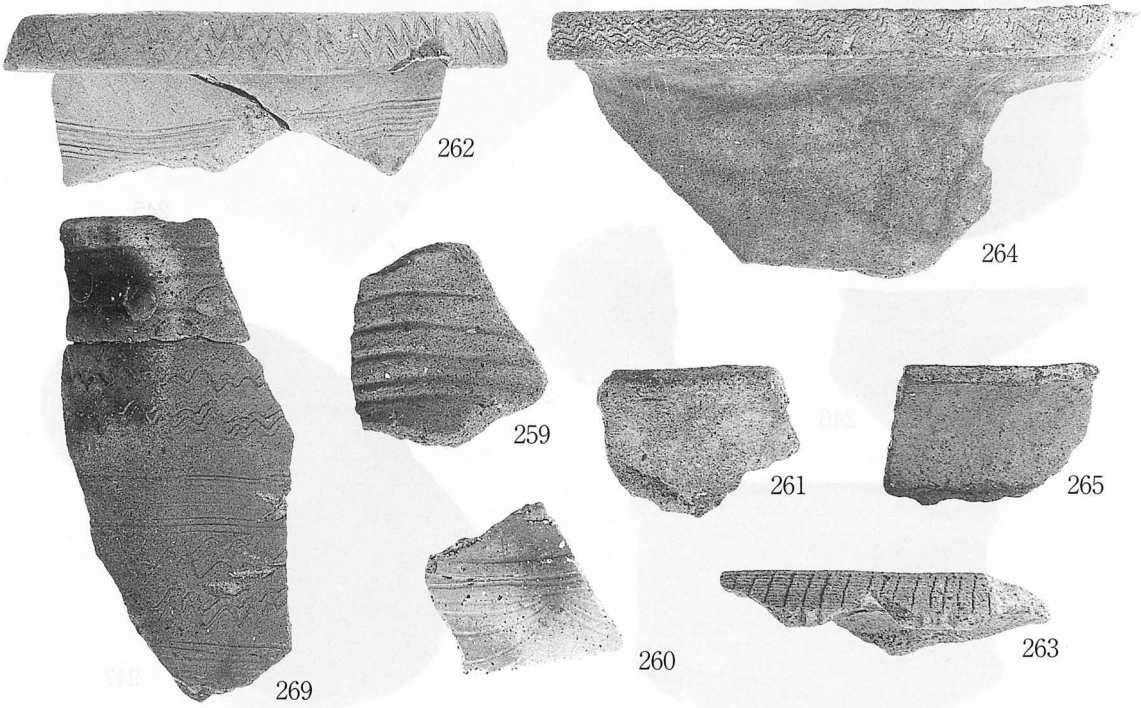
1．ＳＸ99・100出土　弥生土器壷・高杯・壷蓋・甕



2．ＳＸ201、ＳＤ300、ＮＲ１、ＳＫ121出土　弥生土器甕・鉢・底部

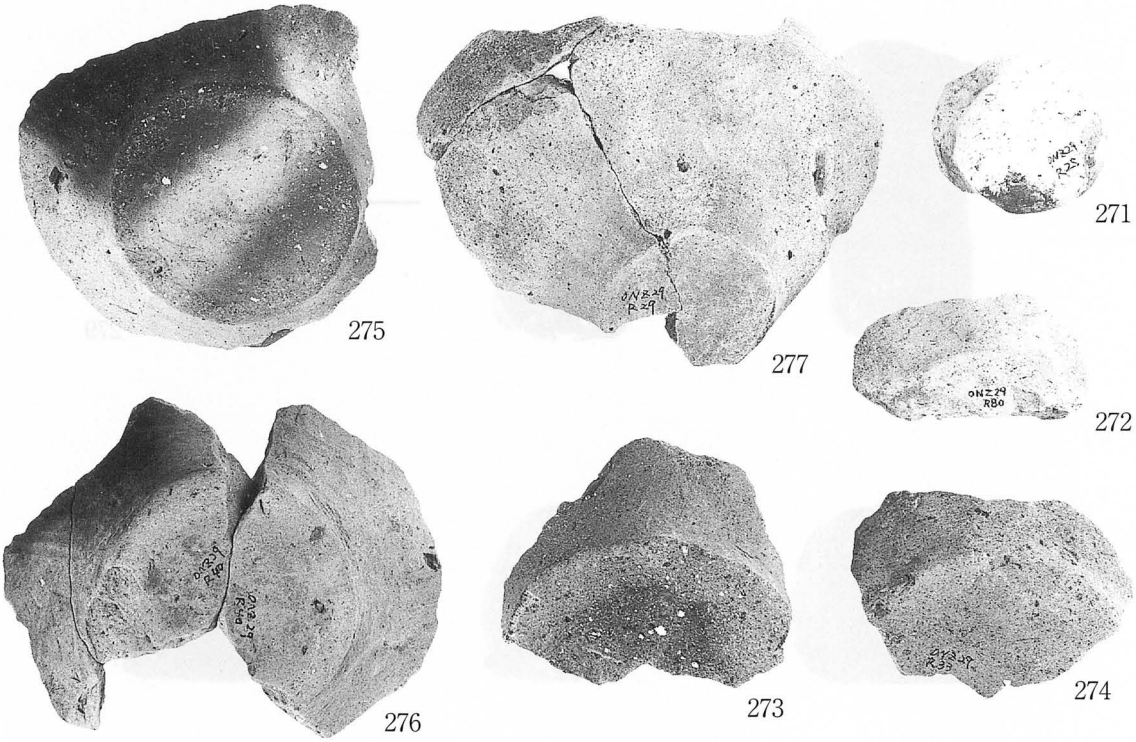


1．ＳＫ121、ＮＲ１出土弥生土器底部、ＳＤ６出土土師器皿、遺物包含層出土　須恵器蓋杯



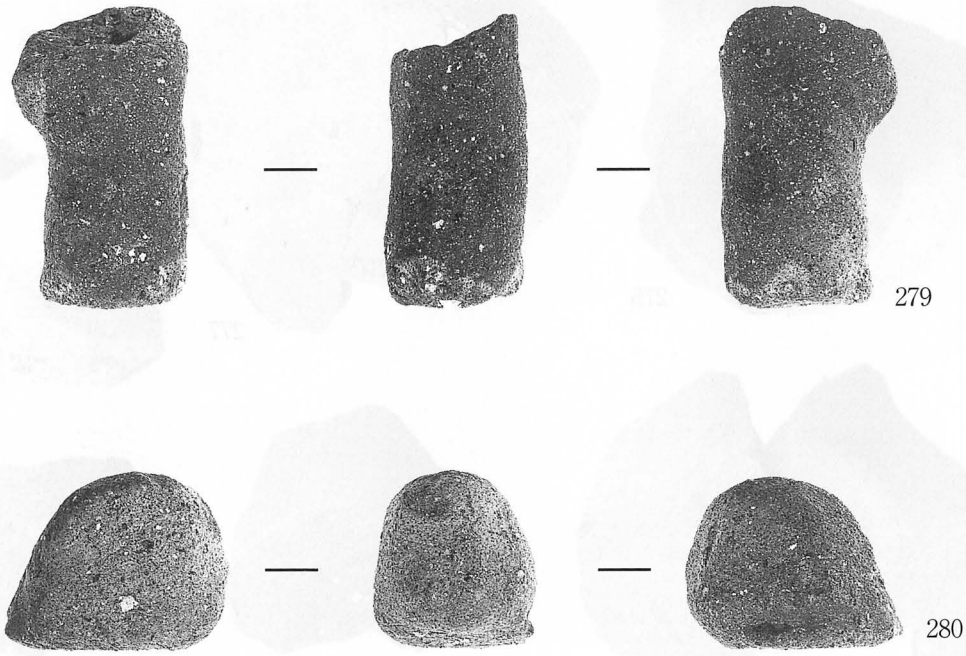
2．遺物包含出土　弥生土器壷・細頸壷・甕

1．遺物包含出土　弥生土器高杯・鉢

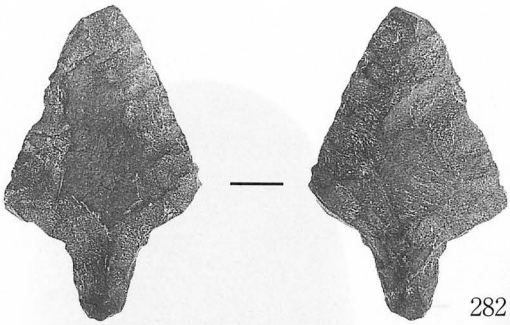


2．遺物包含出土　弥生土器底部

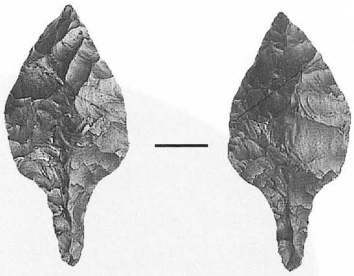
1．土製品



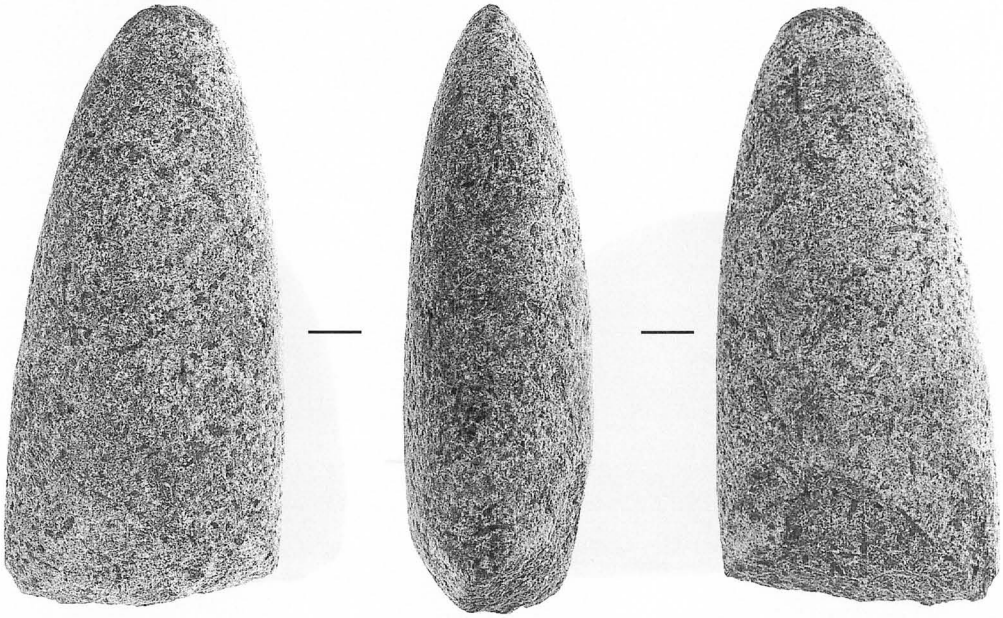
2．土製品



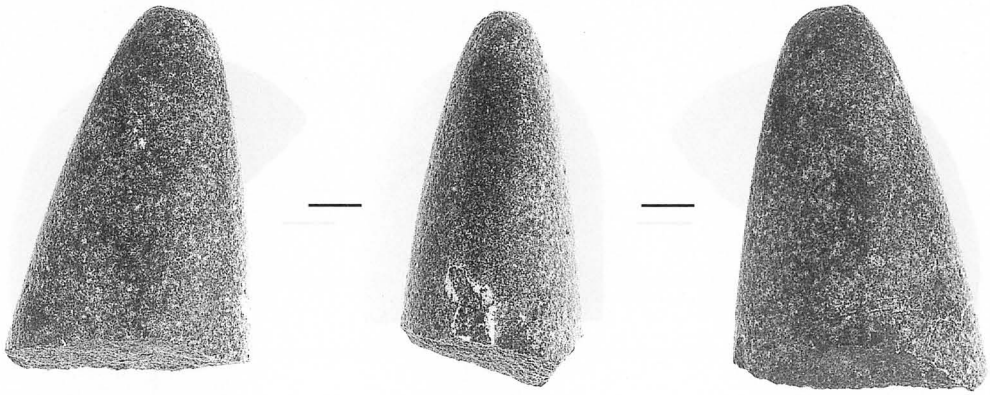
282



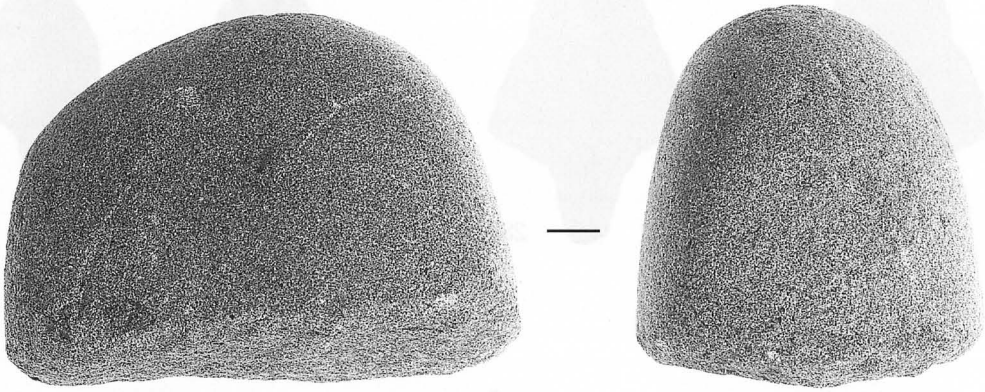
281



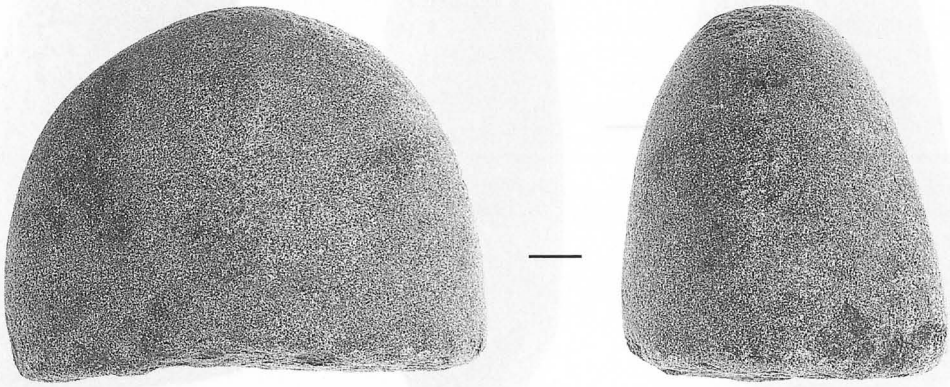
284



283

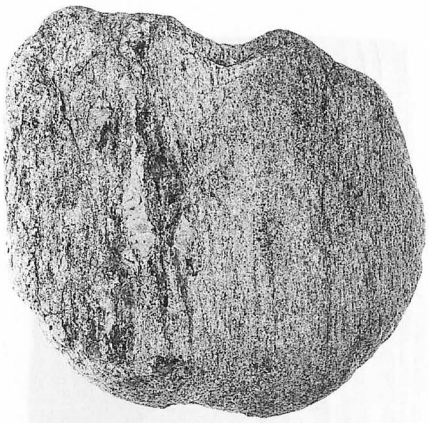


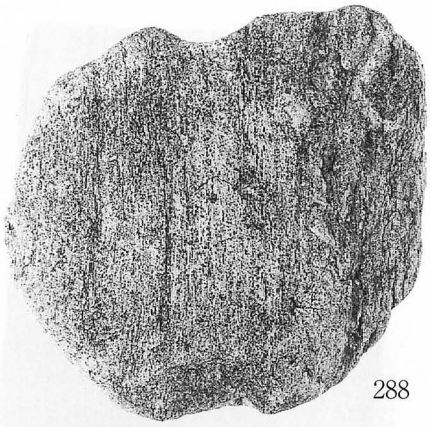
285



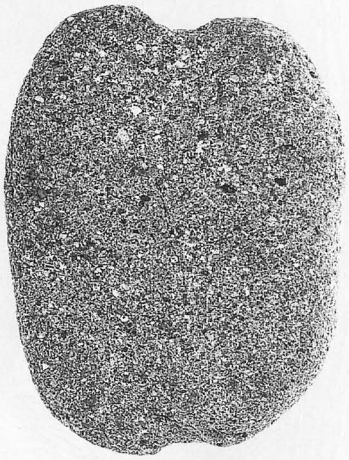
286

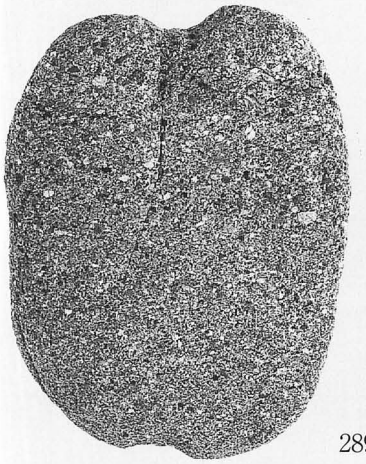
287



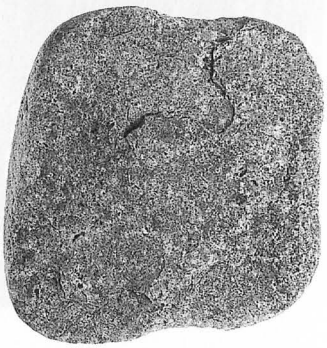


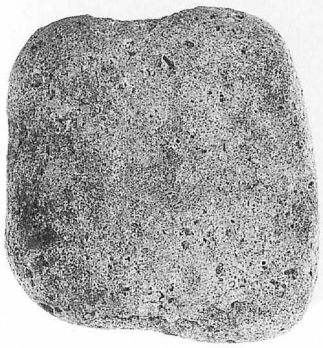
288



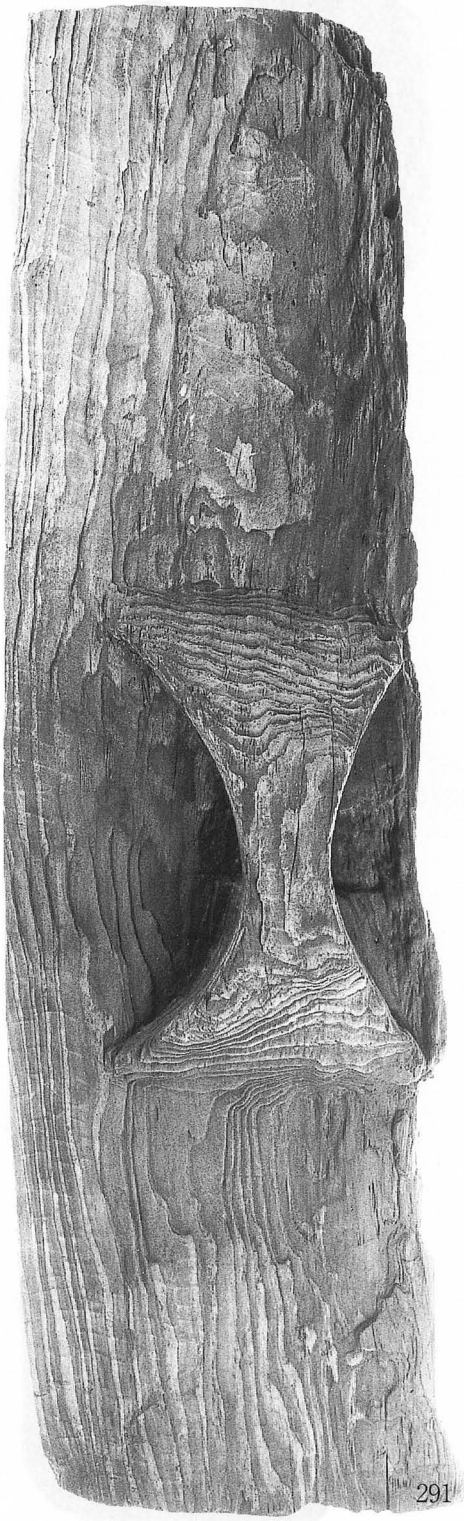


289





290



木製品

295

297

木製品

木製品

報告書抄録

ふりがな	きょうどうじゅうたくけんせつにともなう　おにづかいせきだい29じはっくつちょうさがいほう
書名	共同住宅建設に伴う　鬼塚遺跡第29次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	菅原　章太・才原　金弘
所在地	〒577-8521　東大阪市荒本北50番地の4
発行年月日	2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
おにづかいせき 鬼塚遺跡	東大阪市箱殿町 466番地	27227	46	平成18年 9月11日～ 11月22日	706.2㎡	共同住宅 建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡・ その他の墓	縄文時代 弥生時代	ピット・溝・土坑・ 土坑墓・自然流路	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器 石器・木製品・土偶	人骨検出

共同住宅建設に伴う

鬼塚遺跡第29次発掘調査概報

発　行　日　　平成19年３月31日
編集・発行　　東大阪市教育委員会
〒577-8521
東大阪市荒本北50番地の４
TEL06-4309-3283
印刷所　　近畿印刷センター